



令和5年度 神戸大学地域連携活動報告書

神戸大学地域連携推進本部

(Citation)

神戸大学地域連携活動報告書, 2023年度(令和5年度):1-117

(Issue Date)

2024-08

(Resource Type)

report

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100491547>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100491547>



**令和5年度
神戸大学地域連携活動報告書**

神戸大学地域連携推進本部

はじめに

本報告書は、神戸大学における令和5年度の地域連携活動の展開をまとめたもので、各部署のセンター等の持続的な地域連携活動に加え、公募事業での教員や学生の意欲的な取り組みについて報告しています。本学の地域連携活動を統括するために設けられた地域連携推進本部は、(1)本学と自治体等との連携活動の推進、(2)本学における地域連携の組織的な取り組みへの支援、(3)本学における地域との窓口としての連絡調整を担っています。

(1)では、本学と丹波篠山市との連携協定に基づき、各種の連携活動を実施するとともに、同市に設置されている丹波篠山フィールドステーションにおいて連携推進協議会を開催するなど、兵庫県内外の自治体との連携活動を実施しました。また、令和5年3月に締結された本学と(株)ラジオ関西との連携協定に基づき、同年4月から「神戸大学☆夢ラボ」(毎週日曜午前8:45～9:00)の放送が開始されました。これは本学の教員と学生が神戸大学における最先端の研究や地域での活動について発信するため、令和5年度は合計51回放送され、藤澤正人学長を含む教職員23名、学生6名が出演し、大学傘下の企業からも2名が出演しました。この「神戸大学☆夢ラボ」は、令和6年度も放送を継続します。

(2)では、地域連携の組織的な取り組みを全学に拡げることを目的として、各研究科の地域連携センター等への予算配分を公募制に改め、新たに「地域連携事業(組織型)」を募集しました。その結果、人文学研究科、保健学研究科、農学研究科の地域連携センター、人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート、丹波篠山フィールドステーションに加えて、国際文化学研究科、海事科学研究科の地域連携センター、経済経営研究所地域共創研究推進センターにも地域連携活動を支援する予算を新たに配分しています。また、教員、学生の地域連携活動を支援する「地域連携事業(個人型)」と「学生地域アクションプラン」の公募事業も実施しました。これまで既存の地域連携センター等を擁する4研究科に配置された教員は、地域連携事業の公募事業に応募できずでしたが、「地域連携事業(組織型)」の創設に伴って全学の教員が「地域連携事業(個人型)」に応募できるように改めました。一連の制度改正によって本学の地域連携活動が全学的に展開され、大いに活性化することが期待されます。

(3)では、自治体委員会等への教員派遣の他、自治体等主催事業への学生派遣などを実施しています。

地域連携推進本部は、組織連携推進部門、地域連携教育部門、ボランティア支援部門から構成されていますが、そのうち組織連携推進部門では、(1)～(3)で述べた自治体、企業との連携活動や学内公募事業の実施に取り組んでいます。令和5年12月には、神戸新聞社と連携して、アイデアソン「情報で、命を守る」を新設の大学都市神戸産官学プラットフォーム連携拠点「KOBECOCREATION CENTER」(神戸市中央区)で開催しました。令和7年の阪神・淡路大震災30年に向け、災害時の正確な情報提供の在り方を学生と地元メディアと一緒に考えるイベントとして企画し、サンテレビとラジオ関西も参加しました。学生とメディア関係者から成る3つの混成チームが災害時の情報発信にかかわる課題や解決策を熱心に議論しました。このアイデアソンの詳細は神戸新聞の特集記事で紹介されています。また、令和6年3月には文部科学省「地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」(COC+事業、平成27～令和元年度)のフォローアップとして、「令和5年度地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム連絡会」を対面とオンラインの併用で開催し、本学、兵庫県立大学、園田学園女子大学が各大学の特徴を活かした地域連携活動を紹介するとともに、関係大学間で意見交換を行いました。

地域連携教育部門では、COC+事業の教育プログラムとして開発した全学共通教育科目「ひょうご神戸学」と「地域社会形成基礎論」をオンデマンド方式とリアルタイム方式を併用したオンライン授業で継続的に開講しており、令和5年度は延べ983人の学生が履修しました。令和5年11月の「地域社会形成基礎論」では、神戸市長・久元喜造氏に講師を務めていただきました。神戸市の現状と課題、神戸市が現在取り組んでいる様々な施策について分かりやすくご講義いただき、学生からの多数の質問に丁寧に答えていただきました。履修生にとっては、神戸市の現在と将来について深く知る大変貴重な機会となりました。

ボランティア支援部門では、「学生地域アクションプラン」および「学生ボランティアサポート」で登録ボランティア団体の活動を支援するとともに、令和6年元旦に発生した能登半島地震からの復旧・復興を支援するための助成として、「能登半島地震復旧・復興ボランティア活動経費」の立ち上げに着手しました。また、ボランティア団体の活動等を紹介したパンフレット『地域に出る 2024』を発行するとともに、ボランティア団体の新歓イベント「ぼらカフェ」を開催しました。さらに、昨年度は休講としていた全学共通教育科目「ボランティアと社会貢献活動A」、「ボランティアと社会貢献活動B」をリニューアルして令和5年度後期に開講しました。前者は座学中心、後者は座学と現地実習を組み合わせた授業とし、農業、医療、福祉、法律、製造業、商業、マスコミなど多様な分野で活躍している学内外の専門家による講義を実施するとともに、複数のボランティアを実際に体験できるものとなりました。今後、履修生がボランティアや社会貢献活動に自らチャレンジしてくれることが期待されます。

地域連携推進本部は、地域をフィールドとして、地域の課題解決に資する教育研究と、それを実践する活動に取り組んでいる教員や学生を支援し、大学の持つ「知」を地域社会に還元することを目指しています。今後ともボランティア支援を含む幅広い地域連携活動を全学的に展開していきます。本学の地域連携活動について、地域の皆様、関係者の皆様から今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

神戸大学地域連携推進本部副本部長
田中丸 治哉

目 次

はじめに

目 次

第 I 章 地域連携推進本部活動報告(中扉)…………… 1

組織連携推進部門

地域連携教育部門

ボランティア支援部門

第 II 章 学内公募事業等活動報告(中扉)…………… 21

地域連携事業(組織型)…………… 22

人文学研究科地域連携センター：

地域歴史遺産の保全・活用事業

人文学研究科(地域連携センター)教授(センター長) 市澤 哲

保健学研究科地域連携センター：

少子高齢社会に対応した街づくり事業

保健学研究科 研究科長 秋末 敏宏

農学研究科地域連携センター：

地域連携による食料・農業・農村の持続的発展支援事業

東播磨フィールドステーション

神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボおよび

丹波篠山フィールドステーション

農学研究科(地域連携センター)教授(センター長) 田中丸 治哉

人間発達環境学研究所発達支援インスティテュート：

農山村創成のための拠点形成と人材育成事業

人間発達環境学研究所 教授 松岡 広路

国際文化学研究所地域連携センター：

兵庫・関西を中心とする地域文化振興と社会的課題の解決

国際文化学研究所(地域連携センター)教授(センター長)

板倉 史明

海事科学研究科地域連携センター：

海事科学研究科—東灘区、神戸市との連携事業の推進

海事科学研究科(地域連携センター)教授(センター長) 堀田 弘樹

経済経営研究所地域共創研究推進センター：

地域共創による兵庫県の中小企業支援策の推進

経済経営研究所(地域共創研究推進センター)教授(センター長)

家森 信善

地域連携事業(個人型)…………… 63

山田錦の米ぬかを用いた新規化粧品の開発

農学研究科 教授 宇野 知秀

異年齢・異学年組織によるイノベーション創出と

その教育的効果の実証事業

経営学研究科 准教授 原 泰史

兵庫県内の医療過疎地域の高校生を対象とした

医療系人材育成促進事業(継続事業)

医学部附属病院 教授 河野 誠司

保健学研究科 教授 石田 達郎

地域リハビリテーションを支える人材育成による

ウェルビーイング向上事業

保健学研究科 ウェルビーイング先端研究センター

特命准教授 園田 悠馬

デジタルトランスフォーメーション(DX)による

西宮市指定文化財の見える化

農学研究科 教授 石井 弘明

場所を問わない水耕栽培システムによる農業実証と研究・教育利用

農学研究科 助教 小山 竜平

鶴甲団地・有野台団地 再生・活用プロジェクト

工学研究科 准教授 栗山 尚子

市民とともに読み解く神戸の戦後生活史

- 戦災をめぐる映像資料の新たな可能性を考える

国際文化学研究所 教授 長 志珠絵

兵庫県・神戸市における特別な支援を要する

子どもへの学際的支援体制の構築

医学研究科 特命教授 永瀬 裕朗

人間発達環境学研究所 教授 北野 幸子

学生地域アクションプラン…………… 82

プロジェクト福良

～南あわじ市福良地区における古民家改修と町おこし～

プロジェクト福良

西宮市産業文化局と連携した文化財保護に関する調査・啓発活動

神戸大学保全生態学研究会

被災地地域行事支援ボランティアプロジェクト

ESD プラットフォーム WILL(大船渡 ESD プロジェクトチーム)

阪神・淡路大震災 29 周年記念講演会 次世代へのメッセージ

神戸大学学生震災救援隊

UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動

地域交流機会創出の会「なごおい」

「灘・夢ナリエ」ワークショップ活動

神戸大学 < TEAM NADA >

地域の生物多様性を学ぼう！

環境 DNA 分析体験とワークショップ活動

環境 DNA × 環境教育チーム

「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業

環境サークル「えこふる」

学生ボランティアサポート経費助成(神戸大学基金)…………… 99

災害ボランティア 仙台派遣活動

神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti

灘チャレンジ 2023

灘チャレンジ実行委員会

農業ボランティアおよび丹波黒枝豆の生産

地域密着型サークルにしき恋

阪神・淡路大震災と東日本大震災の語り部・ボランティア活動

～神戸と東北、2つの被災地を繋いで～

神戸大学ボランティアバスプロジェクト

「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業

環境サークル「えこふる」

丹波篠山市城南地区における多世代交流拠点づくり

多世代交流拠点サークル Luonto

学生震災救援隊の名前入り作業着の作成

神戸大学学生震災救援隊

災害ボランティア活動経費助成(神戸大学育友会)…………… 107

岩手県での郷土芸能支援活動と震災伝承のための学び

神戸大学ボランティアバスプロジェクト

宮城県山元町桜塚団地における災害ボランティア活動

神戸大学学生震災救援隊

宮城県仙台市荒浜における災害ボランティア活動

神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti

付録(中扉)…………… 113

地域・だいがく連携通信 Vol.31

地域・だいがく連携通信 Vol.32

第1章

地域連携推進本部 活動報告

組織連携推進部門

地域連携教育部門

ボランティア支援部門

神戸大学地域連携推進本部 令和5年度活動報告

1. 地域連携推進本部の概要

神戸大学地域連携推進本部は、自治体等と連携し本学が有する人的・物的資源を活用することにより、個性豊かな地域社会の形成を支援するとともに、地域の課題の解決を図り地域の発展に貢献することを目的としている。令和3年10月には、本学の地域連携の更なる機能強化を目的として、地域連携推進室から地域連携推進本部に改組され、組織連携推進部門・地域連携教育部門・ボランティア支援部門の3部門が設置された。

組織連携推進部門は、自治体等の他組織との組織的連携の推進、学内教員などが行う地域連携事業の支援、神戸大学地域連携推進連絡協議会や「ひょうご神戸プラットフォーム」の運営、各種コンソーシアムとの連絡調整などの業務を、地域連携教育部門は、共通教育科目における地域連携教育の実施などの業務を、ボランティア支援部門は、学生及び学生団体などへのボランティア・社会貢献活動に関する支援、共通教育科目でのボランティア・社会貢献活動教育などの業務を行っている。

日々の運営については、月2回の定例会議の実施により遂行し、本部の業務に関する重要事項を審議する際には神戸大学地域連携推進本部運営委員会を適宜開催している。また本部に関する事務は、研究推進部連携推進課において行っている。

以上の体制により、地域連携推進本部は、国際的港湾都市である神戸市をはじめとする地方公共団体、企業、地域住民、NPO等との連携を通じたグローバルな地域社会形成や、阪神・淡路大震災以降の安心・安全、健康の課題に応える異分野共創型の地域連携事業を展開している。

令和5年度の特徴的な活動は下記の通りである。

2. 組織連携推進部門

1) 自治体等との連携事業の推進に関すること

①連携協定のある自治体・企業との連携事業の推進

a. 神戸市

- ・7/14 経済学研究科が神戸市経済観光局と産業振興等に関する分野における連携協定締結
- ・8/8 「2023 神戸のつどい」へ出展
- ・11/10 (一社) 大学都市神戸産官学プラットフォームへの参画
- ・2/8、3/15 神戸市大学連携実務担当者会議への参加
- ・大学発アーバインイノベーション神戸(採択研究8件、神戸市企画調整局産学連携推進課)
- ・KOBE ゼロカーボン支援補助金(採択研究1件、神戸市環境局環境創造課)
- ・未来の神戸づくりに向けた大学等応援助成(ふるさと納税で約600万円の寄付)
- ・「アンカー神戸」に会員登録を行い、地域の活性化や新規事業の立ち上げ、各種セミナーを開催(1,001件)

b. 灘区

- ・「のびやかスペースあーち」@旧灘区役所跡地の運営(人間発達環境学研究科)
- ・灘区大学と連携したまちづくりチャレンジ事業補助金(6件採択)
- ・2/25 「灘区大学と連携したまちづくりチャレンジ事業補助金報告交流会」への参加

c. 小野市

- ・「小野市小野地区歴史調査及び小野市市場町近藤廣家文書目録作成」事業(人文学研究科)

d. 朝来市

- ・5/20 生野PR動画のお披露目上映会@あさご芸術の森(国際文化学研究科)

e. 加西市

- ・「加西市戦争遺産資料拡充調査委託」「加西市戦争遺跡調査委託」「sora かさい」歴史ゾーンでの展示協

力（人文学研究科）

- ・地元農家・企業と連携して「はりまる」を使ったコロケづくり・販売（食資源教育研究センター）

f. 丹波篠山市

- ・1/20 実践農学入門成果報告会（農学研究科地域連携センター）

g. 三木市

- ・新三木市史編纂事業『新三木市史4巻』、新三木市史地域編「青山の歴史」「三木の歴史」刊行（人文学研究科）

h. 大分県中津市

- ・6/21 出前講義 羽森茂之経済学研究科教授「データサイエンスって何だろう？」@中津南高等学校
- ・8/29～9/3 中津市アーカイブズ講座への協力
- ・3/29 中津市歴史博物館協議会への参加
- ・3/30 講演 松下正和地域連携推進本部特命准教授「古代豊前の地域社会～下毛郡を中心に」@中津市歴史博物館

i. 神戸新聞社

- ・12/9 「神戸大学×神戸新聞社 with サンテレビ&ラジオ関西 情報で、命を守る」アイデアソンの実施

j. サンテレビジョン

- ・震災文庫等と震災動画の公開に関する研究会（人文学研究科）

k. ラジオ関西

- ・4月 「神戸大学夢☆ラボ」放送開始（毎週日曜 8:45～9:00）…計51回放送。藤澤正人学長を含む教職員23名、学生6名ほかが出演。

②神戸大学地域連携推進連絡協議会の開催

- ・1/12 令和5年度丹波篠山市・神戸大学連携推進協議会の開催@丹波篠山市

③各種プラットフォームの運営、参画

a. 大学コンソーシアムひょうご神戸 大学プラットフォーム

- ・理事会、定時総会、学生交流委員会、リスクに関する情報連絡会、ひょうご産官学連携協議会総会への委員派遣

b. 地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム（COC+事業）

- ・2/25 園田学園女子大学×神戸大学 歴史文化領域シンポ「災害復興と地域歴史遺産」共催
- ・3/12 プラットフォーム連絡会（ハイブリッド）開催

c. 大学都市神戸産官学プラットフォーム

- ・11/10 プラットフォーム設立（藤澤正人神戸大学長が副代表理事）
- ・1/29 神戸・三宮に新設された交流拠点「KOBE Co CREATION CENTER」で設立総会と記者会見

④新規に地域連携協定を締結した部局への支援

a. 経済学研究科と神戸市経済観光局

- ・7/14 産業振興等に関する分野における連携協定締結
- ・双方の保有する資源を有効活用することにより、市政策立案における経済学的知見の反映と学術研究の進展を通じて、地域経済の発展を目指す。



b. 経済学研究科と養父市

- ・7/25 「農業特区」養父市における持続可能な農業・農村の発展に関する連携協定締結
- ・国家戦略特区の効果や人口減少下における農業振興及び地域の課題解決に資する研究を官学一体となって積極的に取り組み、また、相互の人的・知的資源の交流及び活用を図り、人材育成や学術の振興の推進を図る。



c. 国際文化学研究科と北海道ニセコ町

- ・3/29 包括的な地域連携に関する協定（部局協定）を締結
- ・国連世界観光機関のベスト・ツーリズム・ビレッジに選ばれたニセコ町と、神戸大学の国連世界観光機関への賛助加盟主管部局である国際文化学研究科との協定締結を通じて、観光まちづくりからさらに一歩進み、国際的な観光地域づくりというローカルとグローバルをつなぐイシューについて、研究教育を深化させることを図る。



2) 本学における地域連携の組織的な取組への支援に関すること

①各研究科地域連携センター等が行う地域連携事業への支援

人文学研究科、保健学研究科、農学研究科、海事科学研究科、国際文化学研究科の各地域連携センターなどが行う事業の把握や、今後の事業展開に関する相談、調整、事業の後方支援を行った。自治体等から当本部に寄せられる要望などに対し、各地域連携センターに繋ぎ調整することで、大学全体の地域連携を推進した。

②学内公募事業の実施

本部では、地域連携の組織的な取り組みを全学に広げることを目的として、各研究科の地域連携センター等への予算配分をR5年度より公募制に改め、新たに「地域連携事業（組織型）」を導入した。その結果、従前の地域連携センター（人文学研究科・保健学研究科・農学研究科・国際文化学研究科・海事科学研究科）、人間発達環境学研究科発達支援インスティテュート、丹波篠山フィールドステーションに加え、経済経営研究所地域共創研究推進センターにも地域連携活動を支援する予算を配分することが可能となった。

また、教職員や学生が行う地域活性化に資する新たな取り組みを支援する「地域連携事業（個人型）」と「学生地域アクションプラン」を実施した。昨年度との大きな相違点として、これまでは、既存の地域連携センター等を有する4研究科に配置された教員は「地域連携事業」に応募できなかったが、「地域連携事業（組織型）」の創設に伴って、全学の教員が「地域連携事業（個人型）」に応募できるよう改めた。

a. 地域連携事業（組織型）（全部局対象）

人文学研究科	地域歴史遺産の保全・活用事業
保健学研究科	少子高齢社会に対応した街づくり事業
農学研究科	地域連携による食料・農業・農村の持続的発展支援事業
人間発達環境学研究科	持続可能な社会づくりをめざすプラットフォーム創成支援事業
丹波篠山フィールドステーション	農山村創成のための拠点形成と人材育成事業
国際文化学研究科	兵庫・関西を中心とする地域文化振興と社会的課題の解決
海事科学研究科	海事科学研究科－東灘区、神戸市との連携事業の推進
経済経営研究所	地域共創による兵庫県の中小企業支援策の推進

b. 地域連携事業（個人型）（教職員対象）

農学研究科 教授 宇野知秀	山田錦の米ぬかを用いた新規化粧品の開発
経営学研究科 准教授 原泰史	異年齢・異学年組織によるイノベーション創出とその教育的効果の実証事業
医学部附属病院 教授 河野誠司 保健学研究科 教授 石田達郎	兵庫県内の医療過疎地域の高校生を対象とした医療系人材育成促進事業（継続事業）
保健学研究科/ ウェルビーイング先端研究センター 准教授 園田悠馬	「地域リハビリテーションを支える人材育成によるウェルビーイング向上事業」
農学研究科 教授 石井弘明	デジタルトランスフォーメーション（DX）による西宮市指定文化財の見える化
農学研究科 助教 小山竜平	場所を問わない水耕栽培システムによる農業実証と研究・教育利用
工学研究科 准教授 栗山尚子	鶴甲団地・有野台団地 再生・活用プロジェクト
国際文化学研究科 教授 長志珠絵	市民とともに読み解く神戸の戦後生活史 - 戦災をめぐる映像資料の新たな可能性を考える
医学研究科 特命教授 永瀬裕朗 人間発達環境学研究科 教授 北野幸子	兵庫県・神戸市における特別な支援を要する子どもへの学際的支援体制の構築

c. 学生地域アクションプラン（学生対象）

プロジェクト福良	プロジェクト福良～南あわじ市福良地区における古民家改修と町おこし～
神戸大学保全生態学研究会	西宮市産業文化局と連携した文化財保護に関する調査・啓発活動
ESD プラットフォーム WILL (大船渡 ESD プロジェクトチーム)	被災地地域行事支援ボランティアプロジェクト
神戸大学学生震災救援隊	阪神・淡路大震災 29 周年記念講演会 次世代へのメッセージ
地域交流機会創出の会「なごぶい」	UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動
神戸大学＜TEAM NADA＞	「灘・夢ナリエ」ワークショップ活動
環境 DNA × 環境教育チーム	地域の生物多様性を学ぼう！環境 DNA 分析体験とワークショップ活動
環境サークル「えこふる」	「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業

③地域連携事業に関する外部資金の獲得と周知

a. 大学発アーバインイノベーション神戸（神戸市企画調整局産学連携推進課）

2020 年度から始まった、神戸市が抱える地域課題や社会課題の解決につながる若手研究者の研究活動経費助成制度であり、本学の教員から 8 件が採択された。

人間発達環境学研究科	燃料貧困指標を用いたエネルギー価格高騰に対する家計脆弱性の分析と対策の提案
工学研究科	大学建物における CO2 排出量削減戦略策定のための削減効果の予測に関する研究
経済経営研究所	大都市における最低賃金の引き上げが周辺地域に与える影響の分析
都市安全研究センター	コロナ住居喪失危機を契機としたハイブリッド型住宅セイフティネットの構築
国際人間科学部	神戸市長田の継承語・継承文化の保存と教育への活用を目指した総合的研究
農学研究科	耕畜食地域連携を指向した肉牛ふん尿の新規資源循環プロセスの開発
農学研究科	神戸ビーフの美味しい香りの生成過程の解明とその関連遺伝子の探索
工学研究科	医療機器開発促進に向けたカスタマイズ部品加工の自動化システム

b.KOBE ゼロカーボン支援補助金（神戸市環境局環境創造課）

2050年ゼロカーボンの実現に向け、神戸の脱炭素と地域貢献の取組みにチャレンジする神戸市民、神戸で活動する団体、法人などを応援するため創設した「KOBE ゼロカーボン支援補助金」について、本学の教員から1件が採択された。

経営学研究科	六甲山上の里山の整備および利活用に関する学校や民間団体との連携活動を通じた持続可能な地域づくり
--------	---

c. 大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成（灘区地域協働課）

灘区域における地域活性化に資する事業を灘区が支援する「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成」について、本学の教職員から2件、学生団体から4件が採択された。

灘地域活動センター（N.A.C.）	灘区内の災害復興住宅の集会所におけるふれあい喫茶の運営、戸別訪問活動
障がいのある青年の生涯学習支援会（ふぉーえす）	「女子会+」「よる・あーち合宿」
まちプロジェクト実行委員会	まちプロジェクト'23
神戸大学天文研究会	なだ星まつり
環境サークル「えこふる」	学童保育所での「環境かるた」を用いた出前授業
神戸大学大学院人間発達環境学研究科	鶴甲いきいきまちづくりプロジェクト

d. 姫路市大学発まちづくり研究助成事業（姫路市政策局高等教育室）

姫路市の政策や課題について提案等を行う研究、フィールドワークを中心とした姫路市のまちづくりに関して提案等を行う研究に対して支援を行う助成制度であり、本学の教員から3件が採択された。

農学研究科	スギ人工林の再生林・広葉樹林化に関する研究
国際文化学研究科	留学生・短期交流学生のモニターツアーに基づく国際誘客の基礎調査
経済学研究科	よいとこ健診が地域コミュニティにもたらす効果

3) 本学における地域との窓口としての連絡、調整に関すること

①自治体委員会等への教員派遣

<兵庫県内>

- ・神戸市／大学連携セミナー「こうべ生涯学習カレッジ」講師／教員1名
- ・神戸市／兵庫県立大学「男女共同参画社会」非常勤講師／教員1名
- ・神戸市／甲南学園「ソーシャルキャピタル論」非常勤講師／教員1名
- ・神戸市／なごさふれあいのまちづくり協議会シンポジウムコーディネーター／教員1名
- ・高砂市／高砂市文化財審議委員会委員／教員1名
- ・尼崎市／ふすまはがし作業講習会講師／教員1名
- ・宍粟市／文化財保存活用地域計画協議会委員／教員1名
- ・加古川市／兵庫大学 EC カレッジ講座講師／教員1名
- ・加古川市／いなみ野学園4年制講座・大学院講座講師／教員1名
- ・姫路市／姫路市立生涯学習大学校2年郷土史コース講座講師／教員1名
- ・姫路市／姫路大学通信教育課程講座講師／教員1名
- ・猪名川町／猪名川町文化財審議委員会委員／教員1名
- ・三木市／行政不服審査会委員／教員1名
- ・三木市／情報公開審査会・個人情報保護審査会委員／教員1名

・加西市／情報公開審査会委員・個人情報保護審査会委員・行政不服審査会委員／教員 1 名
＜兵庫県外＞

- ・大分県中津市／アーカイブズ講座講師／教員 1 名
- ・大分県中津市／中津市歴史博物館特別展講演・協議会委員／教員 2 名
- ・大阪府／防災会議委員／教員 1 名
- ・大阪府箕面市／箕面市文化財保護審議会／教員 1 名
- ・岐阜県郡上市／ふすま下張りはがし講習会講師／教員 1 名
- ・岐阜県岐阜市／ふすま下張りはがし講習会講師／教員 1 名
- ・宮城県仙台市／東北工業大学建築学部建築学科調査協力／教員 1 名
- ・新潟県長岡市／旧山古志村事業の推進・実施／教員 1 名
- ・東京都新宿区／法政大学シンポジウム講師／教員 1 名

②自治体等主催事業への学生派遣・学内周知等の協力

- ・神戸市／神戸 2024 世界パラ陸上競技選手権大会 1 日 1 万人集客 PROJECT 参加学生募集
- ・神戸市／高齢者のスマホ活用を支援する学生募集
- ・神戸市／学生のみなさまへの「こころの相談窓口」のご案内
- ・兵庫県／兵庫県地球温暖化防止活動学生推進員募集のご案内
- ・神戸市／BE KOBE 学生フォーラム開催のご案内
- ・神戸市／こども家庭庁「こども若者★いけんぷらす」メンバー募集のご案内
- ・神戸市／（全学生対象）3分アンケート「神戸といえば、〇〇やんなあ」を教えてください
- ・神戸市／銭湯デジタルスタンプラリー「ニューヨークラリー」の開催
- ・神戸市／学生短時間雇用の申込受付開始
- ・神戸市／日経 EXPO フォーラム『Z 世代と考える未来社会』のご案内
- ・神戸市／「宿泊型家族留学 in 神戸市」参加者募集
- ・神戸市／無重力睡眠セミナーのご案内
- ・神戸市／「灘の酒」ギフト箱デザインコンテスト開催 デザイン募集のお知らせ
- ・神戸市／「神戸オータムフェスティバル」での学生支援フードプロジェクトのお知らせ
- ・神戸市／放課後児童クラブのアルバイトスタッフ登録募集
- ・神戸市／新入生等への「闇バイト」「投資詐欺」等の被害防止啓発について
- ・神戸市／「兵庫・神戸スマートシティ MEETUP」開催のお知らせ
- ・神戸市／神戸市次期総合計画策定にあたる、若者世代の意見収集へのご協力をお願い
- ・神戸市／多様な大都市制度シンポジウム開催案内および参加者募集に関するお知らせ
- ・兵庫県／ひょうご絆プロジェクトに係る「HYOCON（ヒョウコン）の開催について
- ・神戸市／BEKOBE 学生ナビ新規登録キャンペーンのお知らせ
- ・神戸市／11/24～26「神戸モダン建築祭」へお越しください
- ・神戸市／学生が企画実施！ KOBE2024 世界パラ陸上応援スタンプラリーの開催
- ・神戸市／神戸が目指すべき国際都市としてのあり方に関するアンケートへのご協力をお願い
- ・神戸市／フードサポートこうべ～食料品・生活用品の年末配布会～開催について
- ・神戸市／神戸市内大学生アンケートの協力依頼について
- ・神戸市／大学発アーバンイノベーション神戸 進捗報告会
- ・神戸市／「神戸自殺総合対策フォーラム」"助けて"が言えないこども・若者たちのご案内
- ・神戸市／多文化共生×まちなかクリーン作戦 in 兵庫区
- ・神戸市／神戸市公立学校で実施可能な連携授業（探究学習）の情報提供
- ・神戸市／大学と連携した地域課題の調査研究業務の公募開始

- ・兵庫県／ひょうごの宝探しプロジェクトの作品募集にかかる周知について

③自治体、企業等からの相談対応

- ・養父市／市長ら来学（R5.4.6）→経済学研究科が部局協定締結
- ・宝塚市／企画経営部政策室来学（R5.9.6）、神戸大学との包括連携協定について
- ・上郡町／町長ら来学（R5.12.26）、神戸大学との連携事業の進め方について

3. 地域連携教育部門

1) COC + 事業に関する「地域の元気づくり教育プログラム」の実施

文部科学省公募事業「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、兵庫県では本学が申請大学となり、「地域創生に伝える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム」事業が採択された（H27～R1）。

大学からは兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学が、自治体からは兵庫県・神戸市が、産業界からは神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社が参画し、一体となってプラットフォームを構築し、地域の課題解決に資する人材育成と若者の地元定着を目的とした事業を採択期間終了後も継続して展開している。

①「地域の元気づくり教育プログラム」の実施 ※オンデマンド型（一部 zoom 利用のリアルタイム型）

	令和5年度履修者数（取消除く）		履修者数											
	ひょうご神戸学	地域社会形成基礎論	文	法	経済	経営	理	医学	保健	工	農	国人	海洋	計
第2Q	199名	196名	3	20	27	20	8	4	7	55	19	23	13	199
第3Q	298名	290名	7	9	23	27	13	12	10	45	13	25	12	196
			12	21	37	37	11	13	17	77	17	29	27	298
			9	18	43	35	11	0	15	65	21	40	33	290

COC+ 事業の教育プログラムとして全学共通教育科目の中で、ひょうご神戸学（1単位）・地域社会形成基礎論（1単位）をH29年度より開講し、事業終了後も継続開講するとともに、本学の地域理解に関連する教育プログラムの体系化、学内・学外の教育環境を整備。いずれの授業も履修定員（第2Qは200名、第3Qは300名）に対し8～10倍の希望者があり、近年の学生の地域創生に対する興味関心の高さがうかがえる。

a. 「ひょうご神戸学」（月曜5限、第2・第3Q開講）

地域で活躍できる人材、地元ひょうご・神戸において地域の担い手となる人材の育成を目的とし、ひょうご・神戸地域に関する、経済・地理・歴史・戦災・災害などの基礎的知識についての講義

ひょうご神戸学（第2Q）担当者

1	6月12日	経済から見る兵庫・神戸のあゆみ	山地秀俊	元神戸大学経済経営研究所教授
2	6月19日	兵庫県・神戸市の農業	田中丸治哉	農学研究科教授
3	6月26日	兵庫県・神戸市の歴史	奥村弘	理事副学長・人文学研究科教授
4	7月3日	兵庫県の現在	岩切玄太郎	兵庫県企画部総合企画局計画課課長
5	7月10日	神戸市の現状と未来の姿	藤岡健	神戸市企画調整局参画連携推進部長
6	7月14日	兵庫県・神戸市の地理	菊地真	人文学研究科准教授
7	7月24日	兵庫県の災害と戦災	佐々木和子	人文学研究科地域連携センター研究員
8	7月31日	兵庫県の地域課題 地元メディアの視点から	黒田浩二	神戸新聞社経営企画局経営企画部次長 兼教育事業戦略室員

ひょうご神戸学（第3Q）担当者

1	10月2日	兵庫県・神戸市の歴史	松下正和	地域連携推進本部特命准教授
2	10月16日	経済から見る兵庫・神戸のあゆみ	衣笠智子	経済学研究科教授
3	10月23日	地域文化からみる神戸	山地久美子	地域連携推進本部特命准教授
4	10月30日	兵庫県の現在	岩切玄太郎	兵庫県企画部総合企画局計画課課長
5	11月6日	神戸市の現状と未来の姿	藤岡健	神戸市企画調整局参画連携推進部長
6	11月13日	神戸から見えてくる 新しい日本映画史	板倉史明	国際文化学研究科教授
7	11月20日	兵庫県の災害と戦災	佐々木和子	人文学研究科地域連携センター研究員
8	11月27日	兵庫県の地域課題 地元メディアの視点から	富居雅人	神戸新聞社経営企画局次長兼教育事業 戦略室長兼NIX推進部長

b. 地域社会形成基礎論（木曜5限、第2・第3Q開講）

現在、地域が直面している課題について多角的に理解し、地域社会形成の意義や、そのための取り組みについての知識を得ることを目的とした、農業・経済・医療福祉・環境・福祉・歴史文化・災害・法律・ソーシャルビジネス・キャリアデザインなどの各分野からなる、地域社会形成についての講義

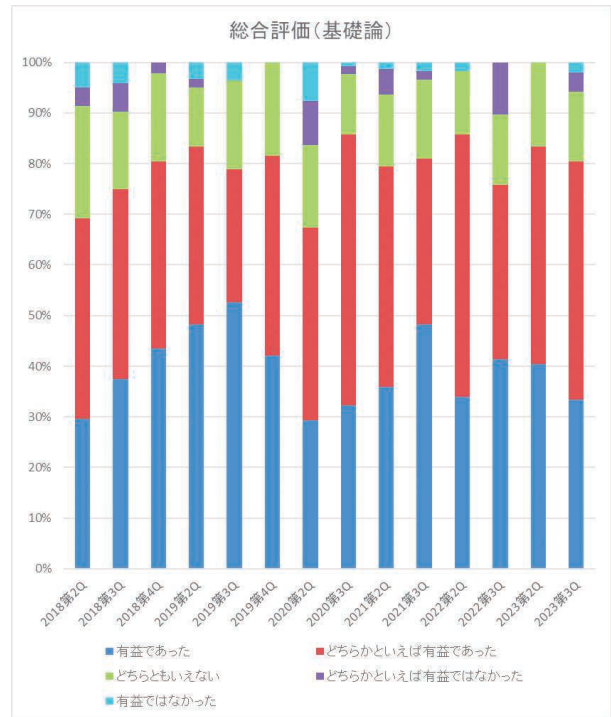
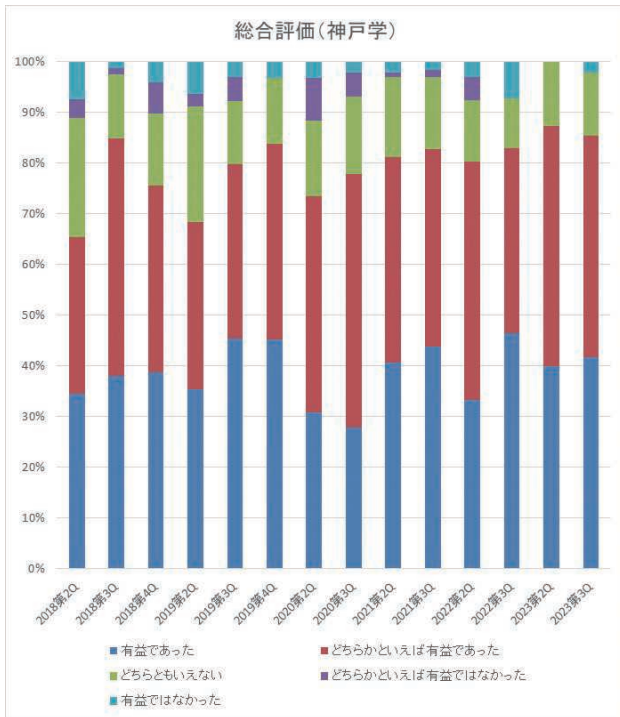
地域社会形成基礎論（第2Q）担当者

1	6月15日	現代日本の地域課題	奥村弘	理事副学長・人文学研究科教授
2	6月22日	自然と共生した 地域づくりにおける課題	清野未恵子	人間発達環境学研究科准教授
3	6月29日	地域医療・福祉の課題	高田哲	神戸市総合療育センター診療所長
4	7月6日	事業者・大学・地域との連携	坪田卓巳	元灘区地域活動支援コーディネーター
5	7月13日	災害と地域	北後明彦	都市安全研究センター特別研究員・ 名誉教授
6	7月20日	地域と法・制度	金子由芳	国際協力研究科教授
7	7月27日	文化から見る現代の地域社会	山地久美子	地域連携推進本部特命准教授
8	8月3日	地域活動とキャリアデザイン	田中美恵	キャリアセンター政策研究職員

地域社会形成基礎論（第3Q）担当者

1	10月5日	農業・農村の多面的機能と 減災への貢献	田中丸治哉	農学研究科教授
2	10月12日	地域経済の課題と地域づくり	中塚雅也	農学研究科教授
3	10月19日	地域医療・福祉の課題	林敦子	保健学研究科准教授
4	10月26日	事業者・大学・地域との連携	坪田卓巳	元灘区地域活動支援コーディネーター
5	11月2日	レジリエンスと価値	鶴田宏樹	バリュースクール准教授
6	11月9日	災害復興と地域	近藤民代	都市安全研究センター教授
7	11月16日	神戸市の今後のあり方	久元喜造	神戸市長
8	11月30日	地域活動とキャリアデザイン	田中美恵	キャリアセンター政策研究職員

c. 授業の総合評価（うりポーネット内）「有益」「どちらかといえば有益」で8割以上



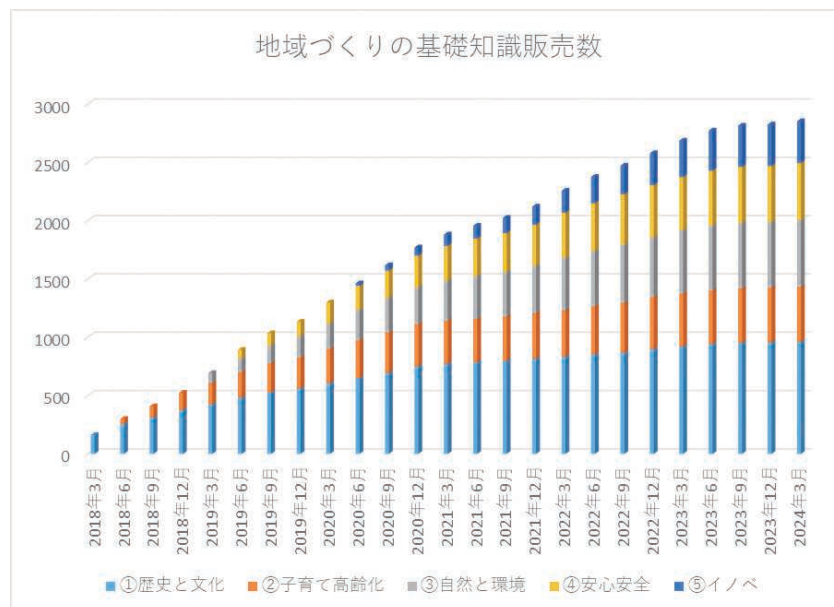
・学生の感想・意見（R5年度第3Q、BEEF+内アンケートより一部抜粋）

神戸や地域についての知識を多様な面から学ぶことができ良かった。

ほとんどがオンデマンドで受けることができ、先生たちや生徒の質問を聞くことでより理解を深められた。

地方から来た人間にとっては神戸を詳しく知る良い機会となった。

あらゆる分野を網羅しており、興味深いトピックに複数触れることが出来た。



- ・神戸市長の特別講義の実施（11/16 地域社会形成基礎論）
市の施策についての講義後に学生からの質問にも答えていただく。学生の満足度も高かった。

②テキストの活用、本教育プログラムの周知

- ・R5年度は神戸大学生協同組合の協力を得て、COC+ 事業と教育プログラム成果のテキストである『地域づくりの基礎知識』を特設コーナーでPR。神戸新聞のアイデアソン紹介記事とともに広告を出した。
- ・COC+ 事業の成果をまとめたテキスト『地域づくりの基礎知識 1～5』（神戸大学出版会）のR5年度売り上げ（R6年3月末）が167冊（計2,853冊）あり、授業で活用するとともに本教育プログラムの全国的普及に努めた。

③ COC+ プラットフォーム関連の会議、行事の開催

a. 「歴史と文化領域」シンポジウム

（園田学園女子大学主催、地域連携推進本部共催）

2024年2月25日に「災害復興と地域歴史遺産」が園田学園女子大学にて開催された。奥村弘神戸大学副学長の挨拶の後、パネリストとして本部から松下正和が参加。「風水害による被災歴史資料の保全と活用について」と題して報告を行った。



b. ひょうご神戸プラットフォーム連絡会の開催

神戸大学の他、兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学、兵庫県・神戸市、神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社をメンバーとする「ひょうご神戸プラットフォーム連絡会」を2024年3月12日に開催し、今年度の活動報告や今後の地域連携について意見交換を行った。

神戸大学からは、下記のような報告があった。

- ・地域連携推進本部「神戸大学の地域連携について」
- ・宇野知秀農学研究科教授「山田錦の米ぬかを用いた新規化粧品の開発」
- ・地域交流創出の会「なごぶい」「UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動」

4. 地域連携推進本部ボランティア支援部門

1995年阪神・淡路大震災を経験した兵庫県ではボランティア活動への関心が高いとされる。神戸大学学生団体の現在の活動内容は、災害・復興、農業、国際、まちづくり、子供の居場所・学習や地域福祉等多彩な分野に及んでいる。そもそもボランティアは学生の自主的な活動であるが、大学は学生の活動を支援するとともに、学生が地域と連携し地域活性化に貢献することを目指している。

ボランティア支援部門は、ボランティア・社会貢献にかかる活動支援と教育、意識啓発に関する業務へ地域連携を柱の一つとして取り組むために、令和3年10月にキャリアセンターから地域連携推進本部へ移管された。

令和5年5月8日に新型コロナウイルス感染症が感染症法において5類に移行されたことに伴い、3年以上続いた社会的な行動制限が解除された。それにより、学生の地域におけるボランティア活動、社会活動が積極的に展開され活発化している。

令和5年度は、学生団体のボランティア活動を支援するため、新たに「学生ボランティアサポート」助成金制度を創設し、学生団体の活動の充実に繋げている。

また、ボランティア・社会貢献に係る講義として、「ボランティアと社会貢献活動(A)」（座学）・「ボランティアと社会貢献活動(B)」（座学・実習）を多様な分野の講師の協力の下、新たな授業内容で再開講した。

さらに、この一年はシンポジウム、イベント事業を複数実施し、ボランティア・社会貢献に係る大学・学生・教職員の取り組みを学内、地域、社会等に向けて発信するとともに、学内外関係機関、地域組織、住民の方々に協力をいただきながら、地域連携推進本部ボランティア支援部門、連携推進課としてボランティア・社会貢献活動の支援、普及・啓発及び教育等を行うことができた。

○「神戸大学地域連携推進本部規則」（抜粋） 令和3年9月28日制定

第8条4 ボランティア支援部門は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 学生等及び学生団体へのボランティア・社会貢献活動に係る支援（意識啓発、相談対応、情報収集、調査分析、学内外関係機関との連携等）に関すること。
- (2) ボランティア・社会貢献活動に係る教育に関すること。
- (3) 教職員へのボランティア・社会貢献活動支援に対する意識の啓発に関すること。
- (4) その他ボランティア支援に関すること。

これら業務を推進するため、地域連携推進本部ボランティア支援部門として学生活動支援・教育機会の効果等を検討するとともに、学内・学外組織と連携調整し年間スケジュールを立て進めている。

1) 学生等及び学生団体へのボランティア・社会貢献活動に係る支援

①学生の支援と相談対応、地域・NPO団体とのつながり支援

個人でボランティア活動を始めたい学生や学内外でボランティア活動に取り組む学生への助言・支援を行っている。相談内容にあう神戸大学学生団体の紹介や、希望に応じてNPO、社会福祉協議会等関係機関と連携して地域団体や取組み手法を紹介する等、活動を始めやすい支援を目指している。

学外活動の情報提供として神戸市「BE KOBE 学生ナビ」等のツールも増えているため、学外での取り組みへの支援相談も寄せられることがあるが、内容等に応じて助言している。

②学生ボランティア団体登録制度

ボランティア活動に取り組む登録団体は22団体（令和6年3月末時点）で令和5年度に新規に2団体が登録している。登録団体には相談や助言のほか、物品貸与、印刷やミーティングルームの提供等の支援がある。学生団体の中には複数キャンパスに支部を持つ団体もあり、六甲台キャンパスでのボラカフェへの参加、六甲祭、名谷祭での取り組み等、学生同士がキャンパス間を超えて繋がるきっかけとなっている。

学生団体は1年ごとに代表が代わる事が多く、各代ごとに活動内容を工夫して展開している。団体ではGoogleドライブ等を活用し、活動の記録や情報、資料を保存する等、メンバーは交替りを前提として情報共有や次代への継承に取り組んでいる。ボランティア支援部門としては代表交代が多い新年度にかけて「学生団体 ボランティア支援 概要説明 & 意見交換会」を開催し、情報を共有するとともに、学生団体のニーズや状況を把握することで今後必要な支援に繋げる場としている。

③ a. 学外：地域社会に支えられる助成金と申請支援

b. 学内：神戸大学基金「学生ボランティアサポート」制度の新設

a. 学外：地域社会に支えられる助成金と申請支援

学外の助成金は学生が地域社会に支えていただいている証左である。

学生団体は活動実施、取り組み展開のため、助成金取得に自ら積極的に取り組み、複数の助成金を受け、事業ごとに使い分けている団体もある。申請時期には書類の記載、費用等の相談がボランティア支援部門にも寄せられ、事業、費用に関する助言、作成支援を行っている。

学生団体が受けている学外の助成金（一部）

大学と連携したまちづくりチャレンジ事業補助金	(灘区)
(丹波地域)学生等による地域貢献活動推進事業	(兵庫県丹波県民局、丹波篠山市)
ひょうごボランタリー基金助成事業県民ボランタリー活動助成 ひょうご若者被災地応援プロジェクト	(ひょうごボランタリープラザ)
若者支援事業	(ひょうご安全の日推進事業助成金)
コープともしびボランティア振興財団	

b. 学内 神戸大学基金「学生ボランティアサポート」制度の新設

令和4年度に活動支援を行う中で、既存の学内外助成金では対象となりにくい学生団体活動内容への対応や年度末までの学生側の費用負担を軽減する助成金の仕組みの必要性が明らかとなった。

そのため、地域連携推進本部・連携推進課において1年間かけて議論を進め、令和5年に「学生ボランティアサポート」制度を創設した。この制度は神戸大学基金の援助を受けて、阪神・淡路大震災被災地に所在する大学として、被災当時、全国からの支援を受けて復興を経た経験と感謝の気持ちを活かして地域で自主的にボランティア・社会貢献活動を実施している学生団体に対し活動経費を助成するものである。対象は、地域連携推進本部ボランティア支援部門の登録ボランティア団体（神戸大学教員が顧問または助言者）で兵庫県下の地域団体、住民等と連携する公益性のあるボランティア・社会貢献活動、あるいは県外であって地元地域と連携したボランティア・社会貢献活動である。申請主体は学生団体で申請額上限は10万円である。

令和5年度は7件が採択され、それぞれ学生が地域に入り、相互に求められるボランティア・社会貢献活動が積極的に展開されている。

神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti	災害ボランティア 仙台派遣活動
灘チャレンジ実行委員会	灘チャレンジ2023
地域密着型サークル にしき恋	農業ボランティアおよび丹波大黒豆の生産
神戸大学ボランティアバスプロジェクト	阪神・淡路大震災・東日本大震災の語り部・ボランティア活動
環境サークル「えこふる」	「環境かるた」食品ロスver.を用いた出前授業
多世代交流拠点サークルLuonto	丹波篠山市城南地区における多世代交流拠点づくりの学生ボランティア活動
神戸大学学生震災救援隊	震災救援隊の名前入り作業着を着る自他共に安全な災害復興ボランティア

④登録学生団体の活動場所訪問、活動支援と受け入れ地域団体との交流

新型コロナウイルス感染症の5類移行に伴い、課外活動の制限が解除され活動が活性化した。兵庫県神戸市灘区、中央区、長田区、丹波篠山市、また東日本大震災被災地の宮城県南三陸町、石巻市を含め学生団体が活動する31か所を訪問し、コロナ禍後の変化を含めて受け入れの地域の方とお話するほか、学生と意見交換する機会となっている。

5 類移行後に学生団体の学内施設の使用が可能となったことで、学内で事業を実施する団体があるが、施設利用のルールによっては地域連携推進本部が間に入って開催支援を行う場合もある。

神戸大六甲祭で団体活動紹介や展示ブースを出展、物販を出店する団体を訪問した。中には活動受け入れ先の住民の方がお越しになっているブースもあり、普段とは異なる活動の様子から学生や地域の方の多様な面を知る機会ともなった。このように活動現場を訪問することで活動展開においてどのような支援や助言が有益であるか、また、支援の形に実効性があるのか等を考え、次の支援に繋げることができている。

神戸大学六甲台キャンパスで開催される「神戸大学ホームカミングデイ」にはこれまで複数のボランティア団体が協力していて、令和5年度は3団体（神戸大学ボランティアバスプロジェクト・神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti・地域密着型サークルにしき恋）が出展・出店した。

⑤地域との連携と交流

活動場所の訪問は、ボランティアを受入地域の方々と学生の取組みを直接知る大切な機会である。

学生と地域の方々の活動に係るメディア取材への協力や各訪問場所で地域の方々、学生と教員が相互に交流を図ることができ、地域連携推進本部主催のシンポジウムや事業においても学生活動へのコメントや応援の言葉をいただいている。これらの交流をきっかけに、令和5年度には地域が主催するイベントへ教員がコーディネーターとしてお声かけいただき登壇したり、震災後の地域コミュニティを調査する東北の研究者との交流事業を実施する等、地域連携に繋がってきている。

⑥災害ボランティア活動の支援

阪神・淡路大震災から続くボランティアの2団体と東日本大震災（2011年）、熊本地震（2016年）から始まった計4団体が活動している。令和5年度からは阪神・淡路大震災被災地・長田区を中心に活動を始めた団体がある。29年経つ地元神戸の被災地の活動では若手世代の関りが減少傾向であるが、学生がその担い手の一人として地藏盆や餅つき等への参加が期待されるとともに地域コミュニティ活動に取り組み、信頼関係を築き、災害の語り継ぎにも取り組み始めている。

阪神・淡路大震災以外での災害ボランティアには安全な活動のために計画時から相談を受け、活動前後に面談を行い被災者への配慮、安全確認を行っている。兵庫県内・外の災害ボランティア活動のため、ひょうごボランティアプラザや神戸市等学外の助成金獲得を推奨し、学内では神戸大学基金、育友会から助成を受け、学生の現地活動支援を行っている。

1月1日に起こった能登半島地震の災害ボランティアについては被災地では地震が続き、被災した建屋での活動もあり、文部科学省の「令和6年能登半島地震に伴う学生等のボランティア活動について（通知）」（令和6年1月22日）も踏まえ、学生には現地の状況を収集するとともに活動への安全対策、学業面を含めて相談・面談を行なっている。個人で自治体の災害ボランティアセンターを通じて活動を行う学生もいるため神戸大学ホームページで支援の現状掲載をはじめ、情報提供方法を工夫している。

兵庫県	長田区日吉5丁目 地藏盆(8/23)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	災害ボランティア合同企画写真展(10/19) (鶴甲第一キャンパスラーニングコモンズ内スペース)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト 神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti
兵庫県	災害ボランティア合同企画写真展(10/28) (第17回神戸大学ホームカミングデイ・六甲台第1キャンパス)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト 神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti
兵庫県	小学校で防災授業(12/1)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	若鷹 ふれあいのまちづくり協議会餅つき(12/10)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	小学校で語り継ぎ講和(12/11)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	小学校で語り継ぎ講和(12/14)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	「神戸大学☆夢ラボ」災害・復興ボランティア(1/14)	神戸大学学生震災救援隊 灘地域活動センター
兵庫県	東日本大震災「海辺の写真展 in 神戸」(1/14-17) こうべあいウォーク2024(神戸まちづくり会館)	神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti

兵庫県	上野政志さんの講演会「生きてこそ～1.17を忘れない」(1/16) (神戸学生青年センター)	神戸大学学生震災救援隊
兵庫県	「1.17KOBEBEに灯りをinながた」ボランティア参加(1/17)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	神戸大学生30年の語り継ぎ・シンポジウム 「阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」(1/27) 神戸大学阪神・淡路大震災30年事業 災害伝承「語り継ぎ」探求サロン(第6回)	神戸大学学生震災救援隊 灘チャレンジ実行委員会 灘地域活動センター 神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	神戸大学生30年の語り継ぎ・パネル展示 「阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」(1/27-3/3)	神戸大学学生震災救援隊 灘チャレンジ実行委員会 灘地域活動センター 神戸大学ボランティアバスプロジェクト 神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti
兵庫県	“the Knowledge Exchange on school-based Disaster Risk Reduction (DRR) and Climate Change Adaptation” 国連ユニセフ(2/16)	神戸大学学生震災救援隊 神戸大学ボランティアバスプロジェクト
宮城県	災害ボランティア企画パネル展(南三陸ホテル観洋)(2/24～継続)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
宮城県	「第9回全国被災地語り部シンポジウムin東北」取組報告(2/25)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
宮城県	東北大学生・災害語り継ぎ交流(2/26)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	「ひょうご若者被災地応援プロジェクト」ひょうごボランタリープラザ 報告会(2/29)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト 神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti 神戸大学学生震災救援隊
兵庫県	東北派遣活動報告・住民皆さんとの交流(ふたば学舎)(3/9)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
兵庫県	災害ボランティア企画写真展(ふたば学舎)(3/9)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
発行	INTERVIEWインタビュー『阪神・淡路大震災から29年一日吉町5 丁目「あの日とこれから」』発行	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
宮城県	第59次東日本大震災岩手県大槌町コミュニティ支援派遣(8/25-29)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
宮城県	宮城県山元町夏祭り・丸森町でのワークショップ運営(8/25-28)	神戸大学学生震災救援隊
宮城県	第1次仙台派遣東日本大震災コミュニティ活動(9/29-10/1)	神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti
宮城県	第2次仙台派遣東日本大震災コミュニティ活動(12/9-11)	神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti
宮城県	山元町でのサロン活動・地域活動運営の手伝い(3/3-5)	神戸大学学生震災救援隊
宮城県	第60次派遣東日本大震災災害語り継ぎボランティア活動(2/24-26)	神戸大学ボランティアバスプロジェクト
石川県	能登半島地震被災地・災害ボランティア(3/29-31)	神戸大学学生震災救援隊

⑦情報発信 ボランティア・社会貢献に関するボランティア支援部門ホームページ

地域連携推進本部ホームページに「ボランティア支援部門」のページを作成し活用している。

学生への情報提供するツールとしては「うりぼーポータル」がある。大学のホームページ改修で「うりぼーポータル」ホームページからはポータル内情報カテゴリー・「健康／安心／安全」ボタンと「ボランティア・地域貢献」ボタンの2階層を経て地域連携推進本部ホームページにアクセスできる。

うりぼーポータル <https://www.uriboportal.ofc.kobe-u.ac.jp/>

地域連携推進本部ボランティア支援部門 <https://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/volunteer/>

⑧ a. 地域連携推進本部・ボランティア支援部門の主催事業・学内機関との連携

b. 阪神・淡路大震災30年記念事業

各研究科地域連携センターをはじめとする学内機関、学生、卒業生、地域・団体と活動展開、情報発信等を念頭にした報告会や事業を実施している。

a. 学内機関である都市安全研究センターと神戸大学 RCUSS オープンゼミナール「復興・減災の担い手：学生災害ボランティア」および交流会を神戸市危機管理センターで開催し、学内において農学研究科地域連携センターと丹波篠山市地域起こし協力隊と「丹波篠山学生団体合同イベント in 神戸大学 味わう篠山」を開催した。

登録ボランティア団体は新入生やボランティア活動を始めたい学生に声をかける「ボラ Cafe2023 春」・「ボラ Cafe2023 秋」を開催し、学生団体間の情報交換、交流を深める機会にもつながっている。

b. 令和5年度は全学で取り組む神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業委員会（藤澤正人実行委員長）

30年事業キックオフとして「神戸大学生30年の語り継ぎ・シンポジウム—阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」を人と防災未来センターと共同で開催し、来場・オンライン計140名を超える学生、奥村理事・副学長・地域連携推進本部長をはじめとする教員、OG・OB、人と防災未来センター関係者、地域の方々、全国、被災地から参加があった。学生たちは毎年メンバーが入れ替わる中で30年の間、団体の活動精神・方針を受け継ぐ一方で、変化を受け入れながら継続して取り組んできたことと次の30年の活動に向けた世代・地域を超えた未来に向けて意見を交換できた。

⑨会議等での活動報告と制度の検討

地域連携推進本部の定例会議・運営会議においてボランティア支援部門の報告を行っている。定例会議では学生たちの活動や支援体制構築の進捗状況報告とともに新規の事業や制度について議論している。運営会議においては活動を報告すると共に4つのキャンパスからの各研究科・地域連携センターの学生、教員の活動について情報を得る機会となっている。

2) ボランティア・社会貢献活動に係る教育に関すること。

①「ボランティアと社会貢献活動（A）（B）」講義・令和5年度開講

ボランティア支援部門の地域連携推進本部への移管に伴い、令和4年度は非開講であった「ボランティアと社会貢献活動」講義を1年かけて検討し、学内外の講師との調整を進め、オムニバス講義として関係者より多大なご協力を受けて再開講している。授業は社会、大学の中でのボランティアや社会貢献の取組を多様な視点、アプローチで学ぶことを目的とし、座学（A）では学生として取り組むボランティアと、社会の構成員として取り組む社会貢献をキーワード（弁護士のプロボノ活動、医師、メディア、企業のCSR／CSV等）に授業を構成した。実習を含む（B）では商店街等の地域経済、農業、災害・復興、社会福祉等多面的ボランティアへの参加機会を創出している。

受講学生のアンケート結果では講義内容等に肯定的意見が多く、学生自身の活動スタートのきっかけづくりの効果も伺える。

<学生のアンケートより抜粋>

- ・既にボランティアをしてみたいと思っています。
- ・話を聞いて、よりボランティアというものが具体的に知れたのでこれを選んで良かったと思う。
- ・様々な分野のボランティアを通して人とのつながりを重要視するという共通点を見つけられた。

<https://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/volunteer/2023/lesson.pdf>

ボランティアと社会貢献活動（A） 第3クォーター（水曜日・5限 午後5時～6時半）

1	10月4日	ガイダンス 農村ボランティアと住民参加	田中丸 治哉	地域連携推進本部副本部長 農学研究科 教授
2	10月11日	災害・復興とボランティア	頼政 良太	被災地 NGO 協働センター代表
3	10月18日	国際協力と社会貢献・フェアトレード	太田 和宏	人間発達環境学研究科 教授
4	10月25日	メディアと社会貢献—地域を記録する	藤岡 勇貴	サンテレビジョンキャスター
5	11月1日	専門性とプロボノ・ボランティア	津久井 進	弁護士・元兵庫県弁護士会会長
6	11月8日	地域医療とボランティア	岡山 雅信	医学研究科教授 地域医療教育学部門長
7	11月15日	企業と社会貢献 CSR／CSV	佐々木 憲政 東山 高志	株式会社神戸製鋼所総務・CSR部 部長 〃 グループ長
8	11月29日	ボランティアと社会貢献理論とまとめ	山地 久美子	地域連携推進本部特命准教授

ボランティアと社会貢献活動（B） 第4クォーター（水曜日・5限 午後5時～6時半）

1	12月6日	農業ボランティアと地域（座学） ボランティア①	高田 晋史	農学研究科助教
2	12月13日	灘区のにぎわい・水道筋商店街（座学） ボランティア②	慈 憲一	摩耶山再生の会 事務局長
3	12月20日	ユニバーサル社会と障がい者（座学） ボランティア③	山田 剛司	えんぴつの家 事務局長

4	12月27日	実習回（第1回）①、②、③から選択 ①農業ボランティア（竹林整備と竹の活用） ②水道筋商店街での活動 ③障がい者福祉施設ボランティア		
5	1月10日	阪神・淡路、東日本大震災と多文化共生 ボランティア④（座学）	金 千秋	NPO 法人エフエムわいわい 代表理事
-	1月17日 （全学休講日）	災害・復興ボランティア ④ 1.17KOBE に灯りを in 長田（阪神・淡路大震災追悼行事）		
6	1月24日	地域に根付くボランティア	鎌田 あかね	灘区社会福祉協議会事務局部長
7	1月31日	ボランティアと社会貢献の実践 まとめ・プレゼンテーション	山地 久美子	地域連携推進本部特命准教授
8	2月7日	実習回（第2回）③又は④を選択		

(A) 座学



(B) ボランティア実習



②ボランティア冊子

『地域に出る－神戸大学ボランティアと社会貢献のススメ 2024』の発行
神戸大学の様々なボランティア・社会貢献活動と部門の支援の仕組みや取
組みを紹介する冊子を神戸大学基金の支援を受けて発行した。大学ホームペ
ージに令和6年度新入生の「学生生活オリエンテーション」としても掲載され、
神戸大学のボランティア・社会貢献活動の状況を発信し学生の活動開始のき
っかけに繋げている。



<https://www.office.kobe-u.ac.jp/crsu-chiiki/volunteer/index/Pamphlet.pdf>

3) 教職員へのボランティア・社会貢献活動支援に対する意識の啓発に関すること

学生ボランティア活動や助成金相談への対応、顧問教員との意見交換等を行った。学外からボランティア・社会活動にかかる情報提供を行うとともに、神戸地域のNPO 法人との意見交換を国際文化研究科地域連携センターと行った。

4) その他ボランティア支援に関すること

地域連携推進本部・ボランティア支援部門実施事業

「ボラカフェ 2023 春」2023 年 5 月 23 日（新歓&交流会）神戸大学鶴甲第 1 キャンパス・学生ホール



「ボラカフェ 2023 秋」2023 年 12 月 12 日（交流会）神戸大学鶴甲第 1 キャンパス・学生ホール



「神戸大学生 災害ボランティア活動報告 & 交流会」 2023年6月17日神戸市危機管理センター



「味わう篠山」 & 交流会 丹波篠山学生団体合同イベント in 神戸大学 2023年12月12日
神戸大学鶴甲第1キャンパス・学生ホール



神戸大学 阪神・淡路大震災 30年事業委員会震災30年・キックオフ事業
神戸大学生 30年の語り継ぎ・シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」
主催：神戸大学地域連携推進本部・阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター
2024年1月27日（土）人と防災未来センター西館1F & オンライン
人と防災未来センター「災害伝承”語り継ぎ”探求サロン」シリーズ



今後の検討課題

- ・新入生、2年生、3年生・4年生、院生へのボランティア活動情報提供の仕組み
- ・コロナ禍の影響が残る縮小傾向にある団体へのフォローアップと展開方法
- ・4キャンパスにおけるボランティア・社会貢献活動の情報収集と情報提供方法
- ・大学間の学生交流、地域住民との交流きっかけづくり
- ・地域、学外組織とのボランティア支援連携体制、ボランティア情報の発信と提供手法 ほか

【広報】 ボランティア支援部門・学生ボランティア団体に関連するメディア掲載

新聞 記事	神戸新聞「東日本の被災地支援の研究者らHAT神戸を訪問」 2023年9月15日 23面
	日本経済新聞「ボランティア、被災地ニーズ把握へ先遣隊 能登半島地震」 2024年1月6日 https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUF044990U4A100C2000000/
	読売新聞「被災地支援 経験受け継ぐ 神大生ら活動の心掛け報告 人と防災未来センターでシンポ」 2024年1月28日 27面
	毎日新聞「阪神大震災 記憶継承へ研究集約 30年見据え神戸大が事業発足式典企画・資料の活用模索 /兵庫」 2024年2月10日 https://mainichi.jp/articles/20240210/ddl/k28/040/171000c
	神戸新聞「神戸大生、阪神・淡路の経験どう継承 シンポで能登でのボランティア活動など報告」 2024年2月28日 https://www.kobe-np.co.jp/news/society/202402/0017374185.shtml
	読売新聞「被災地教訓 若い世代へ南三陸でシンポ 全国の語り部訴え」(宮城) 2月26日 神戸大学ボランティアバスプロジェクト
	読売新聞「若者の被災地支援 学び共有」(ひょうご) 3月1日 神戸大学ボランティアバスプロジェクト
ラジオ	神戸新聞「若者被災地応援プロジェクト」 3月1日 神戸大学ボランティアバスプロジェクト
	「神戸大学☆夢ラボ」教員の災害ボランティア・調査研究 2024年1月7日(日) 神戸大学地域連携推進本部特命准教授・ボランティア支援部門長・山地 久美子
	「神戸大学☆夢ラボ」28年続く学生の災害ボランティア 2024年1月14日(日) 神戸大学学生震災救援隊代表・西畑克俊 灘地域活動センター代表・山品俊介

Web	Yahoo!ニュース「救援隊の伝統として受け継ぐ」神戸大学生ボランティア団体が震災教訓伝える／兵庫
TV 放映	サンテレビニュース放送「「救援隊の伝統として受け継ぐ」神戸大学生ボランティア団体が震災教訓伝える」 2024年1月27日 https://sun-tv.co.jp/suntvnews/news/2024/01/27/75336/
	NHK神戸放送局「Live Love ひょうご」 2024年1月23日(火)午後6時30分～ 「学生主催のお茶会“神大喫茶”高齢者の孤立を防ぐために」灘地域活動センター(N.A.C.) https://www.nhk.jp/p/ts/JWLK93KGKL/
	東北放送 2024年2月26日「被災経験のない学生 伝承への思い共有」 神戸大学ボランティアバスプロジェクト×東北大学SCRUM https://newsdig.tbs.co.jp/articles/tbc/1019473?display=1
	NHK Eテレ「この時代の 縁がつむぐ 明日への希望」 2024年2月25日(再放送3月2日) 神戸大学ボランティアバスプロジェクト×長田区日吉町5丁目×中越地震被災地 https://www.nhk.jp/p/ts/X83KJR6973/episode/te/XQL19ZQR3N/
神戸 大学	『神戸大学統合報告書』2023年度版 TOPICS「学生のボランティア活動支援」38頁 https://web-pamphlet.jp/kobe-u/2023e27/#page=39

令和5年度ボランティア支援の状況と取組み（ボランティア支援部門長の対応）

令和5年度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
相談・面談・助言ほか	4	9	3	8	4	3	5	3	5	5	5	11
災害ボラ計画・相談*	2	2	3	3	16	8	3	2	11	9	25	4
学生団体活動の訪問	1	3	1	3	1	—	7	6	1	4	3	1
本部事業・地域参加	1	4	4	3	4	3	5	9	8	10	6	4

令和5年4月	「学生団体 2023年度ボランティア支援 概要説明 & 意見交換会」追加説明会
5月9日	第1回大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
5月19～29日	「令和5年度（第1期）学生ボランティアサポート経費助成」（登録ボランティア団体）募集
5月20日	人と防災未来センター・災害伝承“語り継ぎ”探求サロン（第1回）
5月23日	ボラカフェ 2023・春 新歓
5月23日	ボラカフェ 2023・春 交流会
5月30日	神戸新聞社訪問（地域連携推進本部）
6月13日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議（第1回）
6月15日	灘区役所来学 地域連携・学生ボランティア活動など
6月17日	第289回神戸大学RCUSSオープンゼミナール「復興・減災の担い手：学生災害ボランティア」 神戸大学都市安全研究センター主催・地域連携推進本部共催
6月17日	神戸大学生 災害ボランティア交流会 神戸大学地域連携推進本部主催・都市安全研究センター共催
7月15日	「オオヤマルシェ」（にしき恋）（丹波篠山市）
7月17日	人と防災未来センター・災害伝承“語り継ぎ”探求サロン（第2回）
7月18日	TC 神鋼不動産株式会社来学
7月18日	第1回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
7月20日	なだかつ交流会（灘区役所）
7月31日	TC 神鋼不動産サービス来学
8月12日	人と防災未来センター・災害伝承“語り継ぎ”探求サロン（第3回）
8月19日	災害時における大学ボランティアセンターネットワーク研修交流会 朝日新聞厚生文化事業団
8月21日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議（第2回）
8月23日	第2回大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
8月23日	長田区日吉5丁目 地藏盆（神戸大学ボランティアバスプロジェクト）
9月5日	第3回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
9月11日	阪神・淡路大震災被災地と東北の大学教員交流・今後のボランティアについて
9月17日	「灘復興祭 2023」（灘チャレンジ実行委員会）
9月20日	神戸ユースネット・神戸大学国際文化学研究所地域連携センター意見交換
9月29日-10月14日	「令和5年度（第2期）学生ボランティアサポート経費助成」（登録ボランティア団体）募集
10月3日	灘区役所来学 地域連携・学生ボランティア活動など
10月5日	第3回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
10月7日	神戸市立本庄児童館訪問（えこふる）
10月9日	なぎさふれあいまちづくり協議会
10月10日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議（第3回）
10月19日	写真展：災害ボランティア団体神戸大学ボランティアバスプロジェクト・Konti 合同企画
10月22～24日	新潟県中越地震・旧山古志村訪問 神戸市被災地等支援助成事業（長田区日吉5丁目自治会）
10月28日	人と防災未来センター ALL HAT 2023 第8回 HAT 神戸防災訓練

10月28日	第17回神戸大学ホームカミングデー 災害ボランティア活動写真展出展：神戸大学ボランティアバスプロジェクト 神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti 丹波篠山黒豆販売・出店：地域密着型サークルにしき恋
11月3日	「アグリステーション丹波篠山・リニューアルオープン」(Luonto) (丹波篠山市)
11月4日	「HAT 灘の浜まちびらき 25周年記念・シンポジウム2」(コーディネーター)
11月5日	人と防災未来センター・災害伝承“語り継ぎ”探求サロン(第4回)
11月7日	第4回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
11月9日	ラジオ関西「神戸大学夢☆ラボ」収録
11月10日	NHK 神戸放送局訪問
11月12日	「神戸大学六甲祭」訪問
11月26日	本山第二小学校区防災福祉コミュニティ防災訓練(甲南大学)
11月26日	人と防災未来センター・「ふくしま出身の若者が伝える『福島』」
11月28日	第4回大学コンソーシアムひょうご神戸 学生交流委員会
11月28日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議(第4回)
11月30日	第5回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
12月2日	人と防災未来センター・災害伝承“語り継ぎ”探求サロン(第5回)
12月9日	アイデアソン「情報で命を守る」(地域連携推進本部・神戸新聞・サンテレビ・ラジオ関西)
12月10日	長田区若松ふれあいのまちづくり協議会餅つき(神戸大学ボランティアバスプロジェクト)
12月12日	「丹波篠山学生団体合同イベント in 神戸大学 味わう篠山」 神戸大学地域連携推進本部主催・農学研究科地域連携センター・丹波篠山市地域おこし協力隊
12月12日	ボラカフェ 2023・秋 交流会
12月14日	高校生ボランティア支援(神戸西ロータリークラブ)
12月15日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議(第5回)
12月16日	麒麟の森づくり・ボランティア実習(丹波篠山市)
12月19日	第6回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
12月23日	灘中央市場・ボランティア実習(神戸市灘区)
12月26日	上郡町来学
令和6年1月7日	「神戸大学☆夢ラボ」地域連携推進本部特命准教授ボランティア支援部門長・山地久美子
1月9日	第7回 1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会
1月12日	令和5年度丹波篠山市・神戸大学 連携推進協議会参加
1月14日	「神戸大学☆夢ラボ」学生震災救援隊代表、灘地域活動センター代表
1月14日	KOBE まち大(第4回) 能登半島地震緊急報告会
1月14~17日	東日本大震災「海辺の写真展 in 神戸」(神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti)
1月17日	長田区日吉5丁目阪神・淡路大震災慰霊祭(神戸大学ボランティアバスプロジェクト)
1月17日	「1.17KOBE に灯りを in ながた」(1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会主催)
1月17日	「1.17KOBE に灯りを in ながた」災害・復興ボランティア実習(ボラバスが実習をサポート)
1月19日	灘区社会福祉協議会
1月22日	大学都市神戸産官学プラットフォーム プロジェクト提案大学・合同キックオフ会議
1月24日	市民参加型 帰宅困難者対策訓練・ホテルオークラ神戸(神戸市危機管理室)
1月25日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議(第6回)
1月27日	神戸大学生30年の語り継ぎ・シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」 神戸大学地域連携推進本部主催 阪神・淡路大震災30年事業 人と防災未来センター共催 災害伝承“語り継ぎ”探求サロン(第6回)
1月27日~3月3日	神戸大学生30年の語り継ぎ・パネル展示「阪神・淡路大震災をどう受け継いできたか」 神戸大学地域連携推進本部主催 人と防災未来センター共催 西館1階 ロビー
2月8日	令和5年度神戸市地域課題に取り組むNPO等補助金採択団体交流会(KIITO)
2月17日	灘区大学と連携したまちづくりチャレンジ補助金活動報告・交流会 オンライン参加
2月17日	神戸大学保健学研究科第19回地域連携センター報告会
2月17日	「神大みんなとウェルビーイングをはじめよう!」神戸大学ウェルビーイング推進本部
2月21日	上郡町訪問
2月24日	「第9回全国被災地語り部シンポジウム in 東北」分科会・取組報告 (神戸大学ボランティアバスプロジェクト)(宮城県南三陸町)
2月25日	東北大学生・災害語り継ぎ交流(神戸大学ボランティアバスプロジェクト)(宮城県石巻市)
2月29日	「ひょうご若者被災地応援プロジェクト」ひょうごボランタリープラザ報告会(4団体)
3月4日	神戸大学阪神・淡路大震災30年記念事業事務局会議(第7回)
3月10日	「BATON」震災語り部育成研修会(講師)
3月12日	令和5年度 地域創生に応える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム連絡会
3月26日	ITC-J スピーチコンテスト(審査員)
3月28日	神戸新聞社来学

第Ⅱ章

学内公募

地域連携事業（組織型・個人型）
学生地域アクションプラン

登録ボランティア団体公募

学生ボランティアサポート経費助成
（神戸大学基金）

災害ボランティア活動

災害ボランティア活動経費助成
（神戸大学育友会）

活動報告

人文学研究科地域連携センター活動報告

大学院人文学研究科（文学部）では、2002年（平成14）より「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年11月に地域連携研究員制度を創設、翌年1月に神戸大学文学部地域連携センターを設置した。2007年の改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターとなっている。

本事業は、阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が自治体や地域住民と連携し、県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくり等に取り組んでいくことを目的としている。現在、連携事業は多岐にわたっているが、おおむね次の4つを軸として展開している。

1. 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力
2. 歴史資料・災害資料の保全・活用
3. 地域歴史遺産を活用できる人材の育成
4. 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

また、当センターを拠点とする事業として、2019年度に採択された科学研究費補助金特別推進研究「地域歴史資料額を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」（研究代表者・奥村弘）が展開中である。また、2018年1月に神戸大学・東北大学・人間文化研究機構（基盤機関：国立歴史民俗博物館）の三者で「歴史文化資料保全の大学・共同機関ネットワーク事業」に関する連携協定が締結された。同事業は2022年度より人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクトと位置づけられ、当センターは拠点校である神戸大学の基盤機関として、第1期からの活動を継承・発展させる形で各種事業を展開している。

このほか年報『LINK【地域・大学・文化】』を刊行するなど、研究および研究成果の公表もおこなっている。

以下、個別事業ごとに今年度の活動の概要を報告する。

（1）歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

- ① 兵庫県との連携事業
 - a. 兵庫県教育委員会文化財課との連携
 - b. 兵庫県地域創生局地域遺産室との連携
- ② 神戸市との連携事業
 - a. 神戸市文書館との連携
 - b. 神戸市文化スポーツ局文化財課との連携
・神戸村文書の研究と成果の公開事業
 - c. その他

- ③ 包括協定にもとづく灘区との連携事業
 - ・『篠原の昔と今』『水道筋周辺地域のむかし』の送付依頼に対応

- ④ 神戸市を中心とする文献資料所在確認調査
 - a. 神戸を中心とする文献史料所在確認調査
 - ・今年度は事業として実施せず
 - b. 神戸大学附属図書館所蔵古文書調査
 - ・若林泰旧蔵文書データ確認作業
 - ・人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業への協力

- ⑤ 住吉歴史資料調査会との連携事業
 - a. 史料調査
 - ・住吉村横田家文書、下田清五郎氏文書の翻刻
 - b. 古文書勉強会の開催
 - ・毎月1回開催（8月・12月は休み）
 - ・テキスト：住吉村横田家文書、下田清五郎氏文書等

- ⑥ 大学協定に基づく小野市との連携事業
 - a. 共同研究「小野市小野地区歴史調査及び小野市市場町近藤廣家文書目録作成」
 - ・資料調査（9日間）
 - b. 小野市小野地区歴史調査
 - ・聞き取り調査の実施

- ⑦ 大学協定に基づく朝来市との連携事業
 - a. 石川家文書整理会の開催（毎月第2・第4火曜日）
 - ・地域住民と協働した石川家外蔵文書の目録作成および撮影
 - b. 多々良木歴史研究会への協力
 - ・『多々良木区有文書目録』の作成
 - c. あさご古文書整齐会への協力（毎月第2水曜日）
 - ・地域住民と協働した地域史料の目録作成および撮影
 - d. 竹田区有文書整理への協力（毎月第2水曜日）
 - ・地域住民と協働した区有文書の目録作成
 - e. 山田家文書の調査・整理
 - ・『山田家文書目録』の作成

- ⑧ 部局協定にもとづく丹波市との連携事業
 - a. 令和3年度連続講座「見る・知る・学ぶ 丹波の歴史」（7/29・9/9・10/28・11/25・12/23・2/10、全6回）
 - ・第6回（2/10）は「シンポジウム 郷土の歴史を楽しむために」を開催
 - b. 古文書調査等
 - ・山南町堂本家文書調査（6/17・6/18・7/29・7/30）、目録作成

- ・青垣町山垣区有文書調査 (7/21)
 - ・山南町高座神社文書調査 (10/13)
 - ・柏原藩士文書 (仮) 目録作成
 - ・その他地域所在資料調査多数
- c. 成果展「区有文書からみる江戸時代の山垣村」の開催および「たんば史料叢書」の刊行
- ・丹波市連携事業成果報告展「区有文書からみる江戸時代の山垣村」(会期：令和5年8月21日～9月3日、会場：やまびこセンター萬歳山)
 - ・〈たんば地域史料叢書1〉『江戸時代の村と山－丹波国氷上郡山垣村山論関係史料－』の刊行
- d. 丹波古文書倶楽部への協力(毎月第2土曜日、8月休会、講師：木村修二)
- ⑨ 大学協定にもとづく加西市との連携事業
- a. 加西市戦争遺産資料拡充調査
- ・『加西市近代遺産調査報告書4、「Dumitru Nistor prizonier de război în Japonia—翻訳：ドゥミトル・ニストルの画文集一』』の発行
- b. 加西市戦争遺跡調査委託
- ・聞き取り調査 (8/24)
 - ・マイクロフィルム資料の目録作成
 - ・神戸大学食資源教育研究センター内の防空壕調査
 - ・加西市地域活性化拠点施設「sora かさい」整備への協力
- c. その他
- ・井上が加西市文化財審議委員として委員会に出席
- ⑩ 尼崎市との連携事業
- ・市沢が尼崎市立歴史博物館の文書館部門の専門委員として運営について助言
- ⑪ 三木市との連携事業
- a. 「三木市と国立大学法人神戸大学との連携に関する協定書」(平成25年6月締結)に基づく、新三木市史編さん支援事業
- ・通史編部会(古代史部会、中世史部会、近世史部会、近代史部会、現代史部会、自然環境部会、文化遺産部会、考古部会)への助言・調査協力
 - ・地域編部会(吉川部会・緑が丘部会・三木部会・青山部会・細川部会・別所部会)活動の助言指導
 - ・三木市立みき歴史資料館企画展「地域の史料たち7～三木の歴史～」(会期：10/14～12/24)
 - ・『市史研究みき』第8号、『市史編さんだより』第14号、第15号の編集
- b. 商工観光課との連携事業
- ・市民グループ「旧玉置家住宅文書保存会」への活動支援
- c. 三木市立みき歴史資料館事業への協力
- ・木村が同館館長の諮問機関である「みき歴史資料館協議会」の委員(会長)として参画

- ⑫ 三田市との連携事業
- a. 旧三田藩主九鬼家資料の総合調査（今年度は実施せず）
- ⑬ 丹波篠山市との連携事業
- a. 丹波篠山市史編さん資料調査等業務共同研究
- ・専門部会（考古編・古代編・中世編・近世編・近現代編・自然環境編・文化財編）の開催
 - ・第2回市史編さん新発見・新収蔵資料展「上立町自治会文書から見える江戸時代の篠山城下町」、5/9～6/18
 - ・第3回市史編さん新発見・新収蔵資料展「丹波篠山に伝わる古文書「丹波木綿と縞帳」、7/1～7/30
 - ・図書館開館20周年記念事業「市史編さん事業展」、8/2～8/20
 - ・第4回市史編さん新発見・新収蔵資料展「鋪之丞さまの初節句」、12/13～1/30
 - ・地域編キックオフシンポジウム「市民とともに作り上げる「丹波篠山市史」、1/13
 - ・資料調査、調査報告会の開催
- b. 市立中央図書館「地域資料整理サポーター」活動への協力
- ・定例会の開催：5/24、6/28、7/19、9/20、12/20、1/17
- c. 市立中央公民館主催「古文書講座（中級編）への出講
- d. 部落史研究委員会へのアドバイザー協力（月2回）
- e. NPO法人SHUKUBA主催「古文書講座」への協力
- ⑭ 明石市との連携事業
- a. 明石藩関連資料調査・公開業務
- ・明石市立文化博物館特別企画展「明石藩の世界X—明石藩の懐事情」（9/9～10/15、於明石市立文化博物館、同館・センター主催事業）
- b. 講演会等 9/24「豪商による明石藩への貸付」講師：加藤明恵
- c. 明石市における地域資料の調査等
- ・卜部和彦家文書調査：9/22、9/27、10/17、11/12、11/22、12/13、1/24、2/14、3/8
 - ・古代播磨の歴史文化遺産調査
 - ・近代史料の調査
 - ・加藤が明石市史編さん委員会へ地域史料調査の担当者として出席
- d. 横河家文書調査・公開業務
- ・資料の目録作成、仮整理等
- ⑮ たつの市に関する連携事業
- a. 神戸大学近世地域史研究会（月1回・原則第1日曜日）
- ・会報の発行
 - ・成果報告書『播磨国龍野城下における寺院と地域—真宗大谷派善龍寺文書翻刻集一』の発行
- ⑯ 姫路市香寺町との連携事業
- ・令和5年度提案型協働事業報告会「ふるさとの道」への参加

- ⑰ 佐用町との連携事業
- ・今年度は事業として実施せず
- ⑱ 福崎町との連携事業
- a. 共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし」
- ・松岡家関係資料調査
 - ・福崎町立柳田國男・松岡家記念館秋季企画展「松岡操 たけ展～松岡五兄弟を育てた夫婦～」(10/7～12/10、於同記念館、センター協力事業)
 - ・中島区有文書目録の作成
 - ・地域資料調査
 - ・『広報ふくさき』への寄稿
 - ・調査合宿：3/7、3/8
- b. 兵庫県指定文化財 三木家住宅文献資料調査
- ・三木家文書のデジタル化
 - ・三木家資料保存ワークショップ：5/6、7/1、9/2、11/4、11/12、1/6、3/2
 - ・『大庄屋三木家資料集5 令和元年度三木家住宅副屋・離れ襖調査』の発行
 - ・大庄屋三木家住宅特別展「ふすまの中から見る三木家一下張り文書調査からわかってきたこと一」(10/28～12/3、於大庄屋三木家住宅、センター協力事業)、三木家入門講座⑦「襖からのぞき見る江戸本屋の営み～三木家と姫路の本屋の交流～」講師：石橋知之（人文学研究科博士課程後期課程）、11/12、於大庄屋三木家住宅
- c. その他
- ・井上が福崎町文化財保存活用地域計画協議会の委員として協議会に参加
- ⑲ 猪名川町との連携事業
- ・町民グループ「猪名川の古文書を楽しむ会」への協力（毎月第3土曜日、9月・11月・1月・2月は休会）
- ⑳ 大学協定に基づく大分県中津市との連携事業
- ㉑ 香美町との連携事業
- a. 文堂古墳と山陰道総合調査委員会
- ・古市、井上が委員に委嘱
 - ・7/14 第1回委員会
 - ・11/18 シンポジウムへの参加

(2) 歴史資料・災害資料の保全・活用

① 歴史資料ネットワークへの協力・支援

- a. 災害対応
- b. 神戸市兵庫区平野地区「奥平野古文書勉強会」(毎月第2日曜日、8月休会)

② 附属図書館震災文庫への協力

- ・2023 12/1「第13回被災地図書館との震災資料の収集・公開に係る情報交換会」(ハイブリッド開催)
- ・サンテレビ所蔵震災報道映像の震災文庫への提供・公開のための検討会の開催
- ・人文学・社会科学データインフラストラクチャー強化事業、震災資料関係への協力

③ 人文学研究科古文書室の所蔵文書整理

- ・今年度は事業として実施せず

(3) 地域歴史遺産を活用できる人材の育成

① 地域歴史遺産の活用をはかるリーダー養成プログラム

- a. 現代 GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」への授業提供
 - ・地域歴史遺産活用研究 A・B (学部は「地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B」、Aは「博物館資料論」との同時開講)：Aは金曜1限、Bは木曜1限に実施
 - ・地域歴史遺産活用演習 A・B (学部は「地域歴史遺産保全活用演習 A・B」、博士課程前期課程は「地域歴史遺産活用演習」、同後期課程は「地域歴史遺産活用企画演習」)。Aは9/7～9に篠山フィールドステーションで、Bは2/8・9に三木市玉置家住宅にて開講

② 平成22年～24年度特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業を定着・普及させる活動

- a. まちづくり地域歴史遺産活用講座：10/21、10/22、主催：人文学研究科・地域連携センター、共催：兵庫県教育委員会、後援：神戸市教育委員会・神戸市灘区
- b. オプションプログラム古文書解読初級講座：11/6・13・20・27、講師：河島裕子(尼崎市立尼崎歴史博物館)

(4) 地域の歴史文化をめぐる情報の共有や交流の促進

- ① 第22回歴史文化をめぐる地域連携協議会「地域歴史遺産を取り巻く多様な取り組みー文化財保存活用地域計画を足がかりにしてー」
 - ・2024 1/21、参加:29 機関 55 名、主催:神戸大学大学院人文学研究科、同地域連携センター、共催:兵庫県教育委員会、科学研究費特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」研究グループ(研究代表者・奥村弘)、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」

(5) 地域連携センターを拠点とするプロジェクト

- ① 科学研究費助成金・特別推進研究「地域歴史資料学を機軸とした災害列島における地域存続のための地域歴史文化の創成」(研究代表者:奥村弘、課題番号 19H05457)
 - a. 国際シンポジウム「大災害時代における地域存続と歴史文化ー地域歴史資料学を機軸としてー」、3/2・3/3、神戸大学統合研究拠点コンベンションホール、オンライン
 - b. 「地域歴史資料データインフラストラクチャ構築領域」関連行事ディスカッション「歴史資料のデータはどのようにすれば増えるのか?」の開催、4/14、国立歴史民俗博物館大会議室およびオンライン
 - c. ションコイ・ガーボル氏講演会「現在のヨーロッパの文化遺産政策と欧州文化遺産認定制度ー歴史家の視点から」Current European Cultural Heritage Policy and the European Heritage Label - from a historian's perspective の開催、9/18、オンライン
 - d. 「災害文化と地域社会形成史」研究会の開催
 - ・5/21、7/22、9/9、11/23、
 - e. 関連行事の共催・協力等
 - ・[共催] 相馬歴史資料ネットワークシンポジウム「そうまの歴史を守る・つたえる」、9/3、於福島県立相馬高校・同若駒会館、主催:そうま歴史資料保存ネットワーク
 - ・[共催] 第13回被災地図書館との被災資料の収集・公開に係る情報交換会、12/1、ハイブリッド
 - ・[協力] 第5回歴史文化資料保全西日本大学協議会、12/17、オンライン開催、主催:人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」、神戸大学大学院人文学研究科
 - ・[共催] 22回歴史文化をめぐる地域連携協議会、1/21、瀧川記念学術交流会館
 - ・[共催] 第10回全国史料ネット研究交流集会、2/17・18、於一橋大学東キャンパス、主催:第10回全国史料ネット研究交流集会実行委員会、人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」
- ② 歴史文化史料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業
 - a. 講演会「よみがえる聆涛閣コレクションー神戸歴史遺産「住吉の豪商・吉田家関係資料」を知り、守り、伝えるー」の開催、4/15、於御影公会堂、共催:一般財団法人住吉学園住吉歴

- 史資料館、神戸大学人文学研究科地域連携センター、協力：神戸市
- b. 第5回歴史文化資料保全西日本大学協議会の開催、12/17、オンライン
 - c. 伊方原発関係史料の保存・整理作業
 - d. 関連事業の共催・協力
 - ・[共催] 第12回被災地図書館との被災資料の収集・公開に係る情報交換会、11/11、オンライン
 - ・[主催] 歴史文化資料保全西日本大学協議会、12/18、オンライン
 - ・[共催] 22回歴史文化をめぐる地域連携協議会、1/21、瀧川記念学术交流会館
 - ・[共催] 第10回全国史料ネット研究交流集会、2/17・18、於一橋大学東キャンパス
 - e. その他資料調査、ワークショップ等多数

(6) 地域連携研究と研究成果の公表

- ① 年報『LINK【地域・大学・文化】』15号の刊行
 - ・12/28発行、特集「自治体史編さんの現在—参加と活用の新しい取り組み—」、インタビュー・シリーズ4]、フィールドリポート2本、「LINKを読む」1本、活動報告4本、時評・展示評2本（総頁数142頁）
- ② 地域関連研究
 - a. 地域連携センタースタッフによる日本学術振興会科学研究費助成事業
 - b. 講演、市民講座等への出講多数

以上、活動の詳細は、2024年3月末に発行された、当センターの2023（令和5）年度事業報告書を参照。また、同報告書は、神戸大学学術成果リポジトリ Kernel に公表されている。

2023 年度 保健学研究科地域連携センター活動報告

[概要]

2023 年度の保健学研究科地域連携センターは、委員 9 名からなる委員会によって運営され、多世代にわたる地域住民をシームレスに支援し、地域住民の多様な健康課題の解決や環境づくりに継続的に取り組んだ。実施事業は、①就学前の発達障がい児とその家族に対する支援、②医療と福祉の連携による障がい者への生活支援、③地域高齢者・認知症の方とご家族への支援、④自治体の保健事業支援、⑤子宮頸がん啓発活動、⑥家族支援相談、⑦ふれあいスポーツチャレンジ、⑧精神障害・発達障がい者をサポートする NPO 法人のサービス向上に向けた支援、⑨地域の子どもの居場所づくりボランティア、⑩地域の小学校における保健室ボランティア、⑪ハイリスク児を持つ親への育児支援の 11 事業であった。COVID-19 に対する感染予防対策を徹底しながら対面とオンラインを取り入れるなど工夫して事業を展開した。2024 年 2 月 17 日に地域連携センター活動報告会で主な事業の成果を報告した。

[活動内容]

①就学前の発達障がい児とその家族に対する支援

日程	プログラム	講師等
5月20日(土)	「少し先行く親子の歩んできた道のりの話」	保護者 W さん
6月10日(土)	「神戸市における発達障害児療育システム」	神戸市総合療育センター 高田 哲
7月8日(土)	「親子体操とおうちでできる運動」	NPO 法人アスロン 井原 一久
8月26日(土)	講演①「発達のが気になる子どもへの性教育」 講演②「発達のが気になる子どもの心の相談に関する学校の取り組み」	①中部大学生命健康科学部 津田 聡子 ②神戸市教育委員会事務局 靱井 雄太
9月9日(土)	「子どもの居場所づくりの取り組み」	NPO 法人 ふぉーらいふ 中林 和子
10月14日(土)	「発達のが気になる子供たちの体験している世界」	株式会社 ALTHEA 渡邊 雄介
11月11日(土)	「これまでの子育ての体験について GW 拡大版」	保護者 W さん
12月16日(土)	ぽっとらっくクリスマス会「ワイワイ座談会 with クリスマス製作」	クリスマス・フォトドームづくり 神戸大学大学院 山本 暁生
2月10日(土)	「レジリエンス（立ち直り力）を高めようーアタッチメントとマインドフルネスに焦点をあててー」	神戸教育短期大学 中塚 志麻

就学前の“発達のが気になる子ども”とその家族のための教室「ぽっとらっく」は、保護者が発達障がいについて学ぶ講習会と、学生・保育士・保健師・地域のボランティア等の託児による子どもプログラムを実施している。2023 年度は計 9 回オンラインとのハイブリッド形式で開催し、保護者延 69 名、児延 51 名、ボランティア延 79 名が参加した。今年度は須磨区と灘区の 2 か所に広げて実施した。年度末には、講演録や参加者の声等をまとめた活動報告書を作



成し、近隣区の保育施設等に送付した。参加者へのアンケート（延 45 名）からは、講習会に参加することで参加前に感じていた悩みや課題が「解決した」「やや解決した」を合わせて 84%おり、プログラムが子育てにおける悩みの解決に一定の役割を果たしたことが示唆された。

学生ボランティアおよび新米支援者のスキルアップを目指して、「大人が変われば子どもは変わる 発達障害の子ども達の体験している世界」（講師：株式会社 ALTHEA 代表取締役 渡邊雄介氏）をテーマに研修を開催した（2024 年 1 月 20 日）。高校生を含む 19 名のボランティア・支援者が参加した。「実践を元にお話を聞けてたいへん勉強になりました。事例の対応もとても参考になりました。」など研修が発達障害への理解に役立ったことが示された。他に、今年から学内のボランティアサークルと協力し一定回数のボランティア活動へ参加した場合にボランティア証明書を交付する仕組みを始めて計 4 名に証明書を発行した。

②医療と福祉の連携による障害者への生活支援事業

学生の障害者福祉施設でのボランティア活動（概ね 2 ヶ月に 1 回の施設訪問）、地域交流事業における後方支援（地域イベントへの参加、外出支援等）、障害者福祉施設に勤務するケアスタッフの実践力向上の支援（学習会）を柱として事業を展開している。今年度は、地域イベントが 4 年ぶりに開催され、学生らとともに地域住民を対象に「呼吸機能測定」および「吹き戻しの作成」を実施した。呼吸機能測定では 15 名、吹き戻しの作成では約 100 名の参加があった。学習会では「糖尿病」をテーマとして開催し、8 名の参加があった。しかし、今年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、学生のボランティア活動は実施できなかった。



③地域高齢者・認知症の方とご家族への支援

認知症予防・支援は高齢者が地域において健康に暮らし、充実した人生を送る上で極めて重要である。本事業では、市民および医療福祉専門職者の協働による認知症予防・治療・介護を中心とした支援活動に力を注いでおり、1) 在宅認知症高齢者のご家族、及び医療福祉関係者への研修会を通じた啓発・実践力向上支援、2) 地域在住高齢者へ認知症に関する講演会・認知症予防支援を

行っている。今年度は 2) に焦点を当て、①認知症予防に関する講演とタッチパネルを用いた簡易な認知機能検査、認知症に関する相談会を大学院生、留学生、学部生のボランティアとともに 1 月に行った（地域高齢者 25 名参加）。②地域在住高齢者を対象に認知・運動機能と意欲の向上を目的とした手指運動介入プログラムを実施し（数理・データサイエンスセンターとの共同プロジェクト）、来年度も引き続き行う予定である。

④自治体の保健事業支援

2018 年度より少子高齢社会に適した地域づくりを目指して、自治体における効果的な保健事業の展開のために、保健計画の立案や評価や人材育成計画立案の支援を実施している。2023 年度は、宝塚健康および伊丹健康福祉事務所管内の保健師を対象として支援を実施した。支援は職場外研修（Off the Job Training）と職場において実務を通じて行われる教育（On the Job Training）を組み合わせ、保健事業の評価計画から評価まで支援を実施した。9 月 28 日に 26 名、2 月 29 日には 28 名の保健師を対象に 4 つの保健事業について支援を行った。また、加古川保健福祉事務所の保健師らの第 1 波から第 6 波の

COVID-19 感染症への対応に関する分析および兵庫県公衆衛生協会および日本公衆衛生看護学会での発表の支援を行った。

⑤子宮頸がん啓発活動

2023 年度は新型コロナウイルス感染症の 5 類変更にもない、Love49 キャンペーンにおける街頭での啓発活動を再開した。また、神戸市役所において神戸市保健局の職員と今後の子宮頸癌検診や HPV ワクチン接種について意見交換を行った。その際に本学学生が提案した内容が子宮頸癌検診の無料クーポン配布に反映されることとなった。さらに、神戸大学やその他の大学の保健学科の学生を対象としたアンケート調査の結果が Nursing & Health Sciences 誌に掲載された。



⑥家族支援相談事業

家族お悩み相談室は、完全予約制（無料）で、大学への来所、家庭訪問、オンラインによる家族支援を実践している。今年度は、1) 在神戸中国人に対応するために中国語版リーフレットを製作・配布し、中国語による相談の開始、2) 家族支援を実践する看護職者への研修制度の構築をした。7 家族に家族支援を実施している。香港で開催された国際学会 2nd International Advanced Nursing Practice Conference において本事業の内容を発表し、Outstanding Poster Presentation Awards を受賞した。コロナ禍での家族支援の成果は、国際ジャーナルに掲載された 2 本の論文に活かされている。能登半島地震の発生を受け、神戸市への避難者の家族支援、支援者支援を実践している。



⑦ふれあいスポーツチャレンジ事業

公益財団法人こうべ市民福祉振興協会と連携し、発達気になる小学 1・2 年生が体を動かす楽しさを体験し、運動への意欲や達成感を持てる機会とすること、保護者が学び、情報交換する場を設け家族支援の機会とすることを目的にのびのび運動ひろば事業を実施した。今年度は計 33 組の親子が参加し、学生ボランティア延べ 80 名とともに教室を開催した。初回と最終回に体力測定、保護者へのアンケート調査を行い、事後アンケートでは、全員が教室に「満足した」「やや満足した」と回答し、保護者のニーズに合った教室運営ができたと評価した。

⑧精神障害・発達障害者をサポートする NPO 法人のサービス向上に向けた支援事業

地域在住障害者を支える NPO 法人の多くは小規模で、非専門職がスタッフとして支援を行っている。一方、利用者の障害種別は異なり、利用者の理解やかかわり方が難しいことも多く、スタッフへの教育的支援が必要である。本事業では、非専門職スタッフの知識・技術の向上による対利用者サービス向上を目標として、保健・医療・リハビリテーションの視点で研修を定期的にスタッフ 6-10 名に対して実施している。2023 年度は、7 月 30 日、11 月 27 日に事例検討研修会を行った。

⑨地域の子ども放課後見守りボランティア

神戸市子どもの居場所づくり事業として横尾ふれいあいのまちづくり協議会が主催の「あさひ教室」は、地域の小学生を広く受け入れ、学習支援や遊びを通して地域の中で子どもたちの育ちを支え、見守りを行っている。同教室は横尾地域福祉センターで週3回、午後5時から7時に開催され、本学学部生と大学院生がボランティアとして参加協力し、学習支援の部分を中心に子どもたちの放課後を見守った。2023年度は9名の学生が85回参加した。また、月2回の遊びの時間を学生が企画運営して、教室運営に協力した。学生にとって教室利用小学生はもとより、その保護者や地域ボランティアなどとの多世代交流の貴重な機会となっている。

⑩地域の小学校における保健室ボランティア

神戸市内にある小学校で養護教諭の先生と連携・協働し、保健室・別室登校の児童とのコミュニケーションを通し、様々な背景を抱える子どもたちへの支援や学校保健について深く考える機会を作ることを目的として活動している。年間を通し、ボランティア学生が参加できる日を養護教諭の先生と共有し、また、特にイベントが開催される日などは事前に確認し参加者を募る等、養護教諭の先生と連携しながら実施した。2023年4月～2024年3月までの46日間に、延べ50名（実人員6名）の学生が保健室や通級指導教室で過ごす子どもたちとの関わりなどを実施した。新学期の発育測定実施時には身体計測の補助、音楽会では子どもの付き添い等の支援を行った。ボランティアとして参加した学生は、養護教諭の先生、子どもや保護者からいただいた言葉により、将来看護師として活動する中での様々なビジョンの広がりを実感することができた。

⑪ハイリスク児を持つ親への育児支援事業

地域で暮らす極低出生体重児で生まれた子どもをもつ家族に対し、ふれあい遊びや様々なプログラム、保護者同士の交流や専門家（小児科医師・臨床心理士・看護師・助産師・保育士等）からのアドバイスを通して、子どもの豊かな成長・発達を目指すことを目的としている。2023年4月～2024年3月まで20回の親子教室が開催され、夏祭りやイベント、小児科医による「お話し会」などのプログラムが開催された。2023年4月～2024年3月まで20回の親子教室が開催され、うち17回に学生ボランティア延べ49名（実人員11名）が参加した。通常プログラムでは0～2歳児の託児、夏祭りの出店担当や遠足の付き添いなどのイベントの運営補助をボランティアとして担当した。ボランティアとして参加した学生は、極低出生体重児とその家族が抱える悩み、YOYOクラブのような子育て教室の意義について理解が深まった。

⑫保健学研究科地域連携センター報告会

2024年2月17日（土）、KOBE Co+ CREATION CENTER（三宮センタープラザ9F）にて、保健学研究科地域連携センター報告会を開催し、神戸市発達障害者支援センター長岡本和久氏の「地域連携センターとの協働と今後への期待」の講話と主な事業の報告を行った。



農学研究科地域連携センター 令和5年度活動報告

農学研究科地域連携センターは、大学が保有する知識や技術を、農山村地域社会の問題解決および価値創造において積極的に活用し、地域社会に貢献することを目的に、2003年度に創設された。

農学研究科は「食料・環境・健康生命」に関わる諸問題を専門的かつ総合的に教育研究することを基本目的としている。そうした中で、地域と農学を結ぶ拠点となり、地域の多様なニーズを共同の研究プロジェクトにつなげる等、農学研究科と地域を結ぶ中間支援機関としての役割を担い、センターが中心となって、共同研究、セミナー、ワークショップ、意見交換会などの地域交流を積極的に実施し、社会貢献を進めている。

農学研究科では、2007年より丹波篠山市と連携協定を結び（2010年から全学として協定締結）、連携活動を進めてきた。現在、兵庫県東播磨県民局（2018年～）、岡山県西粟倉村（2017年～）、兵庫県農業協同組合中央会（2010年～）との間に連携協定を締結し、実践的な教育・研究活動を展開している。また、丹波篠山研究発表会、ため池みらい研究会など各連携地域にて開催し、市民との研究成果の共有と研究ネットワークの構築を進めている。

以下、今年度の活動概要について事業ごとに報告する。

I 地域共同研究

当センターの研究員が中心となり、自治体や住民団体、NPO、協同組合等とともに、地域の課題解決や価値創造に資する調査研究を実施。また、農学部／農学研究科の学生や研究者が地域と共同で実施する調査研究および事業を支援している。

■センターの研究員による調査研究

1. 地域おこし協力隊活動のコンフリクトとその対処 安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）、丹波篠山市、丹波篠山キャピタル
2. 地域運営組織の運営支援に関する研究 安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）、丹波篠山市、丹波篠山キャピタル
3. 丹波篠山市内の祭囃子等の保存・伝承 三原香奈子（丹波篠山駐在研究員）、篠山春日神社秋祭保存会

■農学部／農学研究科の研究者による調査研究

1. 黒大豆の機能性研究 山下陽子（生物機能開発化学）、丹波篠山市内の黒豆卸店
2. 篠山城跡南堀のハス復活事業のモニタリング調査事業 鈴木武志（土壌学）、丹波篠山市ほか
3. 兵庫県内の圃場毎営農状況の自動判別法の開発 長野宇規（地域共生計画学）、丹波篠山市ほか
4. バイオエコノミーを基軸とした西粟倉村の持続可能な開発目標（SDGs）達成 長野宇規（地域共生計画学）、岡山県英田郡西粟倉村
5. ため池事前放流による雨水貯留容量の確保と洪水軽減効果の評価 田中丸治哉（水環境学）、加古川流域土地改良事務所ほか
6. 動物性脂質の有効活用に向けた畜産副産物のフードバリューチェーンの構築 上田修司（生命機能科学）、兵庫県内の食肉加工業者、食品メーカーほか
7. 「ため池みらい研究所」による市民主体の研究と実践 中塚雅也（農業農村経営学）、長野宇規（地域共生計画学）、東播磨県民局、ため池みらい研究所ほか
8. 神戸大学を基盤としたフードコミュニティの構築 中塚雅也（農業農村経営学）、片山寛則（食資源教育研究センター）、卒業生農業経営者、JA兵庫六甲
9. 有機農産物の販売促進に関する実践的研究、高田晋史（食料経済・政策学）、JA兵庫六甲
10. スギ人工林の広葉樹林化に関する研究 石井弘明（森林資源学）、姫路市林産振興課

■農学部／農学研究科の学生による調査研究

1. 経済実験による丹波篠山黒枝豆の販促政策の検討 岡本美咲（農学研究科博士課程）、八木浩平（国際食料情報学）、丹波篠山市役所、JA 丹波ささやま、丹波篠山かまい農場
2. 地域による学生援農ボランティアの受け入れ継続条件 中川晶太（農学部4年）、小川景司（農業農村経営学）、西紀南まちづくり協議会
3. 広域集落営農による農地保全：荒廃農地の発生防止・再生活動の実態より 濱田紗希（農学部4年）、小川景司（農業農村経営学）、（農）志方東営農組合、（株）八幡営農
4. 移住者の地域づくり活動における心理的安全性の役割 竹村実夢（農学部4年）、小川景司（農業農村経営学）、（一社）みつおおじ
5. ため池管理作業に対する若手人材の参加モチベーション 佐々木太一（農学部4年）、中塚雅也（農業農村経営学）、（一社）ため池みらい研究所
6. 地域食の継承問題と移住起業者の役割 岡久花衣（農学研究科修士課程）、中塚雅也（農業農村経営学）、（一社）丹波篠山キャピタル、丹波篠山いずみ会

II 地域交流活動

フォーラムや研究会、セミナー等の開催を通じて相互理解を目指すとともに、知識を共有し、地域の発展につながる取り組みを実施している。

■研究会・セミナーの開催

1. 地域連携研究会（A-Launch）
第22回（10月17日）「綿づくりから地域活性化～綿から生まれたマヨネーズ!?」
話題提供：山田真輝／地域連携センター、濱田紗希／食料環境経済学講座 小川ゼミ4回生
2. セミナー等
 - ・共同講演会：「女性農業者×学生」食と農の魅力発信～食と農の次世代への継承に向けて～
農林水産省近畿農政局兵庫拠点、アグリプリンセスの会と講演会を共催した（11月17日）。
 - ・丹波篠山学生団体合同イベント「味わう篠山」
神戸大学地域連携推進本部ボランティア支援部門主催の、丹波篠山市で活動するボランティアサークルを紹介するイベントを神戸大学キャンパス内で開催した（12月12日）。
 - ・栄養教室
神戸市サッカー協会（4種）北地区の選抜選手の合宿において小学4年生（48名）および6年生（32名）の選手に対して栄養講座を開催した（6月24・25日）。話題提供：橋本堂史（応用生命化学講座准教授、内海 真緒 氏（神戸学院大学 栄養学部 助手）

■農村ボランティア「ノラバ」事業

農村ボランティアバンク KOBE「ノラバ」の事務局として、ボランティアを必要とする農家と学生・市民のマッチングを進めている。今年度は、20軒（うち新規1）の農家登録と計187人（うち新規40）のノラバイター登録があり、43件のマッチングが図られた。登録農家へのアンケートも実施したところ、ノラバを通さず継続的に通っているノラバイターが10名いることが分かった。

また、東播磨フィールドステーションとため池みらい研究所と協力して「ため池かいぼり」へのボランティア参加も企画実施した。

■学生地域活動支援

当センターでは、地域と連携した取り組みを進める学生団体に対して、情報提供、情報発信のサポート、

相談対応など、活動の発展と充実に向けて支援を実施している。今年度は、3団体（にしき恋、AGLOC、Luonto）の地域活動を支援した。あわせて、丹波篠山市で活動する団体間で相互の情報共有を図ることを目的に、「篠山学生活動団体連絡協議会（さされん）」を組織し、運営を支援している。また、大学内の活動支援として、学生団体が農家とともに生産した農作物（黒大豆等）を学内販売する直売所「ささやま家（や）」を設置し、学生らが、生産から販売までの過程を経験する機会を提供している。

■神戸大学食農ブランド創造事業への参画

大学としての統一的な流通チャンネルとブランドを確立し、神戸大学食農ブランドを創造する「神戸大学食農ブランド創造事業」に、附属食資源教育センターらとともに取り組んだ。この事業では、(1) 大学発の農畜産物の販売・ブランド価値の強化、(2) 地域連携による商品開発と販路の開拓、(3) 食農ブランド化を牽引する法人の設立・運営を目指している。本年度は、その運営主体となる「一般社団法人神戸大学フードコミュニティ」の設立支援をおこなうとともに、学内販売所「神戸大学マルシェ」の開設・運営を支援した。また、一般社団法人神戸大学フードコミュニティの設立記念フォーラム（2024年3月27日）も共催した。

III 相談・情報発信

大学と地域をつなぐ拠点として、所属するスタッフが各種相談に対応している。2023年（度は45件の相談が寄せられた。内容は地域活動や食農コープ教育などに関する相談が多く、相談者は神戸大学生・大学院生12件、行政14件、地域団体5件、企業6件、教員8件と幅広く相談を受け付けた。また、Annual Report（活動報告書）の発行をはじめ、ホームページやSNSを通じて地域連携活動に関する情報を発信している。

1 地域共同研究

地域の課題解決や価値創造を目的に、行政、協賛組合、市民団体、NPO等と連携して調査研究を実施しています。マッチングや事業化、事業結果発表等も行っています。

兵庫県内の農畜生産状況の自動判別法の開発
神戸大学大学院農学研究科

篠山産物の農場毎生産状況のモニタリング調査
農学研究科

黒大豆の機能性研究
農学研究科

バイオエコノミーを軸とした西農山村の持続可能な開発戦略(SDGs)達成
農学研究科

たけのこ産地拡大による雨水貯留設備の導入と洪水軽減効果の評価
農学研究科

動物性蛋白質の有効活用に向けた畜産産物のフード・リユースチェーンの構築
農学研究科

スギ人工林の広域緑化に向けた市民主体の研究と実践
農学研究科

丹波篠山フィールドステーション

農村イノベーションラボ

東播磨フィールドステーション

神戸大学大学院農学研究科 地域連携センター

兵庫産物の農場毎生産状況の自動判別法の開発
農学研究科

篠山産物の農場毎生産状況のモニタリング調査
農学研究科

黒大豆の機能性研究
農学研究科

バイオエコノミーを軸とした西農山村の持続可能な開発戦略(SDGs)達成
農学研究科

たけのこ産地拡大による雨水貯留設備の導入と洪水軽減効果の評価
農学研究科

動物性蛋白質の有効活用に向けた畜産産物のフード・リユースチェーンの構築
農学研究科

スギ人工林の広域緑化に向けた市民主体の研究と実践
農学研究科

地域共同研究のコンフリクトとその対処
農学研究科

地域連携組織の運営支援に関する研究
農学研究科

丹波篠山市内の採種子等の保存・伝承
農学研究科

学生による研究

経済実証による丹波篠山産物の販路拡大の検証
農学研究科

地域による学生産物ブランドの受け入れ継続条件
農学研究科

広域産物による地域安全・防災の検証と共生生活の実現
農学研究科

移住者の地域づくり活動における心身の安全性の役割
農学研究科

ため池管理作業に対する若手人材の参加モチベーション
農学研究科

地域産物の品質向上と移住者との関係
農学研究科

Annual Report 2023 の発行

IV 食農コープ教育プログラムの運営

農学部では、学部教育で培う専門性（理論）と結びつけながら、生産者や生活者の視点から地域の課題を学び（実践）、課題解決に貢献できる人材の育成を目指す「食農コープ教育プログラム（Cooperative Education）」を実施しており、特に、現場での実践活動を伴う科目の内容を充実させるよう、取り組みを進めてきた。当センターはプログラムの事務局として3つの科目を提供している。

■実践農学入門

農村地域（丹波篠山市）において、地元の農家を指導員とし、農作物の栽培や、むら仕事を体験しながら農業や農村生活への理解を深めることを目的としている。2023年度は丹波篠山市雲部地区を受け入れ先として、42名の学生が9班に分かれて黒大豆の栽培を中心とした農作業を体験した。



雲部地区にて（実践農学入門）

■実践農学

農業農村の現場での調査型プロジェクトやインターンシップ型プロジェクトへの参加を通して、地域の産業・環境・社会を理解する基礎的な技術や能力、企画力や調整力を身につけることを目的としている。

2023年度は、計16名の履修者が3つのプロジェクト（ミチのムコウ：6名、ささやまポイント：5名、ファーマーズマーケット販促：5名）に分かれて活動した。



ファーマーズマーケット販促（実践農学）

■兵庫県農業環境論 A/B

兵庫県の農林水産業の位置づけ、現状と課題、政策展開を体系的に正しく理解し、批判的に評価した上で、適切な対策を提案する力を養うことを目的としている。

兵庫県農業環境論 A では、兵庫県職員、農水省職員、JA 職員等を講師に迎え、オムニバス形式で講義を実施した（履修者数：95名）。

兵庫県農業環境論 B では、4班に分かれて、「有機農産物の消費拡大・促進のためのビジネスモデルを考えよう」というテーマで、現在の市場・消費者意識に着目しながら有機農産物の認知度を高めることを目的とした政策立案に向けたワークショップを実施した（履修者数：21名）。



兵庫県農業環境論 B

東播磨フィールドステーション 令和5年度活動報告

東播磨フィールドステーションは、ため池をはじめとする地域資源の新たな管理システムを構築し、地域の持続的な発展を支えるために設置された地域の交流・研究拠点である（2018年6月、加古川市にて開所）。兵庫県東播磨県民局の後押しにより、開所以来、研究者が駐在する形で諸活動をコーディネートすることで成果を残してきた。2022年度からは、大学研究者に、ため池管理者、事業者が加わる形で「一般社団法人ため池みらい研究所」を設立し、市民研究所として活動を推進しているが、東播磨フィールドステーションは、それらの活動拠点としての機能を発揮し続けている。

なお、2022年8月には、運営基盤を強化するため、神戸大学農学研究科、京都大学大学院農学研究科、兵庫県立大学地域創造機構、兵庫県東播磨県民局に、ため池みらい研究所が加わる形で連携協定を再締結し、「東播磨地域創生連携協力推進協議会」を設立した。本年度は、地域連携を支える事業を昨年の3つ（地域創造研究、地域人材育成、活動・情報支援）から6つ（相談窓口事業、研究事業、交流活動事業、広報活動事業、施設管理事業、推進協議会の運営）に再編成し推進した。

I 相談窓口

地域住民、企業、行政等からの地域づくりに関する相談に応じて、必要な助言や対応先の紹介などをおこなった。主な相談内容は、ため池や水路、里山などに関する資源の適切な管理や、地域づくりや場づくり、各種計画策定や地域資源に関するもので本年度の相談件数は延べ96件であった。

II 研究

3つの枠組みのもと、6プロジェクト、うち19のサブプロジェクトを実施した。これらのプロジェクトには、のべ24人のコアメンバーが関わっている。

(1) ため池サービスの維持

- ① 次世代のため池管理人材の育成プロジェクト
- ② 草刈りの継続実施に向けた仕組みづくりプロジェクト
- ③ 農業・地域資源管理のスマート化プロジェクト

(2) ため池サービスの向上

- ④ 親水空間の創造プロジェクト

(3) 農業・農村資源の管理

- ⑤ 水を育む里山を再生するエコビジネスの創出プロジェクト
- ⑥ 農業・農村の振興および担い手確保プロジェクト



ため池管理組織を対象とした研修会
(東播磨フィールドステーション)

III 交流活動

県民や企業などの参加を得て、ため池管理組織強化や草刈りの講習会などを実施するとともに、東播磨フィールドステーションとため池みらい研究所の取り組みの理解を深めるフォーラムやセミナーを開催し、学びの場づくりをおこなった。また今年度は、大学と地域が連携し、授業（若者視点でため池の課題に取り組む - 半年間の学生プロジェクト -）の実施および終了後の継続支援をおこなった。令和5年度は研修会などをのべ39回・628人が参加した。



大学と地域が連携し、
若者視点でため池の課題に取り組むプログラム
(ため池アクション!)

IV 広報活動

東播磨フィールドステーションとため池みらい研究所に関する情報を、広く県民や地域企業と共有を図るため、紙や電子媒体（SNS）等を活用し発信した。本年度は、主要メディアに多く掲載されるとともに（計11件）、SNSのフォロワー・アクセス数も微増傾向にあった。

V 施設管理

利用者が安全で安心して施設を使用できる施設空間を維持した。具体的には、外観の魅力化としては山採り植物を活用した植栽、内観の魅力化としては、照明器具の改善やバックヤードの整理・リフォームなどをおこなった。

開室日や訪問人数は、開設以来最も多く、176.5日、のべ1199人となっている。これは、研究所の運営やプロジェクトのコアに関わる人材が増えたためだと考えられる。

VI 推進協議会の運営

推進会議を計8回開催し、連携協力協定に基づく取り組みについて協議を行い、その円滑かつ適正な運営を図った。本年度の特徴は、ため池みらい研究所と市町の連携強化に努めたことである。推進会議では、連携強化に向けた戦略策定をおこない、ため池みらい研究所と稲美町との間で包括連携協定を締結した（2024年3月28日）。

2023年度 運営体制 協定推進会議メンバー

中塚雅也（神戸大学大学院農学研究科 教授）、長野宇規（神戸大学大学院農学研究科 准教授）、星野敏（京都大学大学院農学研究科 教授）、内平隆之（兵庫県立大学地域創造機構 教授）、柴崎浩平（（一社）ため池みらい研究所代表理事 / 兵庫県立大学環境人間学部 助教）

スタッフ 山田真輝（地域連携センター 教育研究補佐員）



稲美町との連携協定締結式
(稲美町役場)



市民が提供する草刈り有償サービスの活動
(播磨畦師)



水を育む里山を再生する
エコビジネスの活動 (山採り)

神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボおよび 丹波篠山フィールドステーション 令和5年度活動報告

神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボおよび丹波篠山フィールドステーションは、神戸大学と丹波篠山市が連携し、地域の発展に資する研究と実践的な人材育成を目指して、“生きた現場”での研究・教育活動を進めるための拠点施設である。また、学生や研究者が丹波篠山市で活動するための情報収集・研究支援の場、地域住民等と大学のネットワーク形成の場となることを目指している。令和4年度は、地域の人材育成機能の強化を目的に組織再編をすすめ、「一般社団法人丹波篠山キャピタル」を市と大学の協力のもと設立した。丹波篠山キャピタルには、農学研究科地域連携センターで担っていた「丹波篠山市地域おこし協力隊コーディネート」業務を移管し、「篠山イノベーターズスクール」と一体的に人材育成事業をおこなっている。

令和5年度は地域連携を支える以下の3つの事業（地域創造研究、地域人材育成、活動・情報支援）を推進した。

I 地域創造研究

本年度は、農学研究科地域連携センターの駐在研究員により、丹波篠山市の政策提言につながる複数の共同研究が進められた。また、神戸大学等の研究者等が丹波篠山市で実施する調査研究の支援を通じて、地域の発展と、他地域へ展開可能な地域課題の解決に資する実践的な知の創造を目指した。

■地域共同研究（11テーマ）

1. 地域運営組織の運営支援に関する研究
安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）、中塚雅也（農学研究科）、丹波篠山市地域振興課、丹波篠山キャピタル
2. 地域おこし協力隊活動のコンフリクトとその対処
安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）、中塚雅也（農学研究科）、丹波篠山市地域振興課、丹波篠山キャピタル
3. 丹波篠山市内の祭囃子等の保存・伝承
三原香奈子（丹波篠山駐在研究員）、安部梨杏（丹波篠山駐在研究員）、篠山春日神社秋祭保存会
4. 兵庫県丹波篠山市における市史編さん事業のための研究と検討
奥村弘（人文学研究科）、松本充弘（人文学研究科）、人文学研究科地域連携センター、丹波篠山市立中央図書館
5. 黒大豆の機能性研究
山下陽子（農学研究科）
6. ため池事前放流による雨水貯留容量の確保と洪水軽減効果の評価
田中丸治哉（農学研究科）、丹波県民局篠山土地改良事務所
7. 地域人材育成エコシステムの構築
中塚雅也（農学研究科）、安部梨杏（丹波篠山FS）、丹波篠山市創造都市課、丹波篠山キャピタル
8. 篠山城跡南堀のハスのモニタリング調査
鈴木武志（農学研究科）、丹波篠山市農都環境課
9. 地域食文化の継承と創造のためのプラットフォームの構築
岡久花衣（農学研究科学生）、中塚雅也（農学研究科）、丹波篠山キャピタル、丹波篠山いずみ会
10. 学生援農ボランティアの地域による受け入れ継続条件の解明
中川晶太（農学部4年）小川景司（農学研究科）

11. 経済実験による丹波篠山黒枝豆の販促政策の検討

岡本美咲（農学研究科博士課程）、八木浩平（農学研究科）、丹波篠山市ブランド戦略課、農都政策課

II 地域人材育成

教室での学習と関連した職業体験や生活体験を学生に提供し、現場や社会に貢献できる人材を育成する地域密着型の体験学習プログラム「食農コープ教育プログラム」では、1年生を主な対象とした「実践農学入門」と2～4年生を対象とした「実践農学」を開講している。より実践的な企画立案から検証実験までのプロセスに関わる「実践農学」は、丹波篠山エリアでは2グループが活動した。また、地域人材育成の中核組織として、一般社団法人丹波篠山キャピタルの立ち上げに参画し、「篠山イノベーターズスクール」「地域おこし協力隊コーディネート」の企画、運営業務支援をおこなった。



イノベーターズスクール CBLの様子



「ミチのムコウ」との共同プロジェクト（実践農学）

1. 「食農コープ教育プログラム」の運営支援

「実践農学入門」は、42名が受講し、雲部地区の9世帯の受け入れ農家ごとに班に分かれ、5回の現地実習と、地域の課題解決に向けた提案を考えるためのワークショップを含む2回の学内学習を行い、現地での成果報告会を実施した。

「実践農学」では、古市地区において「ミチのムコウ」との共同プロジェクトと、ささやまポイントの2つのプロジェクトに取り組んだ。「ミチのムコウ」との共同プロジェクトでは、地元農家中心の「ミチのムコウ」の一員として酒米の田植えや稲刈り、お酒造りに参加し、プロジェクトの継続的な人材確保という課題設定のもと活動を行った。また、ささやまポイントでは、農業ボランティアポイント制度のアイデアから、農家へのヒアリングや市職員の方々との意見交換を通してポイント制度の企画立案に取り組んだ。

2. 一般社団法人丹波篠山キャピタルへの参画と運営支援

人材育成を中心とする連携事業の推進主体となる一般社団法人丹波篠山キャピタルの運営を主導している（代表理事：中塚雅也（農学研究科教授）、副代表理事：堀井宏之（丹波篠山市副市長）、理事として、清水

夏樹（丹波篠山市農都環境政策官）、清野未恵子（人間発達科学研究科准教授）が参画）。丹波篠山キャピタルでは、①人材支援事業として、篠山イノベーターズスクールの運営と地域おこし協力隊コーディネート、②人材管理事業として、新しい関係づくりの制度開発、人材の紹介・マッチング、③知識管理事業として、地域調査・コンサルティング、研究ネットワークづくりを進めている。

なお、2016年10月より実施している起業・移住促進プログラム「篠山イノベーターズスクール」は、2023年度は9期生・31名が履修した。ビジネス創出に必要な基礎知識や手法を学ぶセミナーも6科目が開講されるとともに、CBL（Community Based Learning）では、「丹波篠山版 CSA を作ろう」、「人をつなぐ地域商店をつくろう」、「丹波篠山茶を売り出そう」、「みんなで作る地域 DX ビジネス」をテーマに演習を行った。これらの企画・運営、講師等に神戸大学の教員が引き続き協力している。なお、これまで総勢239名が篠山イノベーターズスクールに入学し、56名（うち市内37名）が起業・継業し、26名（うち市内14名）が新事業創出を達成している。

Ⅲ 活動・情報支援

1. フォーラム・セミナー等の企画・開催

2023年度は、市内外の参加者を募った学習会や情報交換会を開催した。丹波篠山市に関連する大学の活動・研究の成果発表や情報共有を行う第4回 丹波篠山研究発表会（2月24日開催）では、複数の大学の学生・研究者、地域住民を含む113名の来場者があり、活発な情報共有、ネットワーキングが行われた。



第4回丹波篠山研究発表会

また、地域住民・団体からの相談への対応を積極的に推進するとともに、フィールドステーションのシェアオフィス/コワーキングスペース利用を試行し、地域に開かれた大学の交流拠点となることを目指している。

2. 神戸大学教員の委員・アドバイザー参加

農都ささやま外来生物対策協議会会員、丹波篠山市さとの森づくり連携ネットワーク会議（木育・担い手部会）アドバイザー、丹波篠山市有害鳥獣対策推進協議会、同被害対策支援チーム、森の学校推進委員会委員長、丹波篠山市農都環境アドバイザー、丹波篠山市農都創造審議会委員、兵庫県立篠山東雲高等学校評議員、古文書講座（中級編）講師、部落史研究委員会アドバイザー

3. 情報発信

ホームページやFacebook等SNSによる情報発信に加え、学生団体や地域創造研究の研究・調査成果などについて、テレビ局や新聞社の取材を積極的に受け、多くの取組が報道された。

4. 学生活動団体サポート

丹波篠山市内で実施されてきた「実戦農学入門」や「実践農学」を履修した学生たちによる3つの学生活動団体（地域密着型サークル「にしき恋」、国際農業サークル「AGLOC」、多世代交流拠点サークル「Luonto」）が自主的に活動を継続している。

2023年度 運営体制

リーダー 田中丸治哉（農学研究科教授）
ディレクター 中塚雅也（農学研究科教授、（一社）丹波篠山キャピタル代表理事）
スタッフ 安部梨杏（丹波篠山駐在研究員（博士後期課程））
三原香奈子（丹波篠山駐在研究員（教育研究補佐員））

連携スタッフ（丹波篠山キャピタル）

谷川智穂（（一社）丹波篠山キャピタル）
瀬戸大喜（（一社）丹波篠山キャピタル）
岡久花衣（（一社）丹波篠山キャピタル）
谷垣友里（（一社）丹波篠山キャピタル）
河口英樹（（一社）丹波篠山キャピタル）
岡久萌菜（（一社）丹波篠山キャピタル）

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 発達支援インスティテュート

社会の多様な問題状況に応じて、人間発達に関する実践的な研究・教育を行うとともに、地域・外部団体との連携を進め、多層・多面的なコミュニティの創成に資することを目的とする発達支援インスティテュートは、「ヒューマン・コミュニティ創成研究センター」「心理教育相談室」「サイエンスショップ」「教育連携推進室」「アクティブエイジング研究センター」の5つの組織で成り立っている。

発達支援インスティテュート設立以来、地域連携室とは、主に、「ヒューマン・コミュニティ創成センター」「サイエンスショップ」を介してパートナーシップを築いてきた。特に、今年度は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの「ESD プラットフォーム WILL 支援事業」を助成していただいた。同事業の今年度の概要は、以下のとおりである。

大学と学外組織のつながりの場づくりをめざす ESD プラットフォーム WILL 支援事業

ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、SDGs（持続可能な開発目標）を教育的アプローチで実質化することが期待されている ESD（Education for Sustainable Development）の地域推進拠点（RCE 兵庫 - 神戸）の事務局として、国連大学から認証されている。ESD の根幹は、人・コミュニティ・システムづくりを一体化させつつ、徐々に持続不可能な社会を変えていこうとするところにある。同センターは、こうした ESD の生起条件・環境づくりを実践的・研究的に推進する拠点であり、神戸大学 ESD コースの運営、あいち等の附属施設での教育的事業、フェアトレード学習事業、中山間地域における自然地域共生事業、哲学カフェ開発、ヘルスプロモーション事業、自然災害支援組織化事業など、多様な ESD 関連事業を実施している。今年度も、昨年度同様、新型コロナウイルスの影響は少なからず残り、対面・交流型の事業はなおも控えめであったが、各種のオンライン事業を交え、多層多面的な事業を実施した。

「ESD プラットフォーム WILL 支援事業」は、そのうちの一つで、「ESD ボランティア育成プログラム推進事業」（2006 年～）および「ESD プラットフォーム創成推進プロジェクト」（2018 年～）の後継事業である。ユース（高校生・大学生・社会人）を中心とする多様なボランティアが連携・協働して ESD を創発することを目的として



2019 年度に創設された任意団体「ESD プラットフォーム WILL」を、有形無形に支援することを通して、大学と学外組織のつながりづくりと ESD 実践の有為な関係を明らかにしようとする事業である。

本団体は、学内外・老若男女・障害の有無・国籍を問わず、多様な個性をもった WILL メンバーと、大学教員や NPO のリーダーによって構成される評議員会、複数の同組織内プロジェクトの実行メンバーによる運営委員会およびユース主体の事務局が、互いに垂直的または水平的な関係を切り結びながら、一般の学生・ユース・社会人に「ESD の立ち現れる出会いを経験し得る仕組み・装置」を提供するとともに、その維持・発展の環境を探究することをミッションとする。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、アクションリサーチとして、この団体の企画創発・運営に協力している。

具体的には、参加者・関係者が、ワークキャンプ、ボランティアワーク、ワークショップ、ツーリズムの開発・運営・参加を通して、インクルーシブなコミュニティ（inclusive community）を創成する経験を積み、ESD において最も重視される「出会いと交流」の方法を開発する主体となることが中心である。

現在（2024 年 3 月時）、メンバー登録者数は 88 名、ユーザー登録者数は 200 名を超えている。学内外

の大小の組織・ネットワークとも有機的なつながりを持ち、神戸大学 ESD コースのサービス・ラーニング（社会サービスと正規カリキュラムの連携による学習活動）の一部も担っている。いわば、WILL は、フォーマル教育とノンフォーマル・インフォーマル教育の橋渡しの役割を担うものとして成長しつつある。

ルーム制の開始

プラットフォームとしての風通しをより良くすることを目的として、2023年度から「ルーム制」が始まった。多様な事業を5つのカテゴリーに分け、それらを「ルーム」と呼ぶ。ルームそれぞれにメンバー・参加者がいったん所属し、活動を進めていく中で、ルームを行き来することを促す仕組みである。



「ワークキャンプルーム」「災害復興支援ルーム」「農村レジリエンスルーム」「居場所づくりルーム」「グローバルツアールーム」の5つが設置された。それぞれの主な活動は、以下の表のとおりである。

事業名		実施日	場所
WILL 総会		2023年5月21日	神戸大学鶴甲第二キャンパス
アースデイ神戸出店		5月4日・5日	みなとのもり公園
WILL カフェ		12月16日	神大滝川記念館
春創成合宿		2024年2月16日～18日	しあわせの村
ワークキャンプルーム	GW 邑久プロ	4月28日～4月30日	岡山県瀬戸内市邑久光明園
	スタッフトレーニングP	7月16日～17日	岡山県瀬戸内市邑久光明園
	夏のワークキャンプ	8月18日～24日	岡山県瀬戸内市邑久光明園
	夏 WC リフレクション	9月2日	神大 D ルーム
	邑久光明園すだち収穫	10月1日	岡山県瀬戸内市邑久光明園
	冬の ESD プログラム	2024年1月13日～14日	加西市オークタウン加西
災害復興支援ルーム	6月赤崎復興市支援	6月22日～26日	岩手県大船渡市赤崎町
	9月赤崎復興市支援	9月21日～27日	岩手県大船渡市赤崎町
	11月大船渡地域活動支援	11月9日～14日	岩手県大船渡市赤崎町
	3月慰霊式典支援	2024年3月6日～13日	岩手県大船渡市赤崎町
農村レジリエンスルーム	田植えイベントボランティア	5月4,5,9日	兵庫県丹波篠山市
	草刈りフェスボランティア	7月15日	兵庫県丹波篠山市
	稲刈りボランティア	9月3日	兵庫県丹波篠山市
	「Be Satoyama」サポートボランティア	毎月	兵庫県丹波篠山市
	ESD コース農業体験プログラムサポートボランティア	1月21日	兵庫県丹波篠山市
居場所づくりルーム	毎月8日定例ミーティング	毎月8日	Zoom
	あーち合宿	7月1日～2日	しあわせの村
グローバルツアールーム	GW 祝島訪問プログラム	5月2日～7日	山口県上関町祝島
	インド・スタディツアー	9月1日～11日	インド・ムンバイなど

WILLでは、これらのルームに腑分けされる活動とともに、それらを連動させ総合化する場として様々なメイン活動が実施される。今年度は、WILLカフェ、年間を総括し次年度の計画を立てるための春創成合宿に力がそそがれた。また、毎月実施される「定例ミーティング」では、各ルームの活動や課題が共有され、全体性を保つ工夫も設けられている。

WILL カフェ事業

複数のルームが互いに交流する場として、従来行われてきた「WILLのつどい」を発展させた「WILLカフェ」が実施された。事業開始初年度は、ESDコースのアクションリサーチ発表会との合同で、12月16日（土）に、神戸大学滝川記念館にて行われた。

国際人間科学部と経済学部のそれぞれのESD演習からの発表、WILLの各ルームの活動が発表されたのち、知的障害者を含む総60名弱が、互いの当事者性を交差させるべく、大交流会が持たれた。準備は、ESDコースのコーディネーターとWILL運営委員・事務局メンバー・ルーム世話人によってなされ、これまで培われたワークショップの技法が駆使された。



ESD冬のボランティアプログラム／ESDプラットフォーム WILL 春創成合宿

神戸大学ESDコースの履修生を参加者として迎えて、2024年1月13、14日、オークタウン加西（加西市）にて、「ESD・冬のボランティアプログラム」を実施した。ボランティアの意味を参加者が相互の交流の中で問い直すとともに、参加者同士の新たなつながりが生まれることがねらいである。参加者はのべ50名。アイスブレイク、グループビルディング、相互交流ワークショップを経験しつつ、フィールドでのかわり方を「現地まち歩きプログラム」を通して再考するという内容であった。

また、2024年2月16～18日には、神戸市しあわせの村において、「春創成合宿」が実施された。参加者はのべ60名で、一年の総括と次年度の計画を策定する合宿型の会議を主とするものであった。そこでの主な議論は、ESDとSDGsの関係は？ 当事者性の交差が生まれる実践装置とは？ 正統的周辺参加を実

質化する組織体制とは？ 体験型活動と他の学びのユニットとの連動を促す仕組みは？ などである。テーマは固いが、参加者それぞれの経験を通して語り合う対話の場が作られた。

さらに、ルームの各活動の実践仮説も検討された。何をどうすることで、どのような効果・影響が期待できるのかを、ルームの壁を越えて参加者が協議し合った。多元的な視野でものを考える場としても春創成合宿の意味は大きい。



ハンセン病療養所 邑久光明園での「ワークキャンプ」

邑久光明園とは、2007年夏の第1回ワークキャンプ以来、海岸清掃、園内草刈り、園内清掃、自治会・サークルとの交流、つどいの広場の開墾事業、こみよたん活動（マスコットによる啓発活動）、夏祭り・文化祭支援などを通して、深いつながり・信頼を築いてきた。現在、神戸大学大学院人間発達環境学研究科と国立ハンセン病療養所 邑久光明園は、2016年来、教育・研究に関する連携協定を締結している。

ここ数年は、コロナ禍の影響があり、満足なワークキャンプを実施することができなかったが、今年度は、感染への医療的な対処を十分に意識した上で、当初の予定通り、8月18日～24日、7泊8日のワークキャンプを実施することができた。参加者は、40名以上となり、個の力を集合化する経験を積むことができたとの感想が多かった。



農村体験・サポート事業

丹波篠山市に拠点をおく NPO 法人ミチノムコウとの共催で、農村や農の現実からサステナビリティを考える農村レジリエンスプロジェクトが開始された。産業構造の変化、人口動態の都市への偏りのなかで、農村が生き残る方途を探究しつつ、そこで育まれてきたライフスタイルを、持続可能な開発の観点で検討・再評価することをねらいとする。WILL メンバーをはじめ、ESD コースの学生たちが、5月GWの田植え、6、7月の草刈り、9月の稲刈り、12月の冬作業などに体験的参加するだけでなく、ミチノムコウのメンバーと協働して企画を立案する。7月には、さらに他の団体からの協力も得て、草刈りをイベント化する「草取りフェス」を実施した。



機関紙『季刊 WILL』の発行 夏号・冬号

WILLメンバーの編集によって、機関紙『季刊 WILL』を、年2回発行した。登録メンバーが、互いに情報を共有する目的であるが、WILLのHPにも掲載されている。WILLでは、HP、FB、Twitter、InstagramなどのSNSを活用したネットワーク促進事業、RCEユース会議事務局活動など、複数団体のメンバーの協力の下、さまざまな連携促進の基盤となる事業が展開されている。詳細は、以下のURLを参照のこと。

ESDプラットフォーム WILL ホームページ:[ESD WILL | ESD プラットフォーム WILL | 日本 \(esd-will.org\)](http://ESD WILL | ESD プラットフォーム WILL | 日本 (esd-will.org))

2024年度は、プラットフォーム機能をより高めるために、WILLのNPO法人化に向けての支援も視野に入れることとなっている。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの各部門（障害共生支援部門・国際開発支援部門など）、発達支援インスティテュートの他のセクション、および、学内外の学生団体や市民団体等との連携を、一層強化することによって、本事業はより社会的影響力の大きいものになっていくであろう。さらに、「令和6年能登半島地震」の被災地・被災者支援活動も入ってくることになろう。激動の2024年度を迎えることになる。

（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター長 松岡広路）

国際文化学研究科地域連携センター 令和5年度活動報告

国際文化学研究科の研究推進センター（略称：Promis）内に「地域連携センター」発足したのは2022年4月であり、あっという間に2年の月日経った。本センターが目指すのは「グローバル化が急速に進行しつつある地域社会の文化変容や摩擦を多角的に研究すること」であり、各地域の社会問題の解決に貢献することを目的として設立された。現在はオンラインで会議や議論が容易にできるため、神戸および兵庫県の諸問題が現代においては国境や文化圏を越えた交流のなかから生まれることが増えてきた。多様なルーツを持つ日田やグループと共生するときの課題に本センターはどのようにこたえられるだろうか。コロナ後のインバウンドの再増加により、過去とは異なる新しいホスピタリティが模索されているが、それは地域のニーズと大学の専門知を融合することによって解決の糸口が見えるはずである。大学院国際文化学研究科には80名近い専門教員が在籍しており、世界中の国々の政治・社会・文化・芸術に精通した教員たちが日々の蓄積してきた専門知が、各地域においてグローバル化を発端として生まれつつある社会問題の解決に取り組もうと熱意をもって活動を進めているところである。最終的には神戸や兵庫の地元民にとっても住みやすく、同時に多様なバックグラウンドをもった世界中の人々が高いに尊重し理解しながら穏やかに暮らして行ける日常を拡大し、レジリエントな都市としての神戸や兵庫を生み出してゆくことを目指している。

本年度の活動を振り返ると以下7点に集約できる。

- 1) 姫路市「大学発まちづくり研究助成」事業による取組み
- 2) 「ツーリズム EXPO ジャパン 2023」に出展
- 3) 「大学都市神戸産官学プラットフォーム」を活用
- 4) 「ベスト・ツーリズム・ビレッジ フォーラム in 美山」に参加
- 5) 「次世代観光リーダー育成に向けたワークショップ」を開催
- 6) 兵庫県朝来市生野の観光PR動画作成に、英・独・仏語の字幕を付け、幅広い視聴者に生野の歴史と観光の魅力について情報発信を行なった
- 7) 奈良県宇陀市で保存されている映画館・喜楽館（喜楽座）の調査に協力

神戸大学大学院 国際文化学研究科 地域連携推進センター 板倉史明

1) 姫路市大学発まちづくり研究助成事業による取組み



2022年度、姫路市と国際文化学研究科は地域連携協定を締結し、姫路市をフィールドとして国際交流、産業振興、観光について研究を推進していく態勢を整えた。そこで当センターでは2023年度、センター内に国際誘客研究グループ（井上弘貴、辛島理人、芹澤円）を設置。当グループの研究課題「留学生・短期交流学生のモニターツアーに基づく国際誘客の基礎調査」が、令和5年度姫路市大学発まちづくり研究助成事業に採択された。姫路市での2回のモニターツアーをつうじて、アンケート、インタビュー、行動観察をつうじて、

国際誘客に関する基礎的データの取得を試み、国内外プロモーションの充実と外国人旅行者の誘客について実践的な知見を得ることを目的とした。第1回は、米国テネシー州のテネシー大学から訪れた短期交流学生と、このテネシー大学の学生と交流する国際人間科学部の日本側学部生を引率し、2023年5月27日（土曜日）に実施した。午前中に姫路城を訪れ、グループに分かれての昼食後、午後は書写山園教寺を散策した。第2回は、同年10月14日（土曜日）に実施した。国際人間科学部に協定校からやってきた交換留学生と、交換留学生たちをサポートする国際共修チューターを対象とした。留学生44名、学生チューター22名の計66名が参加し、第1回と同じ旅程で実施した。

2回のモニターツアーを共通して、短期交流学生や留学生はツアー中に不便な経験もした場合、それはアンケートには必ずしも否定的に書かれず、肯定的なメッセージを介して回答する傾向があるということが明らかになった。そのため肯定的なフィードバックの背後にある潜在的なネガティブな経験については、日本側の同行者にたいする並行的な調査をつうじて補う必要があることがわかった。姫路市をフィールドとして来訪経験の質を探るこれらの調査結果は、2024年3月28日に姫路市役所北別館でおこなわれた成果発表会で、市関係者の前で発表された。



国際文化学研究科が北海道ニセコ町と地域連携協定を締結

2024年3月29日、国際文化学研究科の藤濤文子研究科長らが北海道ニセコ町を訪れ、同町の片山健也町長とのあいだで地域連携協定（部局協定）を締結した。同研究科は同時に、一般社団法人サステナビリティ・コーディネーター協会（JaSCA）の青木真郎代表理事とのあいだで産学連携協定を締結。ニセコ町と同協会とのあいだでも協定が締結され、3者間での同時協定調印となった。国際認証に基づいた持続可能な観光地域づくりに取り組んできたニセコ町ならびにJaSCAとのこのたびの連携開始によって、これまで姫路市や京都府南丹市美山町をフィールドとして、観光まちづくりやラーニングツーリズムの調査研究を進めてきた当センターは、GSTCやGreen Destinationsといった国際認証に関する研究を今後の取組みのなかに新たに含める環境を整えるに至った。この協定に基づき2024年度、国際人間科学部ではニセコ高校の生徒と引率教諭を受け入れる予定である。

2) 「ツーリズム EXPO ジャパン 2023」に出展

2023年10月26日～29日にインテックス大阪で開催されたツーリズム EXPO ジャパン 2023に、昨年度に引き続き出展しました。今年度は、本学大学院修了生による世界の観光地にかんするレクチャーや、国際人間科学部のグローバル・スタディーズ・プログラム (GSP) 参加学生による活動報告会をブースにおいて実施したほか、会場内のステージでもトークイベントを開催しました。



本学の卒業生を登壇者として、SDGs 推進室の土井祥子特命准教授の司会のもと、「地域・事業者・大学の3者で考える関西のインバウンドのこれからと持続可能な観光」と題したトークイベントには、多くのみなさまにご参加いただきました。また、昨年度同様、今年度もブースには多くの卒業生にお立ち寄りいただき、さまざまな学部・研究科を卒業・修了の後、ひろく観光旅行業界で活躍されている方々と、意見交換や歓談を行なうことができました。

3) 「大学都市神戸産官学プラットフォーム」を活用

神戸大学など神戸市内の大学と企業、神戸市による連携組織「一般社団法人大学都市神戸産官学プラットフォーム」が三宮に開設した産官学連携交流拠点「KOBE Co CREATION CENTER」を用いてリカレント教育を行いました。

国際文化科学研究科の「ローカル・グローバルと公・民をつなぐ観光リカレント教育」プログラムは、オンライン講義、「KOBE Co CREATION CENTER」でのスクーリング、京都府南丹市美山町での合宿研修から構成され、神戸大学出身者や兵庫・関西を拠点に活躍する実務家を集めて、2024年1月から3か月以上にわたって開催されました。

「持続可能な観光」といった世界的な動向をふまえ、パブリック（公）とプライベート（民）、ローカル（地域）とグローバル（世界）の双方をつなぐ人材を育成するため、民間企業、自治体・公共団体、DMO（観光地域づくり法人）などで観光地全体の経営や地域づくりを担おうとする人々に対して、今後も学修の機会を提供する予定です。



4) 「ベスト・ツーリズム・ビレッジ フォーラム in 美山」に参加

2024年2月15日、京都丹波高原国定公園ビジターセンターにて「ベスト・ツーリズム・ビレッジ フォーラム in 美山」が開催され、Promis 地域連携センターが南丹市美山観光まちづくり協会とともに取り組んできた課題解決型研修プログラム造成について、井上弘貴・国際文化科学研究科教授が登壇者のひとりとして報告をおこないました。



同フォーラムでは、美山町とニセコ町にくわえて、2023年にあらたに国連世界観光機関からベスト・ツーリズム・ビレッジに認定された地域から、北海道美瑛町、宮城県奥松島地区、岐阜県白川村の関係者が参加して取組みを紹介したほか、美山小学校と北海道ニセコ高等学校も観光教育の取組みを報告しました。フォーラム終了後には、関係者による実務者会合もおこなわれ、神戸大学関係者もオブザーバーとして参加しました。

第5回「次世代観光リーダー育成に向けたワークショップ」を開催

2024年3月23～24日に美山町自然文化村・河鹿荘において、次世代の観光リーダーを育成するため、UN Tourism 駐日事務所、(独) 国際協力機構 (JICA)、南丹市美山観光まちづくり協会とともに、第5回「次世代観光リーダー育成に向けたワークショップ」を主催しました。

10か国以上から約40名の大学生・大学院生、実務家が参加した同ワークショップでは、台湾とタイから基調講演者を招き、2日間で現地視察及び座学を行い、グループに分かれて英語で地域における持続可能な観光について意見を共有しプレゼンテーションを実施しました。

ホスト校の幹事として、企画・運営の統括を辛島理人・国際文化科学研究科准教授が担い、神戸大学の学生や卒業生も積極的に運営・議論に参加しました。Promis 地域連携センターとして、関西のみならず、北海道や東北、台湾やタイのリーダーと交流し、今後も学びあいの機会を設けることを確認しました。



教会がおかれた歴史的な位置づけが明確になりつつある。

②神戸ユニオン教会に関する企画展の実施：本年度における最大の成果である。4月以降の2か月あまりの準備期間を経て、6月27日から9月27日まで神戸大学社会科学系図書館2階展示ホールにて企画展「港の見える教会から—多文化都市神戸とユニオン教会—」を開催した。展示内容は、これまでの調査の成果を踏まえた解説と、教会から借りた物品などで構成された。神戸新聞（7月1日、朝刊 ウェブ版あり）・朝日新聞（7月12日、朝刊 ウェブ版あり）による取材と記事化もあり、多くの来場者を得た。

③オーストラリア・キャンベラでの史資料調査の実施：オーストラリア国立図書館に、日本の欧米系コミュニティに関する史資料を含む史料群（ハラルド・S・ウィリアムズ・コレクション）が所蔵されており、そのうち神戸やキリスト教宣教に関する史資料を収集するために調査滞在を行った。

以上の報告の通り、令和5年度においては事業が想定以上に進捗したと言える。今後の課題としては、上記①に関連して、神戸ユニオン教会に所蔵されている残りの史資料の整理と調査が挙げられる。特にドイツ語史料の10倍程度の分量があるとされる英語史料群はまだまだ多くが手つかずであり、研究分担者や大学院生などの手を借りて整理・調査を進めていきたい。



オーストラリア国立図書館での史料調査



神戸ユニオン教会での史料調査



展示会チラシ

海事科学研究科地域連携センター 令和5年度活動報告

[概要]

大学院海事科学研究科では2022年（令和4年）4月に地域連携センターを開設した。その前年2021年4月に学部組織が海事科学部から海洋政策科学部に改組され、地域に根ざした学部・研究科として、地域連携においても益々活発化させることが期待されている。さらに2022年3月には、これまで35年間共に歩んできた練習船深江丸に代わる新船として多機能練習船海神丸をキャンパスに迎えた。この大きな節目と重なり、新学部をこれから大きく発展させていくためにも本センターが研究科の拠点となり地域連携を推進していく。2023年度は、これまで継続してきた東灘区、神戸市との連携による地域の児童生徒への体験型スクールと合わせて、海事博物館での小学生対象イベントの開催、東灘図書館での講演について、センターとして活動に関わった。それらの活動の概要を以下に報告する。

[活動内容]

1. こどもいろいろ体験スクール／防災意識向上イベント

本イベントは8月1日（火）の10時～15時の時間帯で行った。小学3～中学3年生22名、さらに保護者を合わせて約40名の参加があった。こどもいろいろ体験スクールは、神戸市東灘区と区内の6大学（甲南女子大学、神戸国際大学、頌栄短期大学、甲南大学、神戸薬科大学、神戸大学海洋政策科学部）が連携し、神戸市東灘区在住の小・中学生を対象に、子供たちの夏休み期間に各大学の特性を活かした講座を実施する事業である。本部署は平成23年度から本事業に参加しており、令和5年度は11回目の参加であった。地域にある大学として



本学に親しみをもってもらい、大学での体験学習を通じて、五感で海の面白さを実感してもらうことを目的としている。特に本部署の特徴を活かし、練習船白鷗の乗船体験、練習船海神丸内の見学、海事博物館見学を通じて、海事に対する興味や好奇心を喚起することを目指して行った。今年度は、昨年度に引き続き神戸市水上消防署の協力のもと、防災意識向上のための消防艇の見学、講演会を併催した。



午前中に神戸市水上消防署に依頼し、消防艇くすのきの見学と岸壁からの放水体験、消防資機材の見学を行った。

普通は入ることができない消防艇の中に入り、その機能などについて説明を受けた。放水体験はホースを持つだけでも小学生には重く、また放水時は水の勢いで押されそうになるのを消防隊員に支えられながらも全員が体験した。また、ボンベや上着、ヘルメットなどの消防資機材を見学した。その後、屋内で水上消防署の活動の説明や、災害時の活動の様子を講演頂いた。生活の安全を支えてくれている消防の仕事について、参加者は熱心に聞き入っていた。阪神淡路大震災のことを話題に挙げることで、地域住民の防災意識の向上を図った。遠くない未来にくる可能性が高いとされる地震・津波などの自然災害に備えるためには、常に忘れないことが重要と思われる。今回のような注意喚起につながるイベントの重要性を改めて感じた。

午後には、練習船白鷗への乗船体験、停船中の海神丸内の見学、海事博物館の見学を実施した。1時間程度の時間、白鷗に乗船し、普段は見ることのない海からの神戸の街を眺める機会となった。定員二十数名の小型の船に、小学生を12名ほど乗船させることから危険を伴うプログラムである。イベント提供側としては、安全への配慮が最大の課題であり、事前の注意、乗船中の気配りに苦慮するところである。船内見学を行った海神丸は、災害発生時に被災地に対して水や電力、支援物資を供給・輸送することも機能として謳ってお

り、そのようなことを知ってもらふ機会にできたことは大きな成果の一つであった。海事博物館において船の模型や神戸商船大学の時代から活躍してきた船の歴史や海技士養成にまつわる知識に触れてもらうことができた。将来船舶の運航に関わることを志すこどもが現れてくれることを期待する。

2. 神戸大学海事博物館夏休みワークショップ「船のおもてなし～花毛布とタオルアニマルをつくろう～」の開催（海事博物館主催イベント）

海事博物館主催の夏休みワークショップとして、2023年8月4日に「船のおもてなし～花毛布とタオルアニマルをつくろう～」を開催した。講師に明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部の上杉教授、花毛布ボランティアの中村鎮生氏、吉田孝志氏をお招きし、小学生とその保護者11組が花毛布とタオルアニマルの作製に挑戦した。会の司会は海事博物館専門員で神戸大学人文学研究科の菊池真准教授が務めた。

始めに上杉先生より、豪華旅客船の客室の写真が提示され、ベッドに飾られた毛布の折り込みが「花毛布」であると紹介された。そして、この花毛布は「船のおもてなし」として、100年以上前から引き継がれていることが説明された。同様にホテルの客室ベッドに飾られた可愛い犬や豪華な鶴の写真が示され、これらもお客様へのおもてなしとして、ホテルサービスで利用されているタオルアニマルとして、歴史のあることが紹介された。それぞれ、タオルと毛布の違いはあっても、ともに相手（お客様）へのおもてなしの心（深い思いやり）が具現化したものであることが説明された。

次に、花毛布の一例として「大輪」「日の出（富士山）」の折り方が紹介され、講師の中村氏、吉田氏の解説のもと、小学生の参加者も保護者とともに折り方に挑戦した。両手で毛布の端を押さえつつ、中央部分を両肘で挟み込むように寄せるなど、体力とテクニックを要する難しさもあったが、保護者に加えて学生スタッフも手伝い、無事に完成まで漕ぎつけた。1枚の毛布が大きな花の形になったり、折り込みが立ち上がって富士山が現れたりすると、わぁーっと喜びの声が上がった。

続いて、上杉先生よりタオルアニマルの「ペンギン」「のんびりワンちゃん」「スワンハート」の実演が行われた。参加者には、折り方の資料が配られ、順次、これらのタオルアニマルに挑戦した。花毛布よりも簡単で、可愛いことも手伝って、参加者は積極的に取り組んでいた。巻き込みは密にすると仕上がり良くなるなど、可愛さや見映えが良くなるコツも教えられた。最後に、2羽の白鳥が向かい合ってハートを形取ると、「おぉーっ」と歓声上がり、カメラのシャッターが鳴り響いた。

おわりに、上杉先生から、タオルアニマルの「ペンギン」は参加記念に持ち帰り、ご家族に日頃の感謝やありがたいの気持ちとして「ペンギン」を送り、「おもてなしの文化」を楽しんで欲しいとお話いただき閉会した。



なお本イベントは、子どもとおでかけ情報サイト「いこーよ」を運営されているアクトインディ社と連携し、そのサイトに参加者募集の案内を掲載して頂いた。そのお陰もあり盛況であったことを述べておく。

3. Ocean's 17 event (神戸市海洋人材育成プログラム) の実施

神戸市と川崎重工業株式会社、神戸大学大学院海事科学研究科の連携イベントとして2023年8月28日(月)に神戸大学深江キャンパス4号館にて、体験型海洋イベント「Ocean's 17 event」を開催した。神戸市では海洋産業の振興や海洋人材の育成を目的として、次代を担う生徒・学生を対象に、神戸の海を舞台にした職業に触れることが出来る取組みを進めており、Ocean's 17 eventはその一環として高校生を対象に始められたイベントである。2021年7月に第一回が本学にて開催され、今回が5回目であった。そのうち、第一回、第三回、そして今回の第五回に本学が参画し、海事科学研究科地域連携センターが本学の担当としてイベントの準備・運営を行った。

今回は、～みんなで学び、体験する 水素エネルギーのある未来～を副題として、「水素」をテーマにしたプログラムを実施した。28名の高校生・高専生(19校)が参加し、午後13時～18時前にかけて行われた。

神戸市企画調整局中村氏の開会あいさつの後、川崎重工業(株)の若手社員達によるエネルギー問題に関する説明があり、エネルギー自給率の低い日本は海からの輸入に頼らざるを得ないこと、さらに近年取りざたされている環境問題の解決には、環境負荷の小さい水素エネルギーの利用が今後ますます重要性を増していくことが説明された。続いて液体水素の運搬船に欠かせない保冷技術が紹介され、体験課題としてものづくりワークショップへと移った。

参加者が5,6名の班に分かれて、断熱性(保冷性)の高い保存容器の作製を目指して取り組んだ。布タオル、アルミホイルなどの保冷材を選び、プラスチックボトルにそれらを重ねて巻くことで、ボトルに入れた氷水の温度が変化しにくいものを作るという課題であった。各班で相談しながら保冷剤を巻く順番など試行錯誤を繰り返した。作製された容器は、扇風機からの風を当てたり、湯せんによって加熱したり、さらにヒーターによる加熱を順次行い、1時間程度、温度の変化を測定した。この日に初めて出会った参加者同士が意見を出し合い、1時間程度のうちに一定の成果物を作り上げた様子は、参加した高校生のバイタリティーを強く感じた。

続いて本学武田実教授による「海洋と水素エネルギー」と題した講演が行われた。超電導の技術により船を動かす電磁推進船の話題や、液体水素をエネルギー源として利用するための、最近の研究成果である超電導MgB₂液面センサーの開発に関するデータなどが紹介された。講演後は、本学の施設である極低温実験棟、水素実験棟、海事博物館を順次見学した。参加者は普段見ることのできない大学施設に目を輝かせていた。刺激になったと思われる。



再び教室に戻り、最後に水素エネルギーの利用に関わる社会的課題について話し合われた。技術的な課題以外に、貯蔵や運搬にかかるコスト、水素ステーションの整備、水素社会に向けて必要な法整備など広い視点で捉える重要性に各班で議論し、最後に各班から議論の内容について発表がありイベントは終了となった。参加者のアンケートから本イベントが楽しく有意義であったという意見が複数あった。また、本学部を希望進路と考えている参加者も複数おり、その人たちにとって本学部への興味をさらに強くさせるものであったことがうかがわれた。



4. 東灘図書館における講演会において（東灘図書館主催イベント）

11月26日（日）13：30より東灘図書館において、「神戸大学深江キャンパスの沿革 - 教育施設などのトピックスを中心に -」と題し、本学名誉教授で第10代の深江丸船長であられる矢野吉治先生の講演会が開催された。24名の参加があった。本講演会は、東灘図書館が区内の大学と連携し、利用者への生涯学習の支援を行うとともに、大学と地域住民が触れ合う場として図書館を活用することを目的として、2022年度から始まった企画で、今年度初めて海事科学研究科に講師派遣の依頼があった。

商船教育が起こるまでの背景から、関西における商船学校の設立の歴史、創設者（川崎家三代）について、私立川崎商船学校の設立から神戸高等商船学校の設立、神戸商船大学の設置や神戸大学となった現在までの沿革、深江キャンパスの敷地の歴史、実習船の歴史などについて説明があった。航海士について志を持っていた参加者、東灘区の歴史について興味・知識を持っている参加者が多くいた。講演後には船舶の運航に関することや神戸大学の現状のことなど、非常に多くの質問が出た。参加者にとって大変有意義な講演会となったと思われる。



地域共創による兵庫県の中小企業支援策の推進

経済経営研究所地域共創研究推進センター長 家森信善

背景・目的

経済経営研究所は、神戸大学の新ビジョンを具現化するために、2023年4月に、地方自治体、地域企業、地域金融機関、地域支援団体などのそれぞれの特徴と幅広い知見を生かして地域社会の課題解決を進めていく上で、経済経営研究所がハブ的な機能を果たせるように、地域共創研究推進センターを設置した。

本年度の取組としては、地域共創による兵庫県の中小企業支援を推進していくために、地方自治体（兵庫県）、国（近畿財務局、近畿経済産業局、近畿地方環境事務所など）、地域金融機関（尼崎信用金庫 みなと銀行、F&M など）、公的金融支援組織（兵庫県信用保証協会、日本政策金融公庫など）などに参加をしてもらいながら研究会を継続的に実施した。それを通じて、関係者が交流し、施策の横展開についての共通理解を深めた。さらに、神戸大学の地域貢献として、その研究成果を社会に発信するために、講演活動を行うとともに、一般向けシンポジウムを開催し、さらに、当該シンポジウムおよび関連する研究成果を印刷物の形で発表することで、関係者の連携の強化に貢献することを目指した。

活動の概要

(1) シンポジウム「地域の持続的発展と金融機関の役割—ESG 地域金融の取り組み」

(2023年5月24日 神戸大学出光記念講堂)

間接金融が大きな役割を果たしている日本では、地域金融機関には、地域の持続可能性の向上に資する ESG 地域金融の実践が期待されている。当研究所と尼崎信用金庫は、2022年度より「ESG 要素を考慮した事業性評価の深化を通じた地域における事業者支援体制構築の推進」に関する共同研究を実施しており、尼崎信用金庫は2022、23年度に環境省 ESG 地域金融促進事業に採択されている。

そこで、本シンポジウムは、それらの取り組みの現段階での成果を報告し、取り組みを深化させることを目指し、講演とパネルディスカッションを行った。

最初に作田誠司理事長（尼崎信用金庫）による挨拶があった。第1部では、竹ヶ原啓介氏（株式会社日本政策投資銀行設備投資研究所 エグゼクティブフェロー兼副所長兼 金融経済研究センター長）が「ESG 地域金融への期待」について、2番目に家森信善教授（神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長）が「ESG 地域金融と事業者支援」について、3番目に田中直也氏（尼崎信用金庫価値創造事業部 部長）が「ESG 要素を考慮した事業性評価の取組み」について講演を行った。

神戸大学経済経営研究所
神戸大学社会システムイノベーションセンター
神戸大学経済経営研究所地域共創研究推進センター開設記念 公開シンポジウム

神戸大学・尼崎信用金庫 共同研究成果発表
「地域の持続的発展と金融機関の役割— ESG地域金融の取り組み」

2023 5/24 水
13:30 - 16:45

会場：神戸大学出光三記念六甲台講堂
ハイブリッド開催
定員：先着100名（対面）
先着200名（オンライン）
締切：5月22日（月）

Program

13:30 - 13:40 主催者挨拶 作田 誠司 / 尼崎信用金庫 理事長
13:45 - 14:55 基調講演
①「ESG地域金融への期待」
竹ヶ原 啓介 / 株式会社日本政策投資銀行設備投資研究所 エグゼクティブフェロー兼副所長兼 金融経済研究センター長
②「ESG地域金融と事業者支援」
家森 信善 / 神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長
③「ESG要素を踏まえた事業性評価の取組み 尼崎信用金庫の挑戦とソールの開発と活用」
田中 直也 / 尼崎信用金庫価値創造事業部 部長

15:15 - 16:35 パネルディスカッション 司会 家森 信善
「地域の持続的発展のために地域金融は何かができるのか」
パネリスト 竹ヶ原 啓介 / 株式会社日本政策投資銀行設備投資研究所 (隔不問) 副所長兼 金融経済研究センター長
作田 誠司 / 尼崎信用金庫 理事長
宮口 美穂 / 阪神北摂民局長 (前兵庫県産業労働部 次長)・神戸大学 客員教授
古川 直行 / 兵庫県信用保証協会 理事長
今井 亮介 / 環境省大臣官房環境経済環境金融推進室長

16:35 - 16:45 閉会の挨拶 北野 重人 / 神戸大学経済経営研究所長

お申込み方法
参加をご希望の方は、以下に記載の【WEB申込みフォーム】によりお申し込みください。
【WEB申込みフォーム】は神戸大学経済経営研究所のホームページ上にあるお知らせからもリンクしています。
神戸大学経済経営研究所 WEB申込みフォーム <https://www.ocans.jp/kobe-uf/df=FPggOD4V>

お申込み窓口
神戸大学経済経営研究所「公開シンポジウム」担当 E-mail sympo@rieb.kobe-u.ac.jp
〒657-8501 兵庫県神戸市東灘区六甲台町2-1 お電話でのお申し込み、お問い合わせはご遠慮ください。

第2部のパネルディスカッションでは、家森信善教授の司会により、竹ヶ原啓介氏、作田誠司氏に加えて、宮口美範氏（阪神北県民局長（前兵庫県産業労働部次長）・神戸大学 客員教授）、古川直行氏（兵庫県信用保証協会理事長）、今井亮介氏（環境省大臣官房環境経済課環境金融推進室長）がパネリストとして参加し、「地域の持続的発展のために地域金融は何ができるのか」をテーマに、ESGのうち、E（環境）の論点について、主に兵庫県の現状に焦点をあてながら、中小企業に対する最近の支援の状況を踏まえて、中小企業のSDGS 推進に向けた今後の展開や課題を議論した。

地域の持続的な成長を実現するためには、地域の中小企業の ESG 対応が不可欠であるが、それに対処するための人材、ノウハウや資金が不足している企業が多く、地域金融機関や、信用保証協会、自治体や国などが連携して中小企業の取組の裾野を広げていくために支援していく必要があることを確認できた。

シンポジウムはハイブリッド形式で行われ、出光佐三六甲台講堂に直接来場いただいた150名、Zoom ウェビナーで参加された235名、計385名もの企業・組織と個人の方に参加していただいた。また、本シンポジウムは、神戸新聞やサンテレビ（おとなりサン 2023年6月11日放送）でも取り上げられた。



シンポジウム後のサンテレビによる取材風景

(2) シンポジウム「経営者保証改革とこれからの企業経営の在り方」(2023年9月11日 神戸大学出光記念講堂)

今日、日本では経営者保証に依存しない融資慣行にむかう動きが加速している。金融機関においては、今まで以上に事業性評価を行うスキルが求められる。一方、中小企業者も経営者保証の制約を乗り越えて、リスクをとって成長することが求められている。

そこで、本シンポジウムでは、金融機関や企業経営者をゲスト講師に招き、講演とパネルディスカッションを行った。

第1部では、家森信善教授(神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長)が「経営者保証改革の必要性」について、石田武裕氏(株式会社船井総合研究所 価値向上支援本部 財務支援部 マネージャー)が「経営者保証と企業経営」について講演を行った。

第2部では、2つのパネルディスカッションを行った。最初は日下智晴氏(神戸大学経済経営研究所 客員教授・日下企業経営相談所 代表・商工中金 社外取締役)の司会により、横見真一氏(広島銀行 取締役常務執行役員)、二宮雅則氏(愛媛銀行 審査第二部長)がパネリストとして参加し、「地域けん引企業を創出するための金融機関のあり方」をテーマに議論を行った。地域の企業を支える側として、「経営者保証に関するガイドライン」の取組状況や、経営者株式担保といった経営者保証に依存しない融資の取り組みについて紹介された。

続いて竹内実門氏(株式会社船井総合研究所 財務支援部 マネージング・ディレクター)の司会により、佐々木由津子氏(バイオコミュニケーションズ株式会社 代表取締役)、嶋澤徹氏(株式会社嶋澤啓工務店 代表取締役)がパネリストとして参加し、「地方企業の成長とファイナンス政策」をテーマに、議論を行った。経営者保証解除までどのような軌跡をたどったのか、経営者保証の解除に踏み切ったターニングポイントや苦労した点など、それぞれの視点からの経験談が紹介された。

本シンポジウムはハイブリッド形式で行われ、出光佐三六甲台講堂に直接ご来場いただいた28名、Zoom ウェビナーで参加された64名、計92名の企業・組織と個人の方にご参加いただいた。

神戸大学経済経営研究所
神戸大学社会システムイノベーションセンター
公開シンポジウム

神戸大学経済経営研究所 地域共創研究推進センター
「経営者保証改革とこれからの企業経営の在り方」

経営者保証を制限する動きが加速しているが、その反面金融機関には今まで以上に事業性評価を行えるスキルが求められる。企業側としては、経営者保証を外れたことで事業承継が進み、今までは違った成長の選択肢をとることができる。本シンポジウムでは金融機関や企業をゲスト講師に招き、上記テーマに対し考察を行う。

2023
9.11月 参加費 無料

会場 神戸大学出光佐三記念六甲台講堂
ハイブリッド開催

定員 先着100名(対面)
先着200名(オンライン)

13:30-16:30
申込締切: 9月9日(土)

PROGRAM

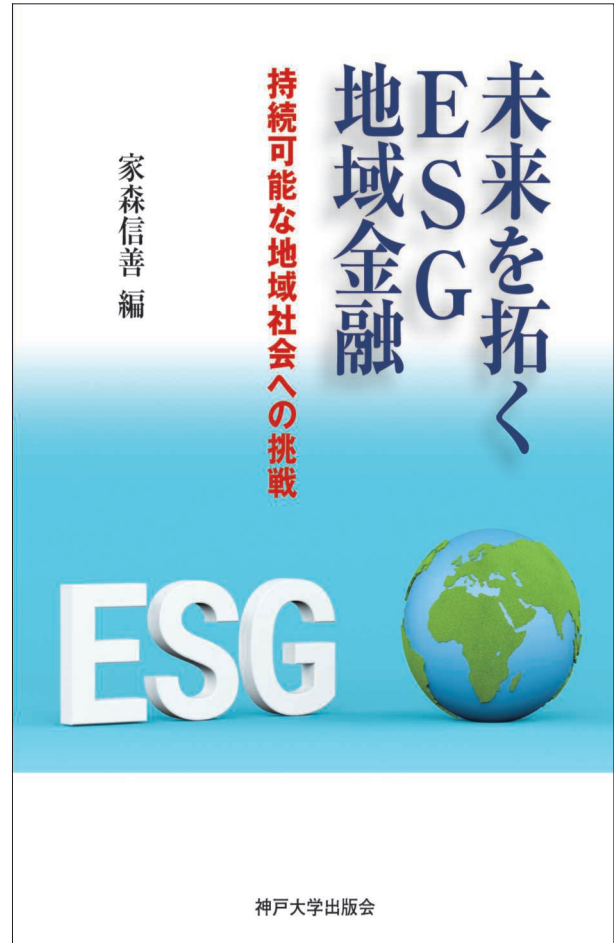
- 13:30-13:40 主催者挨拶 北野 重人 / 神戸大学経済経営研究所長
- 13:40-14:20 基調講演
 - ① 「経営者保証改革の必要性」(13:40-14:00)
家森 信善 / 神戸大学経済経営研究所 教授、同地域共創研究推進センター長
 - ② 「経営者保証と企業経営」(14:00-14:20)
石田 武裕 / 株式会社船井総合研究所 価値向上支援本部 財務支援部 マネージャー
- 14:30-15:20 パネルディスカッション①
「地域けん引企業を創出するための金融機関のあり方」(50分)
司会 日下 智晴 / 神戸大学経済経営研究所 客員教授、日下企業経営相談所 代表、商工中金 社外取締役
パネリスト 横見 真一 / 広島銀行 取締役常務執行役員
二宮 雅則 / 愛媛銀行 審査第二部長
- 15:25-16:15 パネルディスカッション②
「地方企業の成長とファイナンス政策」(50分)
司会 竹内 実門 / 株式会社船井総合研究所 財務支援部 マネージング・ディレクター
パネリスト 佐々木 由津子 / バイオコミュニケーションズ株式会社 代表取締役
嶋澤 徹 / 株式会社嶋澤啓工務店 代表取締役
- 16:15-16:30 閉会の挨拶 真見 大介 / 株式会社船井総合研究所 代表取締役社長 社長執行役員

参加申込 参加をご希望の方は、以下に記載の【WEB申込みフォーム】によりお申し込みください。
【WEB申し込みフォーム】は神戸大学経済経営研究所のホームページトップにあるお知らせからリンクしています。
神戸大学経済経営研究所 WEB申込みフォーム <https://www.ocans.jp/kobe-u/rid=beff92ca>

問合せ 神戸大学経済経営研究所《公開シンポジウム》担当 Email: sympo@rieb.kobe-u.ac.jp
〒657-8501 兵庫県神戸市灘区六甲台町2-1
お電話でのお申し込み、お問い合わせはご遠慮ください。
主催 神戸大学経済経営研究所 地域共創研究推進センター、神戸大学社会システムイノベーションセンター
後援 神戸大学経済経営研究所、地域共創研究推進センター、愛媛銀行協会、広島銀行協会、アジアン太平洋研究所 (APRI)、兵庫県信用保証協会

(3) シンポジウムや関連論文の出版

- ① 家森信善編『地域金融機関による企業支援の新しい展開－事業性評価に基づく人材マッチングの可能性を探る－』 神戸大学出版会 2023年10月。
- ② 家森信善編『未来を拓く ESG 地域金融－持続可能な地域社会への挑戦』 神戸大学出版会 2024年3月。
- ③ 家森信善・日下智晴編著『経営者保証改革と中小企業経営』 神戸大学経済経営研究所経済経営研究叢書 金融研究シリーズ12号 2024年3月。



今後の展望

2023年度はセンターとして初年度であったが、学外の様々な機関の協力を得て活動を進めることができた。2024年度においても、尼崎信用金庫様や兵庫県信用保証協会様等との共同研究を進めることとしている。

山田錦の米ぬかを用いた新規化粧品の開発

農学研究科 教授 宇野知秀

【背景と目的】

米ぬかは、玄米を削って精米するときに生じる粉である。酒造りをする際には、米ぬかは、精米後殆ど廃棄されている。そして、酵素風呂は、米ぬかを酵素で処理した時に発生する熱を用いた温浴法である。米ぬかには、玄米の表面に含まれる多様な機能性成分が含まれている。そして、酵素で処理した米ぬかには、米ぬかの成分以外に、酵素処理により生み出される多様な機能性成分を検出することができる。

また、山田錦は、日本酒を造る際に用いられる兵庫県産の酒造好適米で、米粒が大きく、吸水性が高いため、麹菌が入りやすい特徴がある。本事業の最終的な目的は、兵庫県産のコメである山田錦を用いて、米ぬかや酵素処理した米ぬかに含まれる有用な機能性成分を含む化粧品などを作り出すことである。

【活動内容】

米ぬかは、抗酸化物質などの機能性成分が多量に含まれている。更に、米ぬかは酵素処理により、アグリコンなどの機能性成分を生み出すことができる。酵素処理された米ぬかの機能性成分を含む化粧品について、製品化された例は少ない。また、山田錦は他の米と比べて吸湿性に優れており、化粧品において大切な保湿性に優れている。以上の流れより、本事業では、最終的に山田錦の米ぬかと酵素風呂に含まれる有効成分を用いて、新規の化粧品の開発を目指す。

酵素処理された米ぬかの提供、および化粧品の開発は、株式会社 muni（兵庫県三木市中自由が丘 2 丁目 91）で行った。米ぬかと酵素処理した米ぬかの成分の分析は、神戸大学農学部で行った。まず、研究を進める前に大学生と大学院生に酵素風呂を体験してもらった。

【酵素風呂体験】

大学生と大学院生には、令和 5 年 9 月 6 日に株式会社 muni を訪問し、山田錦の米ぬかを用いた酵素風呂の体験に取り組んでもらった。まず、株式会社 muni 代表取締役 溝端ちあき氏に酵素風呂についての説明を受けた（図 1）。



図 1



図 2

次に実際に酵素風呂の作り方について説明を受け、実際に酵素風呂を体験した。まず、米ぬかに酵素液をかけて十分に攪拌し、熱を発生させた（図 2）。次に、足を酵素風呂の中に入れ、20 分間酵素風呂を体験した（図 3、図 4）。学生の感想としては、体温が上昇し、発汗作用があった。最後に、これからの研究についての打ち合わせを行った（図 5）。



図 3



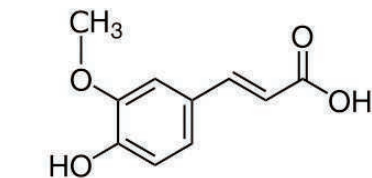
図 4



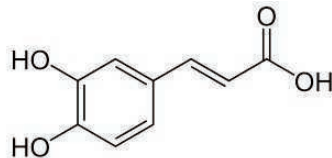
図 5

【米ぬかに含まれる成分の解析】

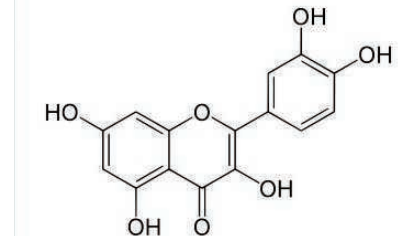
米ぬかには、様々な栄養成分が含まれており、蛋白質、脂質、糖質、ビタミン以外に、オリザノールやフェルラ酸などの抗酸化作用を持つ機能性成分も含まれている。そこで山田錦の米ぬかの成分を酢酸エチルで処理後 HPLC にかけて。また、酵素処理した成分についても酢酸エチルで処理後 HPLC にかけて。その結果、**①**山田錦の米ぬかの成分には3つの機能性成分が含まれていた（3種のポリフェノール；フェルラ酸、カフェ酸、ケルセチン）。**②**米ぬかを酵素処理すると、ケルセチンの量は減少したがフェルラ酸とカフェ酸の量は大幅に増加した。



①フェルラ酸
→抗酸化作用を持つ



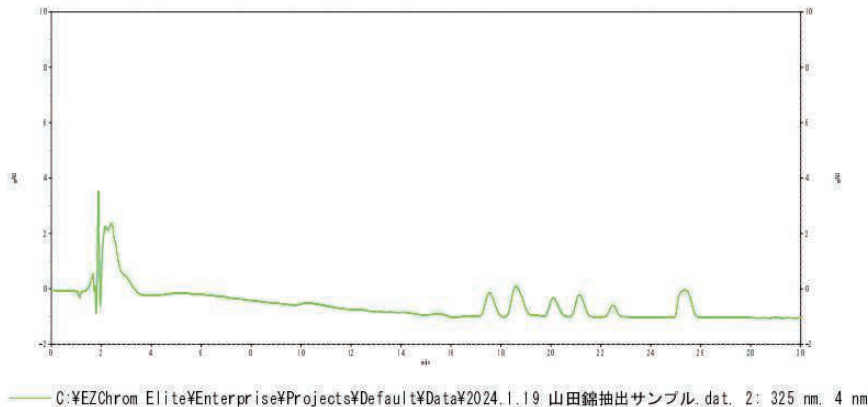
②カフェ酸
→香りによるリラックス効果を持つ



③ケルセチン
→抗酸化作用を持つ

【今後の展望】

- ①化粧品に用いる米ぬか抽出エキスを複数の工程で作成した。
- ②抽出エキに含まれる成分を HPLC で分析した結果、6つの成分を検出した（下図）
今後はこれらの成分の同定を試みる。
- ③抽出エキに含まれるビタミン E やステロイドなどが含まれているかを調べる。



異年齢・異学年組織によるイノベーション創出と その教育的効果の実証事業

経営学研究科 准教授 原泰史

1. 事業目的

組織の多様性を担保することは、果たしてどのようにイノベーションの創出に寄与するのであろうか？本事業の目的は、多様性を有する集団による、問題の発見から解決手法の実践までのプロセスを支援・分析し、新たなイノベーション創出手法の開発と同時に、イノベーション人材育成のための教育手法を開発することである。

2. 活動概要

2023年9月から2024年3月にかけて、社会人の協力者（3名）の助力を得つつ、一般募集した中高生10名（中学生3名、高校生7名）が主体となり活動した。なお、事業実施の過程では神戸大学経営学部原ゼミナールの学生も参加した。活動エリアである農地にて、竹林整備活動や竹炭作りなど実践的な活動を行いながら、フィールドの理解を深めることを2024年2月までに実施した。続いて、2024年3月10日にメインイベントを実施した。当該イベントでは、竹林整備活動を通して見えてきた潜在的なニーズの一つである風雨や日差しを凌ぐことができる屋根（テント）の設置および、伐採した竹材の活用方法として炊爨（すいさん）を実施した。なお当日参加者として、上記の主体的な活動参加者に加えて、社会人（3名）および中高生4名（中学生1名、高校生3名）も参加した。

3. 事業の効果

3-1. テントの設置から見るアイデア収集の重要性：

2024年3月10日に実施したメインイベントでは、竹を支柱部分として活用したテントの設営を実施した。しかし、当初想定していた支柱の設置部分に誤りがあり、テント上部の天幕が垂れ下がる状態だったため、当日参加した社会人のアイデアを活用することで、支柱の設置部分およびその長さを調整した。これらにより、テントを設置することが出来た。



ある特定のアウトカムを生み出す時に、当初の設計どおりには実施出来ないことが多々あること、また、困難に直面した際に、構成員が有するアイデアや経験を活用し組み合わせることが、問題解決につながることを明らかに出来た。こうした議論は、近年企業家の行動におけるマインドセットを明らかにする方法論として注目されるエフェクチュエーションの議論とも繋がるともいえよう。

3-2. 炊爨による地産地消の在り方の検討：

主要メンバーによる炊爨活動を通して食を介したコミュニケーションについて考えたいというアイデアと、社会人参加者の神戸産の食材だけでおにぎりを作りたいというアイデアを組み合わせることで、竹を活用した炊爨活動を通し地産地消を考えるワークショップを開催した。本ワークショップでは、神戸産の食材のみを用いた。炊爨作業では、1.と同様に構成員の多様なアイデアや経験を組み合わせることで、成果を得ることが出来た。イノベーションは価値創造の手段のひとつである。地域の価値を発信する上で、どのように協働すれば問題解決を測り新たな価値を生み出すことが出来るのか、フィジビリティスタディを行うことが出来た。



4. 今後の展望

多様なバックグラウンドから構成される集団において各自が持ち寄る経験や技術を擦り合わせ、定めた目的を達成する過程では、コミュニケーションや目的を明確化することが必要不可欠であることが明らかになった。今後は、より多様なコミュニティ出身の人々を参画させることで、イノベーションを創出する過程で多様性はどのように律速要素となるか、あるいは革新的なイノベーションを生み出しうる素地になるかについて調査研究を行う。また、より個人の行動に着目するため位置データ・移動データ等を活用した分析を行う予定である。

兵庫県内の医療過疎地域の高校生を対象とした 医療系人材育成促進事業（継続事業）『医学部へ行くこうプロジェクト』

医学部附属病院 特命教授 河野誠司
保健学研究科 教授 石田達郎

I. 背景・目的

医師不足・偏在による地域医療崩壊は地域社会における深刻な問題であり、多彩な対策が講じられているものの抜本的な解決にはなっていない。地域において医療従事者を定着されるには、地元出身者が医療従事者になるのが最も自然で理想的である。しかし、医療系学部入学者は都市部の進学校卒業生が多く、医療系の教育コンテンツの利用も地方の公立高校生にとってはハードルが高く、結果として最初から医療系学部が視野にない者も多い。

医師不足地域の県立高校では、地域の医療を支える人材を育成することを目的として「医療系人材養成プログラム」が実施されている。地元の医療現場を訪れて業務に触れるとともに、医療従事者としての倫理観、コミュニケーション能力などを学んでいる。神戸大学は、兵庫県教育委員会と協定書を交わしてこのプログラムと連携する形で令和2年度より「兵庫県内の医療過疎地域の高校生を対象とした医療系人材育成促進事業」を行っている。具体的には、大学医学部の講演や見学実習を通して医療系職種の面白さを奨励してきた。この数年はコロナ禍で事業の縮小を余儀なくされていたが、本年度は、大学教員が現地に赴くとともに、高校生を医学部に招き入れて研究室などを見学・体験することで医療・医学に対する興味と関心を喚起し、医療系職種を目指す人材を育成するための諸活動を行なった。

II. 事業成果

1. 但馬地域での活動（兵庫県立豊岡高校）

1) 開講式・医療系講義（令和5年5月19日）

医療職の魅力や医学研究・教育の実際を紹介とともに、個々の高校生に「心不全」に関する探テーマを与え、調査結果をレポートとして評価した

- ・神戸大学 石田達郎教授

「医療系を目指すみなさんへ」医療系職種の魅力や医学医療の実際を紹介した

「生きてるってどういうこと？」循環器・呼吸器・脳神経の解剖生理から生命維持のしくみと心肺蘇生法を概説した

- ・神戸大学 園田悠馬特命准教授

「理学療法・作業療法の重要性」

超高齢化社会を迎えた地域社会においてメタボとフレイルの問題点と理学療法・作業療法の重要性を説明し、生徒自身が医療従事者になった場合に何ができるかについて生徒独自のアイデアをレポート提出させた

2) 医療系セミナー（令和5年10月17日）

- ・神戸大学 河野誠司特命教授

「免疫システムと病気」

生体における免疫システムおよびその異常によって発症する疾患と診断法について概説した。また、医療系職種の魅力について熱弁を奮った。

- ・医療系ディベート（令和6年3月6日）→4. 参照

- ・閉講式（令和6年3月21日）園田悠馬特命准教授



図1. 園田准教授



図2. 河野教授

2. 淡路地域での活動（兵庫県立洲本高校）

- ・医療系ディベート（令和5年10月6日）→内容は4.参照
- ・2年生探究活動発表会および理系生徒進路別講演会（令和6年3月21日）

医療系職種の魅力や医学研究・教育の実際を紹介するとともに、個々の高校生が調査学習した結果を評価した。

- ・運営指導委員会（令和6年3月21日）

3. 神戸大学医学部サイエンスツアー

医師不足地域の県立高校より選抜された生徒を神戸大学医学部に受け入れ、一般の医療機関では体験できないような先端医療、医学教育・研究などを体験させる企画であった。

- 1) 医学部の講義・実習や研究現場の見学
- 2) 臨床技能教育を体験するために、診察用シミュレーターを用いた診察の体験や、内視鏡、ロボット（ダビンチ）、カテーテルなどの見学を行った（於：地域医療活性化センター）
- 3) 模擬講義（令和5年12月21-22日：2日間）

- ・糖尿病について
 - ・地域医療の実情
- 医学実験（令和5年12月21-22日：2日間）

- ・血糖測定
- ・インスリン測定
- ・組織の染色実験
- ・結果のまとめ・考察
- ・レポート（ポスター）提出

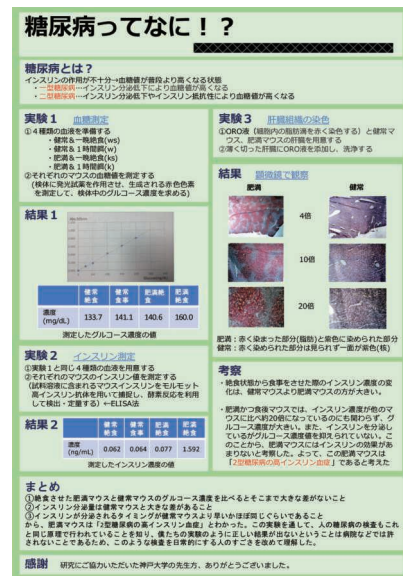


図5. ポスターの例



図3. 実験中の生徒



図4. 模擬講義風景



図6. 生徒による発表

4. 医療系ディベート（豊岡高校および洲本高校）

1) テーマを提示

- ・「安楽死・尊厳死を制度化することについて賛成か反対か」
 - ・「救急車の有料化について賛成か反対か」
- 生徒による調査と準備

2) 生徒自らが科学的あるいは倫理的な見地から調査を行った。

生徒は、自らの希望に関わらず、否定側 vs. 肯定側、ジャッジ、司会に分けられた。

3) ティベート対戦本番（保護者も聴講）

- ・複数チームによる対抗戦形式で実施
- ・肯定側立論→否定側質疑→否定側立論
→肯定側質疑→否定側反駁→肯定側反駁
→否定側最終弁論→肯定側最終弁論
- ・科学的・合理的根拠に基づいて自らの主張を述べ、相手側の意見にも反論することにより、熱く活発な議論が行われた。

4) 判定

評価項目に従って生徒ジャッジによって採点

5) 講評と総括（神戸大学教員）



図7. 生徒による医療ディベートの風景

5. 医療系セミナー（県立北須磨高校）

神戸大学 石田達郎教授

今年度は新たに事業を県立北須磨高校に拡大した。多くの生徒の関心を集めた。

- ・「医療系を目指すみなさんへ」（令和5年6月23日）
- ・「ウェルビーイングな学校を作ろう」（令和5年12月13日）

III. 総括と今後の展望

・本年度は、これまでコロナ禍の影響でできていなかったサイエンスツアーを再開でき、高校生を本学に招いて医学研究の最前線を紹介できた。また、医療系ディベートでは議論が白熱し、参加した高校生と学校から好評であった。

・豊岡高校および洲本高校では、毎年多くの生徒が本事業に参加しているが（表左下）、参加者と関係者から高い評価を得ている。特に、開始後3年で豊岡高校および洲本高校から医療系学部に進む生徒は約3割増加するという成果が現れてきており（表右下）、地域貢献の実績が確立されつつある。この客観的データに基づいて、地元自治体と連携し、事業をさらに充実・拡大することを計画している。

豊岡高校におけるプログラム参加人数の推移

	R1	R2	R3	R4	R5
1年生	45	24	25	36	33
2年生	39	30	22	23	22
合計	84	54	47	59	55

豊岡高校から医療系学部への進学者数

H30	R1	R2	R3	R4
28	30	32	37	32

R5年度の進学者数は未確定

IV. 謝辞

本事業に御協力頂いた県立豊岡高校、県立洲本高校、公立豊岡病院、兵庫県庁（医務課および病院局）および、助成頂いた「地域連携事業」関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

地域リハビリテーションを支える人材育成による ウェルビーイング向上事業

ウェルビーイング先端研究センター
保健学研究科 特命准教授 園田 悠馬

I. 背景と目的

日本は諸外国に例をみないスピードで少子高齢化が進行している。厚生労働省は団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、高齢者の自立生活支援の目的のもとで、地域包括ケアシステムの構築を推進しており、医師と看護師と共に理学療法士・作業療法士などのリハビリテーション専門職が果たす役割は多い。しかし、理学療法士・作業療法士は都市部に偏在し、医療僻地では高齢者の健康寿命延伸や地域包括ケアシステムの構築は現実的に難しい状況にある。そこで、地方にも理学療法士・作業療法士を充足させることは社会的課題であり、地方から理学療法士・作業療法士養成校への進学者を増やし地元に戻させること、地方で従事する理学療法士・作業療法士を定着させる方策を講じることを目的に、これまでに医学部と保健学研究科が連携してきた地域のうち、但馬地域を対象として、新たに発展的な地域連携事業を行うこととした。

本事業は、既存の医学部を中心とした医療人材養成プロジェクトを発展させつつ、地域住民の健康寿命延長に貢献するために次世代の地域医療を見据えた、県内のリハビリテーション過疎地域を対象とした理学療法士・作業療法士人材育成促進を行う事業である。当該地域の拠点校において、高校生の地域密着型リハビリテーションに対する高い関心を喚起し、地元に戻還する理学・作業療法士を目指す人材を育成する。また、当該地域の拠点病院において、理学療法士・作業療法士を根付かせるため、保健学研究科の教員が卒後教育を支援する。

II. 事業成果（但馬地域での活動）

1. 兵庫県立豊岡高等学校「医療系人材養成プログラム」への参画

実践内容（担当内容を抜粋）

	内容	講師・指導
5/19	開講式・オリエンテーション 講演「AI・ロボット×リハビリ医療」 (レポートテーマ提示)「福祉用具アイデア」	神戸大学医学部 石田達郎 保健学研究科 園田悠馬 公立豊岡病院組合管理者 八木 聡 氏
9/7	(レポート提出)	
10/17	医療系セミナー (レポート講評)	神戸大学医学部 河野誠司 保健学研究科 園田悠馬
3/6	医療系ディベート選手権 I 「遠隔医療をもっと拡大すべきか」 II 「安楽死や尊厳死の制度化」	保健学研究科 園田悠馬
3/21	閉講式・講演「医学部・医療職のこれから」	保健学研究科 園田悠馬

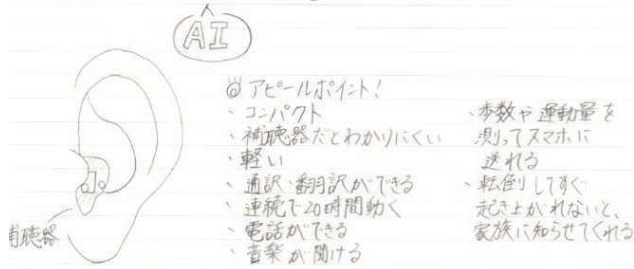


医療系講演



医療系ディベート

「自動通訳できる補聴器」



- ④ アピールポイント！
 - ・コンパクト
 - ・補聴器だとわかりにくい
 - ・軽い
 - ・通訳・翻訳ができる
 - ・連続で20時間動く
 - ・電話ができる
 - ・音楽が聞ける
 - ・歩数や運動量を測り、スマホに送れる
 - ・転倒しやすく、走ることができないと、家族に知らせてくれる

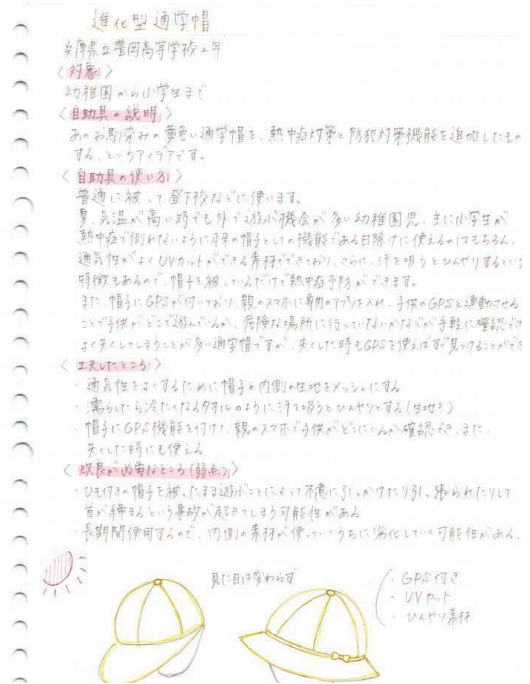
④ この補聴器のメリット！

- ・外国語も翻訳できるため、海外旅行に行きやすい
- ・補聴器が目立ちにくいため、周りの目を気にせず生活できる
- ・生活の幅が広がる
- ・便利な機能がたくさんある
- ・役をあまり感じさせない

④ この補聴器にした理由

補聴器なので、聴覚障害者向けにはありませんが、少しでも便利に、不便を感じさせたくない思いを込めました。障害者だからといって他の人たちと同じような生活ができないのはおかしいと思うので、少しでも快適に過ごせるような機能をつねにみえました。あまりイメージのない海外旅行も、この翻訳機能を使って、

福祉用具アイデア（レポート）例



2. 公立豊岡病院組合 管理者・病院長との面談

豊岡病院リハビリテーション科への研修

3. 豊岡市長・健康増進課との面談

Ⅲ. 総括と今後の展望

今年度の本事業によって、医療系（とくにリハビリテーション）人材養成に関して、兵庫県・但馬地域の高校生だけでなく病院職員・市職員との連携が実現した。豊岡市を中心とした但馬地域の医療系人材不足の問題に対して、中長期的な地域連携を進めていく基盤が整った。

今後、県立豊岡高校の学生を地域リハビリテーション場面に動員すること、医学部地域医療活性化センターのシミュレーターを使用した実習やAI関連の演習を行うことを計画している。また、近隣の高校および中学校も対象にしたい。豊岡病院の職員に対する研修によって、少なからず診療の質向上に寄与できたものとする。AIを用いたリハビリテーション評価等の共同研究も行っていく。

今年度は主に但馬地域を対象としたが、兵庫県立洲本高等学校における医療ディベートにも参加しており、今後は対象地域を拡大していく。本学の学生もこの事業に参加することで、次世代の地域リハビリテーションを見据えることができ、地域医療の魅力を体験する機会づくりを目指す。本事業を継続することによって、将来的には雇用機会の創出などの地域活性化につながることも期待できる。

デジタルトランスフォーメーション（DX）による 西宮市指定文化財の見える化

神戸大学大学院農学研究科 教授 石井弘明

【事業目的】

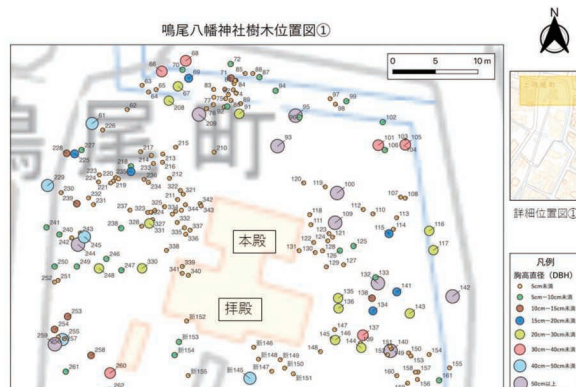
本研究では、西宮市内にある市および県指定文化財（天然記念物および建造物）を3次元デジタルデータとして保存し、その情報を保全と管理に活用するとともに、インターネットを通して文化財を公開し、認知度を高め、その価値を広く市民に理解してもらうことにつなげる。具体的には文化財建造物のGPS測量および3D画像化、天然記念物（保護木、森林）の画像やサイズをGIS上に保存する作業を行う。これらのデータをGoogleなどインターネット上で公開するとともに、文化財の位置、形状、サイズ、状態などの情報を行政が把握することで、持続的な保全・管理に役立てることが可能となる。

さらに、文化財建造物に隣接する天然記念物（保護木、森林）が倒木などの危害を及ぼす可能性があるなど、文化財どうしが互いに干渉しあう場合、その位置関係や大きさ、状態などの情報がデータベース化されていれば、現場視察を経ずに対応を審議し、対策を実施することが可能になる。

【事業概要】

令和5年度は、西宮市内において、文化財指定されている木造建築周辺の樹木のGPS測量を行い、地理情報システム（GIS）上に座標化した。具体的な調査地は公智神社（神輿殿および社叢）、西宮神社（本殿および社叢）、日野神社（境内および社叢）、鳴尾八幡神社（境内および社叢）、関西学院大学（学内古墳および樹木）である。

西宮市の天然記念物に指定されているクスノキ保護木2個体（大市八幡神社の大クスノキおよび海清寺の大クスノキ）について、ドローンを用いて映像を撮影するとともに、これをインターネット公開用に編集し、3次元デジタルデータに変換、保存した。



GPSによる樹木座標のデジタル測量（上）および作成された樹木地図

都市において人と緑が共生するためには、枝の越境や落下、災害による倒木などの危険を回避するため、樹木の剪定や伐採の必要性が生じる。社寺林など文化財指定された都市緑地においては、管理施業と生態系保全、住民の理解をどのように実現するかが、重要な課題である。



ドローンを用いた保護樹木（西宮市指定天然記念物）の撮影と画像

【事業の効果】

ドローンで撮影した映像はインターネットを通じて公開するべく、現在編集中である。西宮市のホームページで公開することで、天然記念物の認知度を高め、その価値を広く理解してもらうことに役立てることができる。また、データベース化した文化財・天然記念物の位置、形状、サイズ、状態などの情報は、行政が行う保全・管理計画に役立てることができる。

連携した団体：西宮市教育委員会・西宮市産業文化局・西宮市郷土資料館・兵庫県教育委員会
・黎相庭園 / Plant-Tree Research

【今後の展望】

今後は残る3本の保護木についても、撮影とデジタル化を行う。また、他の自治体との連携も進めており、神戸市内の天然記念物についても同様の調査、デジタル化を行う計画が進行中。将来的には、保護木や天然記念物に限らず、市街地の街路樹なども含むすべてのグリーンインフラのデジタルアーカイブ化を目指す。

場所を問わない水耕栽培システムによる農業実証と研究・教育利用

農学研究科 助教 小山 竜平

【背景・目的】

国内の農業において、従事者の高齢化や人口減少が問題となっており、その主な理由は事業として収益が上がらないことや労働負荷が大きいことが考えられる。そのような既存農業の課題に対して、低コストな水耕栽培システムの実現は解決方法の一つとなりうる。

水耕栽培の導入メリットとしては、土作りや畝立てなどの耕起作業や除草が不要であり軽作業が中心となるということが挙げられる。連作障害や土壌由来の病害を回避できることから生産が安定しやすく、土質を問わず生産品目の選択も可能である。さらにSDGsの観点からも、土耕栽培に比べて灌水量や窒素流出を少なくすることが可能で、環境負荷を軽減できる。近年増加している高度な施設栽培ではこれらの利点から水耕栽培が導入されているが、費用や面積の面で導入ハードルは高い。そのため大規模な農業法人での採用に限られ、農業従事者減少の全てを補うことは困難である。また小規模生産者への技術導入においては地域の技術指導に頼るところが大きい、水耕栽培の知識や技術を持った普及員がまだ少ないということも実用化が進まない要因の一つとなっている。将来、兵庫県の農業現場に新しい技術を導入できる人材を育成することも本学農学部期待される役割である。しかしながら現行の教育課程では農場実習などの土耕栽培に限られており、設備が必要な水耕栽培に触れる機会がほとんどない。

本申請事業では学内およびモデル農園に装置導入し、既存農業の大半を占める露天や凡庸なビニールハウスにも設置できる低コスト水耕栽培装置の技術・事業の実証を行った。また学内の圃場に装置を設置して講義にて水耕栽培を並行実施し、農学部の学生が水耕栽培への理解を深められる教育の機会を設けることを目的とした。

【活動内容】

①ビニールハウスでの水耕栽培による農業事業実証

- ・浮かせてファーム丹波篠山農場（兵庫県篠山市福住）を2023年5月に竣工した。60㎡のビニールハウス内に27㎡水耕栽培装置（有限会社グリーンスペース造園）を設置した。
- ・5月から12月までトマト60株とピーマン48株を定植し、生産栽培から販売までを行った。病害虫などの発生もなく無農薬栽培を実現することができた。また、近隣の産直売場での販売や阪神間のホテルでの採用も実現し、市場価格と比べると高単価での販売が可能であった。特にトマトの流通が少なくなる高温期においても収穫を継続でき、本栽培の利点の実証されたと考えている。初年度から簡単に栽培できたという農場運営者の手応えも得られている。
- ・12月以降はリーフレタスとセルリーの栽培を実践している。



図1. 浮かせてファーム（竣工式・トマト販売・リーフレタス栽培）

②農学部応用植物学コース学生実験での水耕栽培の実践

- ・神戸大学農学部（六甲台第二キャンパス）の実験圃場の一角に水耕栽培装置を設置した。応用植物学専門実験Ⅰにおいて例年実施しているキュウリの栽培実習（土耕）に並行して、水耕の栽培試験を実施した。
- ・応用植物学コース3回生の実習講義にて水耕栽培の特徴を説明し、圃場での栽培作業や生育の様子を間近で見られる機会を設けた。それまでに実際の水耕栽培に触れた経験のある学生は少なく、貴重な学びを提供することができた。
- ・6月に定植し、8月まで栽培を行って収量と品質を調査した。土耕での慣行栽培に対して1.23倍の本数を収穫することができ、外観や食味でも優れた収穫物が得られた。キュウリの表面に発生するブルームの量や病害の発生状況に違いが見られており、学術的にも興味深い知見であった。来年度以降も講義の継続と合わせて、研究データの取得を行っていく予定である。



図2. 農学部圃場に設置した水耕栽培装置でのキュウリ栽培の様子

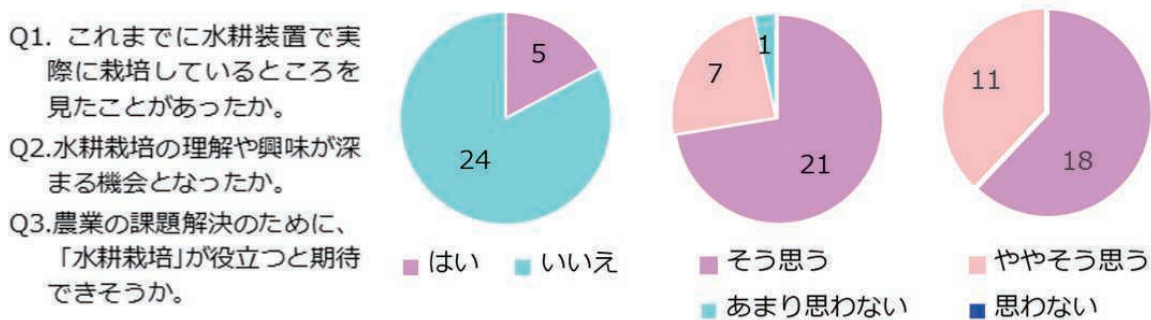


図3. 講義・栽培実習後の振り返りアンケート

【今後の展望】

浮かせてファーム丹波篠山農場では実践を継続しながら、モデルケースとして同様の生産形態が増えることが期待される。また近年の植物研究では、園芸学だけではなく様々な分野でも水耕栽培を実験モデルとして利用することが増加しており、本実習を経験した学生が今後の研究に学びを活かしてくれるであろう。このような取組みが、水耕栽培の普及・利用を促進し、農業や食の課題解決に貢献できることを願っている。

【参考】

丹波新聞 2023年5月8日

「水に浮かせて野菜栽培 楽農でもうかる農業目指す モデル農場を開設」

水に浮かせて野菜栽培 楽農でもうかる農業目指す モデル農場を開設 - 丹波新聞 (tanba.jp)

鶴甲団地・有野台団地 再生・活用プロジェクト

工学研究科建築学専攻 准教授 栗山尚子

■背景と目的：

人口減少社会を迎え、空き地・空き家問題は全国的な課題である。特に居住者の急速な高齢化や施設の老朽化などにより、活力を失いつつ初期の郊外住宅団地において、団地再生を目指して近隣地域や周辺の公的施設の活用や住戸の高質化の活動は、大学の教育・研究の機会の場の創出にとっても有用である。本プロジェクトは、(一財)神戸住環境整備公社(以下、公社)と連携し、高経年住宅団地の再生・活用に関する実践を通して、有効な方策を見出すための知見を得ることが目的で、今年度は、①鶴甲団地での空き住戸解消に向けたプラン提案と②有野台団地でのイベント時の外部空間利用状況調査に取り組んだ。

■鶴甲団地での空き住戸解消に向けたプラン提案と展示：

2015年度にDIYに取り組んだ鶴甲団地15号棟の1階部分の連続2住戸のルームシェアとその住戸をつなぐウッドデッキ部分について、リニューアルプランを提案した。その後、神戸大学が公社と契約を結び、留学生の住まい(ルームシェア)として利用されていたが、コロナ禍の影響で借り手数が伸び悩み、さらに光熱費の高騰により光熱水費が常態的に赤字となった。そのため、2023年9月の留学生の退去をもって、留学生用の住居としての利用を終えた。2024年度以降の新しい利用について、栗山研究室学生(13名)が8グループに分かれて提案を行なった(表1)。1年間の活動スケジュールは表2の通りで、鶴甲会館での展示では、展示を見た方々へアンケート調査とヒアリング調査を実施した。

表1. 鶴甲団地住戸リニューアルプランのタイトル一覧

プラン No.	タイトル
1	ボタニカルプロジェクトハウス
2	♪スタジオハウス-音楽でつながる鶴甲-
3	でこぼこハウス
4	個性あふれだす家
5	「CHILL HOUSE」 -団地に芽吹く、5つの学生オアシス-
6	「学び家」 -団地的子どもコミュニティを形成する家-
7	夢叶 HOUSE Ver.DIY 工房
8	夢叶 HOUSE Ver.カフェ

表2. 2023年度鶴甲団地での活動スケジュール

日程	活動
6/28	鶴甲団地の住戸の現地視察
10/25	公社にて、プラン発表
12/12-17	鶴甲会館にてプラン展示
12月末	公社でのプラン展示
1/26-31	三宮・花時計ギャラリーにて ポスターと模型写真の掲示
1/31-2/29	三宮・花時計アドウィンドウにて ポスターと模型の展示

アンケート調査では、来場日、来場のきっかけ、回答者の基本情報(年齢、性別、居住地、住宅について等)、一番目と二番目に良いと思った作品とその理由をお聞きした。回答者17人のうち、半数が10代以下で、鶴甲会館を利用している子供達であった。居住地は、過半数(11人)が団地内であった。各プランの年齢別得票結果(図1)の3番、4番のプランの得票をみると、年代によるばらつきがあることがわかる。回答理由(図2)では、1番目によかったプランを選んだ理由は、「部

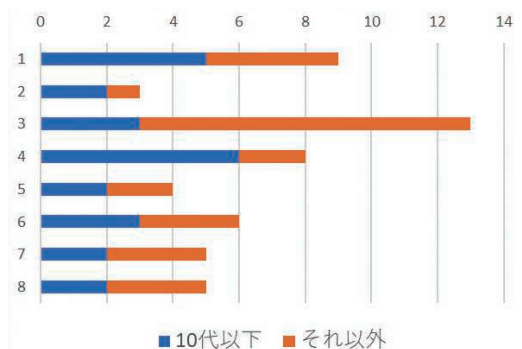


図1. 各プランの年齢別得票結果

屋の雰囲気が楽しそうだったから」が一番多く、次いで「住んでみたいと思ったから」が多かった。2番目によかったプランについては、「住んでみたいと思ったから」が一番多く、次いで「部屋の雰囲気が楽しそうだったから」が多かった。

ヒアリング調査では、10代男子（小学生）、50代女性、40代夫婦から回答を得た。10代男子が一番いいと思ったプランは、2. スタジオハウスで、理由は「自分の部屋が欲しいので住んでみたい。部屋の雰囲気が楽しそうであり、ベランダで遊べるようなデザインもいい。持っている電子ピアノをベランダで弾きたい。全体的に遊びやすい場所が多い。」と、自身が住むことを想定した回答であった。50代女性は、8. 夢叶HOUSE Ver. カフェについて、「カフェができる場所を探している人も多いと思うので、こういう場所があれば良いと思った」、2. スタジオハウスについて、「防音室があるのがいいと思った。今の鶴甲団地は、自治会が若い人になりつつあって祭りなども大盛況なので、歌手などを招くのも良さそうだった。」と、団地の状況をふまえた回答が得られた。

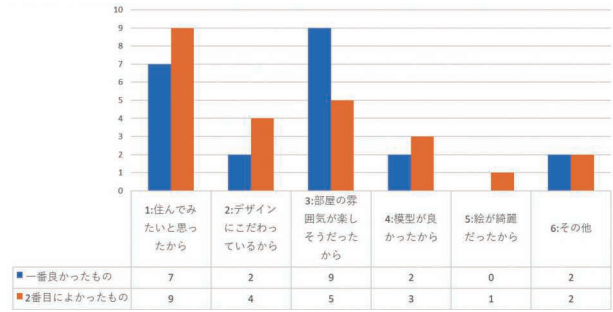


図2. よいと思ったプランを選んだ理由



図3. 展示を見る子供達



図4. 展示のフライヤー

■有野台団地でのイベント時の外部空間利用状況調査：

2020年度に有野台団地の公社住宅の外部空間の現地調査とリニューアルプランの提案を行ない、2021年度にプランの内容が一部反映されて外部空間が整備され、2022年度は整備済みの外部空間について、日常時の利用状況調査を実施した。今年度はイベント時（夏祭り、8/5、13:30-14:30）の外部空間利用状況の現地調査と利用者（6グループ・14名）へのヒアリング調査を実施した⁽¹⁾。

利用状況は、親と子供、もしくは、祖母、親、子供の三世帯が、子供を連れてきて、ゲームをしに来た状況と、パーゴラ広場に設置されたベンチと椅子の場所で、70代と思われる女性グループがお話している状況を確認できた。子供が遊ぶのを見守る親について、有野台住宅に居住する祖母の家に遊びに来て、夏祭りがあるので遊びに来たという状況と、実家が有野台住宅ではないが、夏祭りで子供を遊ばせるために、わざわざ来た人を確認できた。属性に関わらず、イベントへの要望が高く、定期的にイベントがあれば、子供を遊ばせられるという意見が得られた。

■今後の展望：

鶴甲団地については、今回提案した住戸改修のコンセプトやプランの一部が取り入れられて、2024年度に改修が進められるよう、準備が進められている。コロナ禍が落ち着いたことから、周辺住民の方々へ改修時のDIY作業を周知し、一緒にDIY作業に取り組み、住戸の質の向上や、周辺住民の方々も団地再生への興味・関心が高まるよう、寄与していきたい。

有野台団地については、整備された外部空間の利用について、積極的に使えるようにするために必要な条件を、団地住民の皆様と一緒に考えていきたい。

注：(1) 有野台団地の外部空間の調査結果の詳細を下記の論文にまとめている。

栗山尚子、郊外住宅団地の再生に向けた外部空間整備活動の実態と課題－神戸市北区有野台団地を事例として－、日本建築学会・日本機械学会・日本設計工学会・精密工学会・人工知能学会・日本デザイン学会共催 Design シンポジウム 2023 講演論文集、pp.292-295、2023年10月

市民とともに読み解く神戸の戦後生活史 - 戦災をめぐる映像資料の新たな可能性を考える

国際文化学研究科・教授・長志珠絵

I. 背景・目的

20世紀の神戸は、水害・戦災・大震災と大きな変貌を遂げる。特に戦後直後から高度経済成長前にかけての街の記憶、生活記録の調査・聞き書きの収集は、都市のアイデンティティを考える上で重要であり、街の人々の記憶を介しての収集は喫緊の課題でもある。本企画では、USSBS（米国戦略爆撃調査団）報告の写真や映像資料など、戦後直後の街の記録を映像スクリーンやパワーポイント作成などによって投影し、それらをふまえて参加者とインタラクティブに議論することで、当事者の記憶を呼び覚ます場を設定した。さらにそれらを記録し、地域の経験として共有することを目指した。戦災史資料を用いた取り組みである。

II. 事業成果

0. 神戸空襲を記録する会の資料整理を進めつつ、上記の観点から、写真映像資料の発掘につとめ、準備を進めた（5-9月）。

1. 地域に向けた活動と取り組み

①神戸市行財政局業務改革課との意見・情報交換 神戸市同課は神戸市内防空壕調査を進め、その結果等を公表予定であったことから意見交換を行った（2023年11月6日）。

②神戸空襲を記録する会と協力し、文献調査のなかで浮上した「六甲山」の防空壕という観点から、通常の聞き取りのなかで特に防空壕に焦点をあててのお話をまとめてもらうほか、六甲歴史散歩会をはじめ神戸大学近在の高齢者の方々をお誘いし、未公開の米国戦略爆撃調査団による防空壕調査報告書（図5）の映像写真等をスライド投影し、情報交換の会を持った。参加者はぜひ次の機会を持ちたいとの意向であった（図1 参加者10名、神戸大学鶴甲第一キャンパス、2023年11月27日）

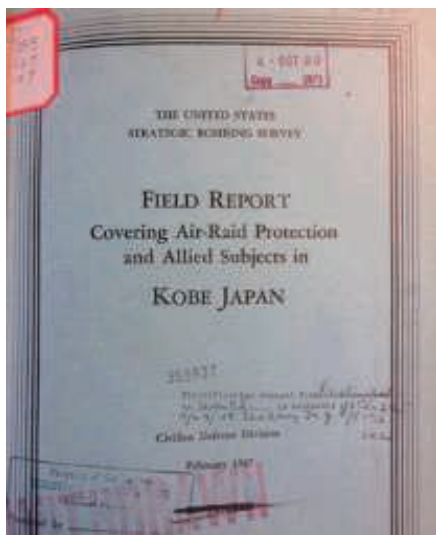


図5



図1

2. 市民に向けたイベント

新長田の神戸映画資料館の技術面・広報面での協力も得つつ、「市民とともに読み解く神戸の戦後・戦災の記憶と記録（その1）」として市民向けの公開イベントを行った。神戸空襲を記録する会からも積極的な協力・参加を得た。内容としては、防空壕関係資料のほか、USSBS 調査報告の解説、USSBS による神戸のカラー映像史料の映像資料としての読み解きなどの解説を交えつつ、USSBS カラー映像を映写機で投影し、戦後初期神戸の映像写真・生活記録として参加者とともに議論する機会とした（2024年2月3日 神戸映

画資料館 参加者 30 名 図 2、図 3)。

「市民とともに読み解く神戸の戦後・戦災の記憶と記録—映像資料から(その1)」
 2月3日(土) 会場 神戸映画資料館
 参加費 無料 長田区御塚町5丁目5番1アスタくづか1番館北棟2階

プログラム 10:20-12:45(開場10:05)
 ・主旨説明・司会 長志珠絵(神戸大学)
 ・「戦略爆撃調査団:USSBS報告書とは」佐々木和子(神戸大学)
映像—USSBS神戸フィルム(昭和期35mmを映写します)の上映 50分
 ・USSBS神戸フィルムの撮影手法と映像分析
 衣川太一(映画資料館)
 ・「USSBS報告書が注目した神戸の防空壕」長志珠絵
 ・コメント 小城智子(神戸空襲を記録する会)
 ・参加者からの意見・情報交換等

戦後直後の「神戸」は、戦災・占領・復興が交差する街でした。
 ここにやってきた米軍関係者の中には、日本の空襲効果を調査した米国戦略爆撃調査団の姿があり、カメラは、写真やカラー動画映像によって街や人々を記録におさめています。本企画はこの映像を視聴者と共有し、街や人の生活を紐解き、読み解く試みです。
 お気軽にご発言・ご参加ください。
 問い合わせ先
 :s.osa@people.kobe-u.ac.jp

主催:神戸大学地域連携事業2023
 主催:「市民とともに読み解く神戸の戦後生活史・戦災をめぐる映像資料の新たな可能性を考える」
 代表:長志珠絵(神戸大学国際文化学研究所)

図 2



図 3

III. 総括と今後の展望

USSBS の映像投影および解説については録画も作成した。再度、神戸大学での映像投影の機会を持つなど今後も視聴者を広げていく予定である。高度経済成長以前の神戸市域に関わる映像・写真資料は神戸空襲に関するものについても他にも多く収集可能であり、今後もこれらを発掘し、視聴の機会を広げるとともに、映画資料館の協力を得て戦時下から戦後初期の映像作品の背景としての「神戸」をめぐって、土地勘と記憶を持つ市民とともに読み解く機会を作ることを考えていきたい。

なお 1—②に関する報告書としては、他研究プロジェクト成果報告書(図 4、佐々木和子・長志珠絵編、2024 年)等もご参照いただきたい。

神戸空襲を記録する会関係資料集 6

＜神戸空襲を記録する会＞の戦災アーカイブ

目次

＜神戸空襲を記録する会＞の戦災アーカイブを編む—にあたって……………	4
Ⅰ 神戸空襲を記録する会のアーカイブ—草創期のころ	
三本谷君子さんと中田政子さん……………	8
1980年代の「神戸空襲を記録する会」……………	17
Ⅱ 地域の戦災に関する映像・視覚資料	
神戸の防空壕……………	22
附 記録する会戦災アーカイブ及び神戸市収集戦争関係資料目録	
解説……………	33
資料解説……………	34
記録する会戦災アーカイブ目録……………	74
神戸市収集戦争関係資料目録……………	79

図 4

兵庫県・神戸市における特別な支援を要する子どもへの学際的支援体制の構築

医学研究科 特命教授 永瀬裕朗
人間発達環境学研究所 教授 北野幸子

背景・目的

発達、行動、心理面において特別な支援を必要とする子どもに対しては乳幼児期など早期からの支援が、将来にわたる身体的、心理的健康、社会適応を改善することが示唆されている。現在このような支援は自治体ごと、医療、教育、保健、福祉などの職場、職種ごとに、様々な形で提供されているが、その全体像は共有されていない。そのため、それぞれに関わる専門職が、自分たちの役割や、どの機関に何を相談できるのか？ということが見えていない。本事業では医療、幼児教育・保育それぞれの専門職がお互いの支援内容を共有するための研修会、ワークショップを医学研究科と人間発達環境学研究所で共同開催する。各分野の取り組みの実態、長所と限界を把握することで、将来の分野横断的・学際的で、より効果的な支援に向けた課題と展望を示す。また、参加する子どもの発達支援に関わる専門職が、他分野、他職種での取り組みを相互に理解し、顔が見える関係を構築することで、各地域に応じた支援ネットワークづくりに役立てる。

事業の概要

2023年12月16日(土)14:00～17:00に、神戸大学医学部講義室並びにweb配信のハイブリッドで、第7回神戸こどもの発達支援研修会～ひとりひとりの発達を踏まえた乳幼児の支援 保育学・乳幼児教育学と医学の専門職連携のあり方を探る～を開催した。参加者は226名(Web参加:175名 現地参加:51名)で、以下のように神戸市・兵庫県を中心に子どもの発達に関わる多様な所属の専門職が参加した。

職種:保育士 78名、医師 20名、教師 18名、看護師 16名、児童発達支援管理責任者 7名、公認心理師 7名、社会福祉士 4名、保健師 3名、他

所属:認定こども園 33名、保育所 28名、医療機関(公的療育機関以外)24名、幼稚園 19名、公的療育機関 17名、通所支援事業者 15名、市区役所 7名、教育委員会 4名、児童相談所 3名、研究機関・専門職養成機関 3名、他

第7回 神戸こどもの発達支援研修会
ひとりひとりの発達を踏まえた乳幼児の支援
保育学・乳幼児教育学と
医学の専門職連携のあり方を探る

日時 2023年12月16日(土) 14:00～17:00
会場 神戸大学医学部A講義室 & Zoom配信のハイブリッド開催
(現地参加 定員 100名)
対象者 子どもの発達支援に従事する専門職、及び同分野の学生

参加無料
事前登録制

14:00-15:45 第1部 ハイブリッドセミナー
講演1 発達の問題に対する医学からのアプローチ
神戸大学大学院医学研究科内科学講座小児科学分野こども急性疾患学部門
小児統合健康学領域(神戸市寄附講座) 特命教授 永瀬 裕朗 先生
講演2 保育学・乳幼児教育学が目指す子どもの育ちと学びの支援
神戸大学大学院人間発達環境学研究所 教授 北野 幸子 先生
質疑応答 指定発言者 神戸市総合療育センター診療所 所長 高田 哲 先生

16:00-17:00 第2部 ワークショップ(現地参加者のみ)
保育学・乳幼児教育学と医学の
専門職連携に向けた対話型グループワーク

参加申込方法
参加をご希望の方はQRコードもしくはURLより申込フォームにアクセスの上、お申し込みください。
[<https://forms.gle/JymFuQEbcfW8pZYj7>]
申し込み締切日 2023年12月14日(木) 12:00迄
※現地参加者の定員は先着100名です。定員超過の場合は、オンラインでの参加となります。

参加申込は
こちらから

主催 神戸大学大学院医学研究科内科学講座小児科学分野こども総合療育学・こども急性疾患学部門小児統合健康学領域(神戸市寄附講座)、神戸大学大学院人間発達環境学研究所乳幼児教育学研究室・教育連携推進室、神戸市こども家庭局 共催
後援 神戸市医師会、神戸市小児科医会、兵庫県小児科医会

Zoomの使用方法、参加登録などお困りの際はご相談ください。 ☎078-382-6090(神戸大学小児科医局)

事業の効果

前半では医学研究科の永瀬と、人間発達環境学研究科の北野が、医学、保育幼児教育学それぞれの分野が子どもの発達の問題をどのような観点で捉え、どのように取り組んでいるかということを紹介した。また児童福祉からの観点として、神戸市総合療育センター診療所長高田哲先生からの指定発言をいただいた。後半は現地参加者のみでワークショップを行った。前半の研修会を踏まえて小グループに分かれて多職種でのグループディスカッションを行った。活発なディスカッションが行われた。



今後の展望

参加者アンケートでは本セミナー・ワークショップは大変好評であった。一方で子ども発達支援に関して、各分野の参加者は、親自身の気づきの問題、現場でのマンパワーの問題、地域での連携の問題など様々な具体的課題を抱えていることがアンケートで示された。実学の伝統のある大学院大学である本学において高度専門職が連携協働し、これらの課題について検討し、子どもの観点からの学際的支援体制を構築していくことは、こども家庭庁の創設を契機に具現化がめざされている「こどもまんなか社会」実現のための時機を得た全国のモデルとなると考えられ、次年度以降検討していくことが必要であると考えた。

プロジェクト福良

～南あわじ市福良地区における古民家改修と町おこし～

令和5年度学生地域アクションプラン 神戸大学工学部建築学科3回 山本真菜

1. はじめに

我々プロジェクト福良は淡路島福良地区を活動拠点とし、「福良を活気づけたい、福良の魅力をもっと知ってほしい」という思いのもと活動している。福良は港町として知られ、うずしおが見られる観光スポットとなっているが、かつて商店街として栄えたエリアは今では古民家が並び閑散としている。そこで私たちは学生の視点でできることを考え、地域の方々と関わり合いながら人々が集う場を作るよう古民家改修を行い、また活動を発信することで魅力を広め、福良のまちを活気づけることを目指して活動を続けている。

2. 活動内容

今年度の活動を、二つに分けて紹介する。

まず一昨年、昨年度に引き続き取り組んでいる「ギョギョタウン事業」についてである。このプロジェクトは南あわじ市が主体となって進めているものであり、古民家を利用した小さな水族館ギョギョタウンを拠点に、まちへ賑わいを広げていくことを目的としている。私たちはその古民家の改修に携わせていただいている。今年度は大きく分けて、①古民家2階の床、②1階トイレ、③1階畳の部屋の3か所の改修を行った。

① 2階床の張替え

昨年度は、ギョギョタウンを宿泊可能な施設にするため布団収納棚をつくったり、襖紙の張替えを行ったりした。そして今年度は最初の活動として、手を付けられていなかった残りの2部屋の傷んだ畳をはがし、根太と床板張りを行った。現在その部屋の用途は決まっていないため、プロジェクト福良の工具を置く場所として利用させてもらっている。

② 1階トイレの改修

ギョギョタウンには水の通ったトイレがあったのだが、床のタイルはボロボロしており洗面台も小さく、あまり使いやすいトイレではなかったため皆利用していなかった。そこで私たちでデザイン案を提出し、壁の補修・塗装、床のすのこ作成、洗面ボウルの取り換え、棚の作成、ドアの補修と、全面的に改修を行った。



③ 1階畳の部屋の改修

最後に、トイレの改修と並行して行っていたのが畳の部屋の改修である。この畳の部屋はトイレに向かう動線になるので、この二つを使える状態にしようということで同時に作業を進めていた。壁に漆喰を塗り、押入は収納やインテリアの空間として利用できるよう床板を補修した。

トイレ、畳の部屋の改修が終わり、昨年度のふぐ焼き提供スペースと合わせ、1階では水族館の運営をする方が休憩したり、地域の方々が顔を出して少し団らんできたりするようなスペースを充実させることが出来た。

二つ目に、地域の方々との交流についてである。私たちの活動は基本的に、月に一度ギョギョタウンで改修の作業を進めるという形であるため、あまり地域の方々と積極的に関わることはできていないのではと感じていた。しかしそんな中でも水族館やふぐ焼き提供スペースを訪れた方が声をかけてくださったり応援してくださったりする。昨年度、今年度はそれ以前よりも地域のかたとのコミュニケーションを積極的にとり、

SNSでの活動発信も行ってきた成果もあり、私たちの活動を知り応援して下さる福良の方から、小学生向けの工作ワークショップを開いてほしいというご依頼をいただいた。昨年2月に第一回「寺子屋塾」として福良の小学生と一緒にモザイクタイルコースターを作るイベントを行った。段取りから材料の準備、試作、時間配分など、プロジェクト福良として初めての活動であったので不安な点はあったが、無事成功させることができた。今年の2月にも第2回寺子屋塾を開き、一緒にスノードームを作った。20人近くの小学生が応募してくれ、にぎやかな雰囲気で行うことが出来た。古民家改修を主な活動として続けてきた私たちに、このような地域の方との交流の機会がいただけたのは、私たちの活動がいろいろな方にきちんと届いているからなのだと実感することができた。



3. おわりに

1年間を振り返り大きな成果は、ギョギョタウンでの活動の終わりが見えたことと、寺子屋塾として古民家改修以外で、地域の方と関わる機会を得たことである。ギョギョタウンの活動は3月の活動をもって作業が終了する。2年前から携わらせて頂き、ふぐ焼き提供スペース、布団収納棚、床板の張替え、トイレ、畳の部屋の改修など、古民家の多くの部分を改修してきて達成感を覚えると同時に、もっとできたのではないかと思う部分もある。年度初めの頃、トイレや畳の部屋のデザイン案を自分たちで作成する前は、一時期求められた改修をただこなすだけのような形になってしまっていた。私たちに出来ることを探してもらうのではなく私たちがもっと積極的なアプローチをできたのではないかと思う。

プロジェクト福良の活動の根源にあるのは「福良を活気づけたい、福良の魅力をもっと知ってほしい」という気持ちであることを今一度思い出し、改修の活動拠点となる場所にとどまらず、活動の幅、交流の幅を広げ、生まれた関係性を大事にしていきたい。そしてSNSの発信で遠くの方に届けるだけでなく、直接のコミュニケーションによって近くの方々にも改めて福良の魅力を届けていきたい。

文化財周辺の樹木の学術調査と維持管理

神戸大学保全生態学研究会

【発足の経緯】

近年、都市林は人間の生活域の拡大によって小面積化し、また外来の病害虫による被害、外来植物の繁茂などによる様々な問題が発生している。本団体は、都市住民に恩恵を与える都市林が抱える様々な問題を解決することをめざし、都市林の生態系を調査し、科学的データに基づいた管理計画を行政に提案するとともに、都市林を身近な自然として活用することを目ざして、2005年に発足した。

【活動内容】

西宮市の文化財周辺の樹木や社叢林の植生調査などの生態学的な調査を行い、維持・管理団体および行政と連携しながら、学術的知見にもとづいた管理方法の検討を行った。同時に、市民が都市の緑に接し、身近にある天然記念物について理解を深める機会を提供するためのイベントを企画・実施した。また、文化財の修理材ともなるカヤについて、丹波篠山市にて茅場の再生プロジェクトに関った。神戸市のフォーラムにおける発表を通して天然記念物や本活動について情報発信を行った。

文化財と周辺樹木の維持管理

文化財に指定されている古墳や建築物とその周囲にある社叢林や樹木について両者の維持に必要な管理計画を検討した。西宮市にある7世紀ごろの古墳では小さな丘陵状になっており、根が張ることで補強されている一方で、西宮市の公智神社では周囲の樹木によって文化財である建築物が損傷する事故が起きた。このような干渉しあう樹木と文化財について、樹木の個体調査と位置情報から、伐採や剪定などの管理方法について立案を行った。

茅場再生プロジェクト

文化財の維持や修理において修理用材の調達は不可欠だが、近年の社会情勢などの変化により、生産量の低下などが原因で入手が困難になっている。その一方で、以前は使われていた茅場などが放置され、植生や生態系が変化している。今年度は丹波篠山市にある使われなくなっていた茅場をお借りし、プロの指導の下、当団体の所属学生たちで茅場の管理から収穫まで行った。来年度以降は収穫したカヤの活用方法についても検討したい。



西宮市内の7世紀ごろの古墳



公智神社の損傷した文化財



学生たちによるカヤ収穫

啓蒙・普及活動

11月には毎年恒例のえびすの森において、天然記念物に関する講義と林内清掃イベントを実施した。ゴミ拾いと同時にかつて林内で繁茂していた外来種のシュロを除去しながら、天然記念物について市民の理解を深めた。また、公智神社では、神社の成り立ちや社叢林について解説を交えながらの見学することができる機会を設けた。

連携した団体：西宮市産業文化局、西宮市郷土資料館、西宮文化協会、兵庫県環境部環境政策課、文化庁、西宮神社、公智神社、やまもりサーキット



地域ボランティアによる外来種の駆除と林内清掃活動



神社や社叢林の公開

【今後の展望】

引き続き社叢林の学術調査を行い、学術的知見にもとづいた都市緑地の保全・管理手法の提案に努める。学外の協力者や学童も交えた市民向けの講義や観察会などのイベントを継続的に行い、天然記念物や都市の緑に関しての普及・啓蒙活動を充実させる。

被災地地域行事支援ボランティアプロジェクト

令和6年3月22日

ESDプラットフォームWILL（大船渡ESDプロジェクトチーム）大西 麻亜矢

1. 訪問の背景

岩手県大船渡市赤崎町は、2011年3月11日に発生した東日本大震災と津波により甚大な被害を受けた地域である。ESDプラットフォームWILLは被災直後に現地を訪問し、復旧支援のためのボランティア活動を行ってきた。復旧活動が落ち着いた後も長期的な赤崎の復興に向けて現地の方と協働し、「赤崎復興市」などの地域行事の運営に携わってきた。

しかし新型コロナウイルスの影響により2020年～2022年の間は訪問活動の中止を余儀なくされた。赤崎でも町おこしの動きが停滞し、地域活性化の基盤となる地域住民同士のつながりの希薄化が進んでいた。

このような現状を受け、WILLでは2023年3月に3年ぶりに現地を訪問し、神戸に住む学生ボランティアと赤崎に住む方々とのつなぎなおしを行った。今回の訪問は、その時新たに生まれたつながりを生かし、2013年より公民館と地域住民主導で行われてきた復興マーケット『赤崎復興市』の開催を目指して訪問活動を計画・実施したものである。

2. 活動の目的・概要

今回の訪問では以下の3点に重点を置いて活動した。

- ① コロナ禍において中断されていた『赤崎復興市』の再開支援
- ② 地域行事の活性化による町おこし支援
- ③ 継続的に地域の活動を支える担い手の発見

活動日は6/23～26（移動日を含めると22～27）の4日間であり、途中参加・途中離脱を含め延べ20名が参加した。うち赤崎を初めて訪問するメンバーは4名であった。

主な活動は以下の通りである。いずれも赤崎復興隊（震災以後、赤崎の活性化を目指して活動してきた組織）と綿密に連絡を取りながら活動を行った。

赤崎復興市の準備・運営・片付け

赤崎復興市開催に向けた準備および運営のお手伝いを行った。具体的には看板などの備品の修復、のぼりの設置、チラシのポスティング、会場設営、ブースの出店および補助、休憩所の運営補助、メッセージボードの作成、撤収作業などを行った。作業を通して、これまでの復興市に込められてきた思いや今後への不安など様々なお話を聞くことができた。当日は多くの方が来場し、私たちと赤崎の方だけでなく、赤崎に住む方同士の交流が生まれるきっかけになった。



現地中学生 / ユースボランティアのコーディネート

今回の復興市のボランティアには、現地の中学生と20～30代前半のユースにも参加してもらった。赤崎復興隊を通して東朋中学校に連絡し、任意のボランティアを募った。ユースは、以前赤崎復興市に参加したことがある方を中心に声をかけた。当日はWILLが出店したたこ焼き・焼きそば・スーパーボールすくいのブースのお手伝いや、休憩所の運営・メッセージボードの作成を手伝ってもらった。終了後には「また来たい。」という感想をもらうことができた。また復興市終了後は復興隊のつどいにも参加してもらい、これからの具体的な取り組みについてもともに考えることができた。



復興隊のつどいへの参加

赤崎復興隊の面々とともに、今回の復興市の振り返りと今後の赤崎での町おこし活動をどのように行っていくかについて会議を行った。現地中学生やユースにも参加してもらい、今後に向けての前向きな意見や今回の開催を踏まえたアイデアを共有した。具体的には、9月により大規模な復興市の開催を行う方向で話が展開し、これからの活動に向けての熱が高まった。



3. 今後の展望

今回の訪問における目的は、コロナ禍を踏まえての赤崎復興市の再開支援、復興市開催を通じた町おこしの意義についての確認、地域活動を継続的に行う担い手の発見であった。今回赤崎復興市の開催を通して、赤崎に住んでいる方同士の交流が生まれ、現地の中学生やユースなどの若い世代がボランティアとしてともに地域行事の運営を行うことができた。復興市終了後の振り返りでは前向きな意見が多く見られ、このような地域行事の開催における意義を確認することができた。私たち自身も復興市の準備・運営を通し、地域活動の推進における多くの学びを得ることができた。

一方、赤崎では高齢化や若者不足などの課題は変わっておらず、継続的な地域活動の担い手については不安が残っている。我々のような遠方からのボランティア派遣に対する支援の動きも急速に弱くなっており、継続的かつ持続的な地域活動のためには地元の若い世代との協働は不可欠である。今後の活動においては、今回生まれた現地の中学生やユースとのつながりを生かしながら、長期的な目線で地域活動を行っていくための地盤を作り、担い手を育成していくことに焦点を向けることが必要であり、そのうえで地域に人々や未来に寄り添う活動をしていきたい。

神戸大学学生震災救援隊 活動報告

神戸大学学生震災救援隊 代表 西畑克俊

上野政志さんの講演会

1. 目的

今回の講演会の目的は阪神・淡路大震災を風化させないため、そして阪神・淡路大震災の伝承を通じて学生が地域と有機的に関わっていくことである。

2. 活動報告

活動内容としては講師の上野政志さんをお招きして2時間程度講演をしていただき、その後、地域の方3名と学生1名程度のグループを複数作りそのグループごとに上野政志さんの講演を踏まえてディスカッションを行った。

上野政志さんは、阪神・淡路大震災で娘の上野志乃さんを亡くされた方です。今回の講演では上野政志さんに娘を失った悲しみや苦悩を向き合い、その経験から生まれたメッセージを語ってくださった。参加者は上野政志さんの話に心を打たれ、震災について、生きることの大切さについて考える機会となりました。

グループディスカッションでは、上野政志さんの講演を踏まえて震災・生きることというテーマで話し合った。ディスカッションではおもに「震災時に経験した恐怖や不安」「生きる意味」「災害に対する準備や防災意識をどう保つか」「震災を乗り越えるためにどのような地域コミュニティを形成すればよいか」について の話題で議論された。ディスカッションの最後に各グループの代表者がディスカッション結果をまとめ発表を行った。発表では、それぞれのグループが共有した洞察や提案が述べられ、他の参加者との間で意見交換が行われた。

これらの活動により参加者はお互いお経験や考えを理解し合い、震災や生きることについて深く考える機会となった。そして、ディスカッションを通じて学生は震災から生き延びるためには地域コミュニティとの関係をより密に形成する必要があることを学んだ。

3. 今後の展望

今後、このイベントを通じて学生震災救援隊は震災継承イベントの継続開催、支援活動の強化を行う所存である。

震災継承イベントに関して上野政志さんの講演会やグループディスカッションを含む震災継承イベントを定期的に開催して、地域の住民や関係者に向けて、生きる力や周りの人と協力して困難を乗り越えるためのメッセージを発信し続ける。これにより、地域社会の結束や防災意識の向上を図る。

支援活動の強化に関して、上野政志さんの経験から得られた教訓を活かし、被災地や仮設住宅等での支援活動を強化する。具体的には、防災訓練の実施や災害対策の啓発活動、地域コミュニティの支援など、地域の安全と安心を守るための取り組みを推進します。

これらの取り組みを通じて、地域社会全体がより強く、安全で持続可能な未来に向けて歩みを進めていく。



グループディスカッションの時の写真

能登半島地震支援活動

1. 目的

今回は 2024 年 1 月 1 日に生じた能登半島地震に関して被害を受けられた方に学生が出来るボランティア活動を提供すること、自分たち以外の学生団体が能登半島地震に関して支援活動を行う動機付けを行う。また、この団体に所属する学生たちが継続支援の必要性を感じてもらうため。

2. 活動内容

震災が起きた翌日から神戸大学の最寄り駅等で募金活動を行った。集まった募金は現地の NPO、自治体、支援物資の調達等に使う予定である。また、現地の方と現地に滞在している NGO の方と連絡を取り合い現地で必要な活動と支援物資の把握を行った。第一回の派遣活動は 1/20・21 に行い、主に石川県七尾市を拠点にして活動を行った。1 月の派遣活動ではあらかじめニーズを把握しておいたカイロや汗拭きシートなどの支援物資を提供した。現地では避難所で避難をされている方に足湯を提供した。足湯は現地の方と学生の交流の場として上手く機能して現地支援のニーズを把握することが出来た。その他に被災された住宅の片付け支援も行った。2 チームに分かれて 1 つのチームは輪島市の市営住宅に住まれている方のお宅に訪問してその方の住宅の掃除などを行った。もう 1 つのチームは、七尾市で家の内壁を取り外す作業を手伝いました。現地では高齢の被災者の方が多く、家の片付けを行うのに相当時間がかかっているようであった。1/20・21 の段階では現地でのボランティア活動は規制されているようであったが、実際に現地で活動してみると圧倒的にマンパワーが足りないのでボランティアは必要であると現地の方々はおっしゃっていた。現地ではまだまだ支援が必要であると思われるので我々学生震災救援隊も継続して支援活動を行う必要があると感じた。

3. 今後の展望

震災の支援は震災が起きてから長期的に必要な。私たちは今回の 1 月派遣にとどまらず、今後継続して団体の行事として派遣活動を行う。具体的には仮設住宅に入られた方のコミュニティ支援や、交流イベントの開催を行う。我々の団体の前例として東日本大震災の被災地である宮城県山元町・東日本豪雨の被災地である宮城県丸森町で仮設住宅に入られた方のコミュニティ支援や、交流イベントの開催を年に 2 回継続して行っている。そのため、七尾市等での継続支援も円滑に行えるだろう。



家の内壁を破壊している様子



住宅の清掃活動をしている様子



足湯をしている様子

UR グリーンヒルズ六甲における社会的交流促進活動

団体名：地域交流創出の会「なごぶい」

代表：人間発達学研究科博士3年 KIM NAHYUN

【活動の経緯】

六甲台第一キャンパスに隣接するUR団地『グリーンヒルズ六甲』（以下、六甲団地）では、身寄りのない高齢者が近年増加し、社会的孤立や孤独死のリスクが懸念されている。そこで、本活動では前年度に引き続き、高齢者を中心とした団地住民が参加しやすいイベントを企画・実施することで、地域住民同士の交流や学生との多世代交流、または生涯教育を促進する機会を提供することを目指した。日本の学生に加え韓国、中国、タイの留学生のメンバーの特徴・スキルを活かすべく、「異文化理解・交流」に特に注力した。

【活動内容】

地域交流創出の会「なごぶい」では活動メンバーの特徴やスキルを活かしてイベントを企画した。特に、本年度のメンバーには韓国、中国、タイの留学生が含まれていたことから、日本を含めた4ヶ国の文化を知りながら交流を行う「異文化を通じた交流と学び」というテーマに取り組んだ。

イベントに先立ち、六甲団地を定期的に訪問して地域住民との関係形成とともに、地域の関心事を把握して皆さんが参加しやすいイベントの企画を図った。六甲団地では、地域ボランティアグループである「YY(わいわい)カフェ」様が団地住民の交流を兼ねて月に一回の頻度でお茶会を開催されていた。このお茶会に活動メンバーが継続的に参加し交流を重ねることで、団地住民や運営の方々顔見知りになり、徐々に信頼関係を築けるように努めた。

さらに、YYカフェ様のお茶会へ参加する中で、地域住民にとってなじみのあるイベントであるお茶会をベースにして、異文化を通じた交流や学びを促進できないかと考えた。そこで、「なごぶい」のメンバーはタイ・韓国・中国・日本のアジア各国出身者から構成されているため、このようなグループの多国籍性を活かして「YYカフェ」様のお茶会を発展させた形で「アジアティーパーティ」を企画した。本企画の趣旨は、アジア各国のお茶菓子の試食や異文化について学ぶこととともに、六甲団地住民と学生、また住民同士の交流の促進を試みることであった。この企画については、「YYカフェ」を運営する六甲団地の地域ボランティアグループの方々にも説明を行い、協力をお願いしたところ、快く共催として加わって頂いた。

「ワイがやカレッジ」神戸大学学生企画
共催:グリーンヒルズ六甲「YYカフェ」

Asian Tea Party

タイ・中国・韓国・日本の大学生とお茶しながら
アジア文化にちょっと触れてみませんか?

12月10日(日) 14:00~16:00
(開場 13:40)

グリーンヒルズ六甲団地 集会所

- 中国茶&タイ・韓国のお菓子
- アジア文化の紹介
- 15:00~ミニゲーム
- お子様用のジュースもご用意

定員30名
先着順

参加無料

申し込み先: 神戸大学片桐恵子教授事務所 (〒650-8080 神戸市灘区片桐4-1-1) 078-764-2111

お問い合わせ先: 神戸大学片桐恵子教授事務所 (〒650-8080 神戸市灘区片桐4-1-1) 078-764-2111
神戸大学学生グループ「地域交流創出の会なごぶい」 nagobui2020@gmail.com

以下の「参加申し込み書」は必要事項を記入の上、管理ヤード事務所のポストに投函してください。
参加の可否は11月15日までメールで確認、お断りの旨は必ずお知らせいたします。

参加申込書 参加申込書(11月15日迄)

名前:	姓	二名	名	フリガナ	フリガナ	フリガナ	フリガナ
参加人数	名	姓	フリガナ	フリガナ	フリガナ	フリガナ	フリガナ

その際に神戸大学片桐恵子教授から、先生の研究プロジェクトである「ワイがやカレッジ」の学生企画として行うことについての提案があり、その一環として行うことにした。以上の方針の下で、民生委員様、

UR 様、地域住民様から多数のご助言を頂戴しながらイベント内容を構成し、イベントの告知として2回に渡る団地全戸へのポスティングを行った。

2023年12月10日「アジアティーパーティー」を六甲団地にて開催した。応募者数は定員の30名には届かなかったものの22名にも上り、5歳から80代までの幅広く年齢層の参加における多世代交流の場となった。参加者は4～5人で構成されたグループに割り当て、グループアクティビティなどを実施することで初めて参加された方でも話しやすいようにした。イベントの内容としては、各国出身のメンバーによる人口、面積、高齢化率などの母国の紹介（中国、タイ、韓国）とアジア各国のお茶菓子の食文化体験（1時間）、景品付きのアジア圏文化クイズ大会（30分）、学生や住民を含めた参加者全体の交流（30分）の順に進行し、盛況に終わった。本内容においては、中国はお茶4種類の飲み比べ、茶芸の演示、中国や韓国の伝統衣装の着た学生によるおもてなしなどを実施し、学びも重要であるが、参加して楽しいと感じられるような内容を構成した。



中国の茶芸



タイの紹介



クイズ大会



真剣に聞く皆さん



最後はみんなで記念写真

【イベントへの評価】

イベント終了後にアンケートを実施したところ、同じグループメンバーとの交流ができたか」という項目に「ややそう思う・そう思う (n=13)」、イベントが良かったかにおいても「ややそう思う・そう思う (n=15)」という肯定的な結果が回答者全員から得られた。評価の内容については、自由記述において“楽しかった”という【充足感】やグループの人と“わいわいおしゃべり”できたという【人との交流】、“他のアジアの国々の文化を知ることができた”という【学び】に関するご感想を頂いた。このように参加者である住民同士が交流して互いに面識を深めることで、ゆるい関係性が形成されて社会的孤立や孤独死のリスクを低減させることが期待される。加えて、本イベントでは参加者と神戸大学生との交流も盛んで、参加者の年代も幅広かったことから、多世代交流が実現できたことは他の世代についての理解を深めることが期待される。

【今後の展望】

今後とも六甲団地の住民の交流を促進するイベントを考案・実施し、引き続き地域のゆるいつながりの形成に努めていきたい。その際に、住民の皆さんからイベントの実施の理解が得られるように、引き続き六甲団地内の住民団体等と連携の強化を進めていきたい。

神戸大学 < TEAM NADA > 「第 21 回 灘・夢ナリエ」あかりワークショップ活動

工学研究科建築学専攻 教授 槻橋修

■背景：

「灘・夢ナリエ」は、当初「灘百選まつり・あかりの盆」として、阪神・淡路大震災（1995年）の8年後の2003年に初開催された、神戸市灘区の地域住民主体の盆踊りイベントである。当初より主催は「実行委員会」形式を採り、その実行委員の一員として「灘区役所」も含まれるが、基本的には「灘百選の会」「灘区連合婦人会（赤十字奉仕団）」等々の地域の様々な任意団体の連合体によって、運営・開催されてきた。当初は灘区都賀川沿いで開催されていたが、震災後10年を機に「六甲道南公園」に会場を移し、会の名称も「灘・夢ナリエ」と改称された。この「六甲道南公園」は、震災後の六甲道駅南地区震災復興市街地再開発事業によって整備されたもので、その周囲は再開発後の大規模集合住宅群や灘区役所建物、地区公民館なども建ち並ぶ、地域の中核となるオープンスペースである。「灘・夢ナリエ」の主旨は、震災とその後10年にわたる再開発事業を経て多くの新規住民を含むこの地域において、「誰もが参加できる盆踊りを開催し、灘の魅力の再発見と世代・文化を超えた交流の場の実現を目指（す）」というものである。

■経緯：

本年度の「第21回 灘・夢ナリエ」は、9月16日（土）に開催が予定され、7月4日（火）に本学建築学専攻槻橋・浅井研究室に対して当イベントへの参加の打診があった。灘区地域活動支援コーディネーターの坂本友里恵氏（コンサルタント mottif lab）、および、灘区役所の総務部地域協働課の千田ひとみ氏、丸山野諒氏からの打診内容は、具体的には、当日の18:00開始の盆踊りに先立って設定された「夕方遊ぼう！灘っ子（15:00～17:30）」イベントにおける「あかりワークショップ」への参加依頼で、これは盆踊りに参加する子供連れ世帯に向けて18:00までの時間を過ごすためのイベント（出店）企画である。また、将来的には、「灘・夢ナリエ」全体の企画・運営に対する学生の持続的な協力の要請も含まれていた。この背景には、現状の運営主体の高齢化の危惧と新規若年世帯のより多くの参加を目指す意図があることを伺った。この依頼を受け、研究室在籍学生を中心に学生団体として「神戸大学 <TEAM NADA> 代表：北脇知花（本学修士課程1年）」が組織され、ワークショップの企画・会場インスタレーション・デザインが進められた。

■ワークショップの企画と準備：

インスタレーションとして、木製「フレーム」を多数用意し、その一つのフレーム内側に子供達が描画着色した紙製の行燈を展示し、危険とならない高さまでフレームを積み上げて結束バンドで固定し（ワークショップでは「タワー」と称した）、電池式LEDライトで照らす、という企画が進められた。行燈のデザインには本学建築学専攻（光環境計画）の鈴木広隆教授の技術指導を仰ぎ、フレームのデザインは槻橋の指導のもとに進められた。

フレームの実際の製作には、技術指導と作業場所の確保の必要があったため、先述の坂本氏に相談し、地域地元の有意の工務店として、株式会社戎工務店（神戸市灘区岩屋中町1-2-6）を紹介いただいた。また、戎工務店より、木材加工販売のSHARE WOODS（神戸市灘区王子町1-4-8）を紹介いただき、フレームの材料となる木材の調達と製材加工をお願いした。戎工務店の戎健太郎氏、戎武志氏、および、SHARE WOODSの山崎正夫氏からの技術指導を仰いで、TEAM NADAのメンバーは戎工務店の作業場をお借りし、9月9日から12日にかけて、フレーム塗装・組み立て作業を行った。組み立て後のフレーム約六十個の乾燥・保管場所も同作業場をお借りすることができた。同時期に、別のメンバーは、鈴木教授のご指導に

基づいて行燈用の紙（画用紙）に「折り目」をつける作業を行い、電池式 LED ライトの調達や他の会場展示物・配布物・各種備品の準備を行なった。灘区役所の千田氏、丸山野氏に作業進捗状況と実際のインスタレーションのサイズや個数などを逐次報告し、平面的に広く展開可能で早い時間帯に暗くなる（西日の届きにくい）会場の割り当てなどを調整していただいた。

コンセプト
「行燈」と「木製フレーム」を使った
あかりワークショップ

こどもたちができること…
行燈を彩る ▶ フレームに飾り付ける ▶ あかりを灯す

当日配布した「行燈の作り方」

料金
200円（紙代として）

準備物
紙 …… 60枚
フレーム …… 60個
電池式 LED ライト …… 60個

来場者（本ブースに限定）
参加した子供 60人
親御さんとあわせて 120人程度

「木製フレーム」とは？

組み立て

12本の角材
(4,860 cm)

解体

積み重ねると…

本イベント以外にも、花壇や椅子として活用可能
それ自体も展示物の一部になれる

図1 フレームの概要と「行燈の作り方」

制作過程

材料の塗装

戎工務店さんのアトリエをお借りしてシェアウッズさんがカットしてくださった六甲の木材に刷毛で着色していく。

ビス穴あけ・組み立て

戎工務店、シェアウッズ、灘区の皆様の力をお借りして、総員 15 人で組み立てた。歪みが無いよう調整しつつビスを打ち込み、フレームを大量生産。積み上げても安定感があり、人が座れるくらいの強度を実現。

当日

フレーム同士を結束バンドで固定して(高さ限度は4つ)、立体的に積んでいきます。座面を張ればベンチに、、、プランターとしても活用できます!

当日

子供たちが絵を描いてデザインした行燈にライトを取付け、行燈一つ一つが見えるようにその場でフレームを組み、飾っていく。

図2 フレームの製作過程

■ワークショップ：

当日9月16日は12:00頃よりフレームの搬入を開始した。搬入も戎工務店に全面的にご協力いただいた。イベント開始の15:00までには、一旦のフレーム設置は終わることができ、時間進行で空地に徐々にフレームが展開していくこととした。開始当初は「何をやるのかよくわからない」という雰囲気、様子見の親子連れも多かったが、実際の行燈ができ、ライトが灯され、「タワー」が建っていき、あたりが暗くなるにつれ、参加する子供は増えていき、最終的には準備した60枚の行燈用の画用紙はすべて「捌けて」、むしろ準備枚数が不足することになった。盆踊り開始時18:00には、カラフルで「幻想的な」シーンが演出できた。「自分の作品」を背景に「自撮り」する親子連れも多く見られた。行燈を作った子供へ「自分の作品」を返却する手順などの詳細を詰めていなかったため、若干の混乱も見られた。参加した親子連れへのアンケートも実施し（Googleフォームとアンケート用紙による、25件の回答があった）、「子供が手を動かし、形に残せる」方式は概ね好評であった。イベント終了後に撤収・搬出したフレームは、槻橋浅井研究室・灘区役所・戎工務店に分有し、保管・活用することとした。

以上の活動をA3両面刷り中折のリーフレットにまとめ、2024年2月21日（水）に灘区役所において開催された「第21回 灘・夢ナリエ」実行委員会報告会で、報告した。

昼 あかりワークショップ



学生の声

子供向けのワークショップでしたが、夜の点灯時には大人の方も撮影しに訪れていました!!

夜 明り展示



図3 ワークショップの様子

■今後の展望：

本年度の活動は、あくまでも「灘・夢ナリエ」という参加人数5,000人規模のイベントの一端を担うにとどまるものではあったが、若年世帯、つまり年少の子供たちとその保護者たちにとっての魅力的なイベント像のひとつを示すことはできたと考えている。また、地域の有意な事業者や地区行政と大学・学生との良好で有効な連携関係を築くこともできた。今後は、この「神戸大学のお膝下」で展開する地域住民主体の稀有なイベントへの関与を深め、より実効的なエリアマネジメントへの学生の参画方法を模索していきたい。

地域の生物多様性を学ぼう！ 環境 DNA 分析体験とワークショップ活動

環境 DNA × 環境教育チーム 代表：修士 2 年 木谷亮太

背景と目的

地域に則した生物多様性保全を実施するためには、市民が抱く生物多様性への興味関心を高め、保全への理解と協力を得ていく必要がある。このためには環境教育が有効であると考えられ、その方法として環境 DNA 分析の活用が挙げられる。環境中に存在する DNA (環境 DNA) から生息種を推定できるこの手法は、野外でのプロセスが採水環境水のサンプリングのみと簡便であるため、市民とともに地域の生物相を調査するような環境教育へ活用できる可能性がある。本団体では全国の高校と協力し、環境 DNA 分析を高校生に紹介、体験させるような環境教育を実施することで、生徒が抱く生物多様性や環境保全に対する興味関心を向上させることを目的として活動を行っている。

令和 5 年度の活動

本年度は兵庫県立龍野高校、岐阜県立飛騨神岡高校、岐阜県立恵那高校、静岡県立焼津中央高校の計 4 校から協力を得ることで環境教育を実施することができた。龍野高校では休日に生徒を募ることで実施し、飛騨神岡高校、恵那高校、焼津中央高校では平日の授業時間を利用して実施をした。環境教育は 2 回構成で計画した。1 回目は、生態系や環境 DNA に関する授業 (図 1) を生徒に実施した後、高校付近の河川へ移動し、環境 DNA 分析に必要な採水作業を生徒に体験させた (図 2)。生徒が採水したサンプルから環境 DNA 分析によって生息する魚類を網羅的に検出し、結果をリストにまとめた。この魚類リストを 2 回目の環境教育で生徒に共有することで、地域の生物多様性や生態系サービスについて生徒同士で議論し合うグループワーク活動を実施した (図 3)。



図 1 授業のようす



図 2 採水体験のようす



図 3 グループワークのようす

活動の効果

活動の前、採水作業後、最後にアンケート調査を実施した結果、生徒たちは環境教育を通して、生物への好き嫌い、生物多様性への関心、生態系サービス、ディサービスへの関心を向上させることが明らかとなった。1日目に実施した環境DNA分析の説明と採水の実施だけでも環境教育としての効果が生じ、それに併せてグループワークを実施することでより効果が増すことも示された。

本活動を通して顕著に向上したアンケート項目として、高校近くの河川にたくさんの種類の生き物がいると思うかを聞いた項目が挙げられる(図4)。このことから、本活動は地域の生物多様性への理解を特に深めることが示唆された。加えて、生態系を守るために寄付や活動をしたいかを問う項目も顕著な向上が確認できた。このことから本活動は地域の生物多様性への理解を深めるだけでなく、それを保全するための行動も促進していることが示唆された。研究者と市民が協力して保全活動を実施するような市民科学の重要性が議論される昨今において、生態系保全への参加を市民に促した本活動は重要な意義を持つだろう。

「高校近くの河川にはたくさんの種類の生き物がいる」

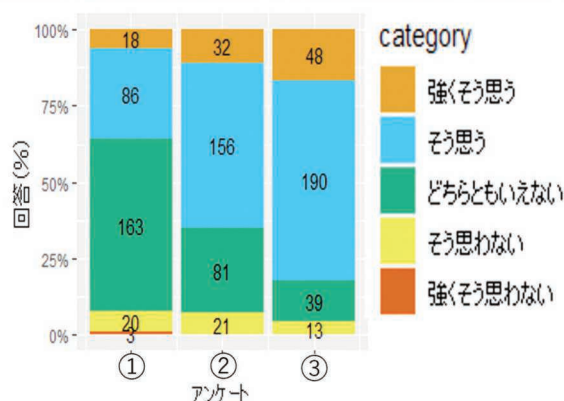


図4 アンケート結果
①②③はそれぞれ活動前、採水作業後、活動後のアンケート結果を示す。

今後の展望

引き続き高校での活動を続けていく。グループワークでは生徒が採水したサンプルから得られたデータのみならず、今年度で得られた他県のデータを比較対象として提示することで、地域の多様性への理解促進を目指す。

本活動をより幅広い年齢層の市民を対象として実施し、生物多様性や生態系サービスの重要性を一般市民全体で向上させていく。その場合は本年度の龍野高校のように参加者を募って実施することが予測されるが、本年度の活動では生徒数が少数であったため、希望制における環境教育の有意な効果は示すことができなかった。より多くの生徒に対して希望制の活動を実施することで、その効果を明らかにしていきたい。

これらに加えて、年齢層の違いによって環境DNA分析を用いた環境教育の効果に違いがあるのか検証すること、どの年齢層であっても効果が得られる(あるいは、それぞれの年齢層に特化して効果が得られる)ように環境教育の内容を推敲することも行っていく。

「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業

環境サークル「えこふる」 国際人間科学部環境共生学科 2年
小城戸 愉子 (代表)、栗山 結衣

1. 「えこふる」について

2019年度に環境学入門講座を受講した学生有志が立ち上げたサークルである。神戸大生や地域の人々の環境意識を高め、日常生活でもできることから始めてもらおうと啓発活動に取り組んでいる。E-learningコンテンツ（「食品ロスを減らせ!」、「海洋プラスチックごみを減らせ!」）の制作など、環境教育を中心に活動を行っている。

2. 環境かるたを用いた出前授業の実施

今年度は、学生地域アクションプラン補助金を活用し、神戸市内の児童館（本庄児童館、住之江児童館）で「えこふる」オリジナルの「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業を実施した。内容は、食品ロスに関する10分程度の講義と、かるた遊びである。かるたは、食品や食品ロスに関連するクイズが書かれた文字札、答えの絵札で構成されている。当補助金を活用し、業者に依頼して19セット製作した。本来手作業で作成すると1セットだけでも2時間近くかかるところ、大幅に時間短縮が可能となり、この時間を出前授業の内容の改善などに充当できた。この出前授業は、単なる授業ではなくかるたを取り入れることで、遊びながらも、食べ物を大切にすることや環境保全の重要性に気づいてもらうことを目的としている。



(環境かるた)

本庄児童館での実施

食品ロスとは何かについて、年の離れた小学生に伝えることには、難しい内容をいかにわかりやすく、なるべく正確に伝えるかという課題がある。それに対処するため、児童館職員の方との打ち合わせの内容をもとに、わかりやすいスライドの作成に努めた。

例えば、できるだけイラストや写真で説明するようにしたり、小学生に馴染みのない言葉は使わないようにしたり、途中でクイズを交えたりした。また、子どもたちが問題を日常の一部としてより身近に感じられるよう、近所でフードドライブを実施している店舗を紹介した。子ども目線の内容やクイズ形式など、双方向的な学習となるよう内容・形式を工夫したことで、子ども達も関心を示して話を聞いている様子が見られた。

ただ、食品ロスが地球温暖化の一因にもなっていることを説明した際、やはり子ども達にとって内容の理解が困難なようで、集中が途切れている様子が見られた。しかし、食品ロスと地球温暖化の関連性は、問題の多面性・複雑性を理解するためには必要なことである。子ども達が初めから終わりまで楽しく学べるような出前授業をどのように作るべきか、あるいはそもそもそういった複雑さを小学生の段階で理解してもらうことを目的とする必要性はないのか、考えさせられた。

実際の様子



(食品ロスに関する講義)



(環境かるた遊び：本庄児童館)



(食品ロスに関する講義)



(環境かるた遊び：住之江児童館)



3. 事業の効果

本庄児童館で行った児童へのアンケートの回答を一部紹介する。3年生の児童は、これから給食をなるべく残さないようにしたいと、4年生の児童は食品ロスについてもったいないと感じたと記入してくれていた。児童の感想から、食品ロスがどのような問題であるのかについてある程度理解してもらうことができたと考えられる。

また、出前授業終了後に、数人の児童達がもう一度かるたをしたいということで二回目を実施した。二回目の時点で早くもほとんどの読み札を覚えていたため、札をとる速度が格段に上がっていた。内容の記憶が必ずしも理解と一致するわけではないが、食品ロスに関する知識の書いてある文を覚えることは、問題について「知る」大きな一歩になり得ると考える。

さらに、児童館の先生からも、かるたの内容が面白く、また勉強になるという言葉をいただいた。このことから、かるたを用いた小学生への出前授業が、子ども達だけでなく関係する大人の方々の環境問題への気づきにもつながっているといえる。

4. 今後の活動の方向性

今後は、食品ロスに関する授業だけではなく、他の環境問題に関する授業も取り組みたい。前述したように、食品ロスとのつながりにおいて地球温暖化を説明するのではなく、一旦は地球温暖化にフォーカスした出前授業を実施するという方法も含めて、よりわかりやすく正確に伝えるための手段として検討している。

『こうべあいウィーク』での仙台市荒浜の魅力を伝える写真展開催

神戸大学持続的災害支援プロジェクト 松村奈桜

1. 背景

本事業は、現在の派遣先である宮城県仙台市荒浜の海辺の図書館の協力の下、普段は仙台市を中心に開催されている「海辺の写真展」をこうべまちづくり会館主催のイベント『あいウィーク』で実施したというものだ。『海辺の写真展 in 神戸 ～東日本大震災から13年、荒浜を撮り続ける～』というタイトルで展示を行った。実施の目的としては、同様に震災を経験した神戸市と仙台市を繋げることで、そして震災前後を通して変わらない荒浜の魅力をより多くの人に知ってもらうこと（伝承活動）の2点がある。荒浜という地域は東日本大震災で津波被害を受け災害危険区域に指定されており、震災以降居住が禁止されている。しかし、荒浜に愛着を持った人々が町に関わり続け復興を進めたという背景があり、“被災地、荒浜”ではなく私たちが活動する中で感じ取った“温かい町、荒浜”をアピールできるような展示を行った。

2. 事業内容

展示の準備については、写真展で展示する写真の選定と、その写真にまつわる思い出や情報を「海辺の図書館」の方からお話を伺うこと、展示方法の決定の3点を行った。写真の選定や写真の展示方法の決定については、“温かい町、荒浜”をアピールできるように、震災色が強い展示になりすぎないようにしたり、また「海辺の写真展」という名前のルーツをまた、展示の当日はシフト制で第2回の仙台派遣に参加した7人が展示の開設を行ったり、展示を見に来てくださった方との交流を行ったり運営を担った。

3. 効果・今後の展望

準備の段階では「海辺の写真展」の方からたくさんサポートして頂き、話し合いを行うことにより派遣先の方との交流を深めることができたのでよかった。また、「海辺の写真展」の方に伺って得た震災前の荒浜の話は、元々荒浜に住んでいた、もしくは関りがあった方にとっても貴重な情報であったようで、私たちの活動をととても喜んでくれた。これは伝承活動という点でも、貴重な資料を語り継いでいくという部分に関われたと感じる。展示の当日は、「海辺の図書館」や「荒浜」を知っている、もしくは行ってみようと言ってくださる方とたくさん出会えたのがなによりよかった。一つ感じた課題としては、『あいウィーク』というイベントには阪神淡路大震災に関心を持った方が多く来場しており、東日本大震災に関心を持った方が少ない印象があったことだ。次に写真展を開催する場合は、3.11に近いスケジュールで行うか、東日本大震災関連のイベントへの出店の検討が必要だと感じる。



令和5年度学生ボランティアサポート助成 灘チャレンジ実行委員会

灘チャレンジ実行委員会委員長 小柳 智久

【灘チャレンジ概要】

灘チャレンジは阪神淡路大震災が発生した当時に神戸大学の学生が地域に対して実施していたボランティア活動などの取り組みの1つで、震災の復興祭として6月4日に第1回が開催されたのを出発として、毎年学生が主体となって地域の方々と共に創り上げる祭りである。

【令和5年度活動内容】

令和5年度の灘チャレンジ（以下、灘チャレンジ2023）は9月17日に都賀川公園と灘区民ホールの1Fホールと会議室にて開催した。灘チャレンジ2023は「～これからのなだへ～」をスローガンとし、新型コロナウイルスで希薄となった地域のつながりを再度強くすることや、震災という出来事から得られるこれからの災害に対する備えを来場した人へ届けることを目指した。

灘チャレンジ2023では、ステージを設営し学生による企画の実施に加えて、地域で活動されている団体に出演していただいた。また、灘区を中心とした方々に会場内でリサイクルマーケットを設置していただいたり、学生と地域団体による模擬店出店をすることで、お祭りの魅力度を向上させ多くの方に来場してもらえるようにした。



ステージ



リサイクルマーケット



模擬店

これら魅力的な企画により多くの方に来場していただき、地域団体と住民の交流や防災展示や震災資料、都賀川水難事故資料に目を通していただけた。

【地域とのつながり】

灘チャレンジ2023の実施においては、灘区を中心とした計80店舗に協賛いただいた他、18の企業から協賛品を提供していただいた。また、模擬店出店していただいた16団体やその他地域の方々とは、開催までの期間にお集まりいただいて協議をするなど、地域とのつながりを構築・強化する取り組みを行っている。

地域密着型サークルにしき恋 令和5年度活動報告

代表 神戸大学農学部食料環境経済学コース 2回 萩原 司

1, 初めに

地域密着型サークルにしき恋は、主に神戸大学生で構成されたサークルであり、2013年に神戸大学農学部の授業である実践農学入門を前身として立ち上げられた。主に兵庫県丹波篠山市西紀南地区において農業ボランティア活動や丹波黒大豆の栽培及び販売等を行っている。2023年度3月時点で149名が在籍している。

2, 活動報告

2023年度は、農業ボランティアの活動を中心に、拠点の最寄り駅である無人駅の丹波大山駅を活性するためのオオヤマルシェの開催や、地域の小学生と交流するイベントの開催などを行った。総活動参加数としては、全体で1086回（内農業ボランティアの活動 741回）（※2023/4/1~2024/3/10）となっている。

また、丹波篠山市の魅力発信のために、丹波篠山の名産である黒大豆の栽培及び販売を行い、黒枝豆の時期（10月）は、オンライン・学内での販売に加え、新大阪駅でのマルシェまた神戸大学のホームカミングデーにおいて販売を行った。

黒豆期（12月）においてもオンラインでの販売と学内での販売を行い、今年は地域の方々の協力を受けて、黒豆をきな粉に加工して販売することにも挑戦させていただいた。

3, 展望

今年度はコロナの影響も大分少なくなってきたこともありコロナ期間に薄れていた地域との関わりをまた深く戻していけるように活動できたように思える。来年度以降も地域との関わりを絶やさず、さらなる地域への貢献を目指していきたい。



新大阪マルシェでの出店



黒豆期学内販売の様子

阪神・淡路大震災と東日本大震災の語り部・ボランティア活動 ～神戸と東北、2つの被災地を繋いで～

神戸大学ボランティアバスプロジェクト 中村莉央

【阪神・淡路大震災被災地、東日本大震災被災地の教訓の発信活動】

当団体は今年度4月より、阪神・淡路大震災激甚被災地である神戸市長田区（主に日吉町5丁目、旭若松地区）の住民さんに迎えていただき、「顔の見える日頃の関係性づくりが地域の防災力に繋がる」という考えのもと行われている地域行事に、地域づくりボランティアとして活動させていただいている。また、今年度はこれまでも繋がりがあった岩手県大槌町の郷土芸能団体の住民さんと新たに繋がることができ、団体の一員として迎えていただき、郷土芸能支援活動を行った。

そのような活動を1年間続ける中で、地域づくりボランティア活動に加えて、地域の住民さんに教えていただいたことや学んだことを「震災伝承活動」として取り組みたいと考え、今年度は発信活動や語り部として活動する方との交流活動を段階的に行ってきた。今回は、中でも特筆すべき、今年度2月末に宮城県で行った現地活動に絞って報告する。

【東日本大震災被災地で語り部活動を行う東北大学学生との交流】

団体の13年間の活動を広く発信し、また、語り部活動を行う実践者の方々と議論し互いの活動を発展させるため、2月末に開催された「第9回全国被災地語り部シンポジウム in 東北」に参加、分科会への登壇を行った。パネル展示や分科会でのセッションは多くの方に見ていただくことができた。

その活動にあわせて、宮城県石巻市にある大川小学校にて、大川小学校での当時の出来事を語り部として伝えるボランティア活動を行っている、東北大学SCRUMの学生9名の語り部プログラムへの参加および異災地で活動する大学生同士での交流活動を行った。語り部を行う学生は、ほとんどが震災を経験していない学生だといい、「自分達が語っているのか不安があったが、自分達にしか伝えられないこともある」と考えており、日々の活動に取り組んでいる話を聞くことができた。同じ年代で、活動を行う上での悩みや葛藤などの共通点をシェアしたり、異災地同士の相違点（繋がりはどう作っているか、活動はどのように行っているかなど）をシェアすることで、互いに今行っている活動の輪郭と、団体のこれからの目標や課題が明確になるといった学びもあった。



「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業 令和5年度学生ボランティアサポート経費助成 活動報告書

環境サークル「えこふる」 小城戸愉子 栗山結衣

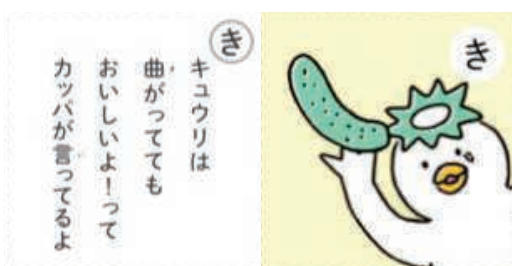
1. 活動の背景

当サークルは設立以来、神戸大学生や地域の人々の環境問題に対する意識を高め、日常生活でできることから始めてもらうための啓発活動に取り組むことを目的として環境教育を中心に活動してきた。昨年度からは、地域の子どもたちが環境問題について楽しく学べる機会を作るために、独自に考案した「環境かるた」食品ロス ver. を用いた出前授業を実施している。今年度は更に活動に力を入れ、河原児童館と鶴甲児童館に協力を頂き出前授業を実施した。

2. 活動目的と概要

えこふるのメンバーと有志の神戸大学生が、「環境かるた」食品ロス ver. と神戸市環境局より譲渡いただいた「食品ロスNOかるた」を用いた出前授業を実施した。

本活動の目的は、子ども達に環境問題に興味・関心を持ってもらうこと、そして子ども達自らが環境問題の対策に向けて行動に移すきっかけをつくることである。



鶴甲児童館では、六甲山の子運営の子どもの居場所づくり事業「山の子ベースキャンプ」実施時間を利用していただいた。内容としては、①食品ロスに関する10分程度の講義：クイズや写真を用いることに加えて、かるたの内容を踏まえることで、その後に行うかるた遊びで食品ロスについての知識がより定着できるものになっている。②かるた遊び：低学年と高学年の児童に分けて実施し、低学年では文字数が少なく内容が比較的平易である「神戸市食品ロスNOかるた」を、高学年では「環境かるた」を使用した。③授業後：食品ロスについての理解をより深められるよう「環境かるた」を譲渡した。



3. 活動の効果

かるたやクイズを用いた参加型の講義によって、終始楽し気な雰囲気では学ぶことができていた。また子ども達は2回戦、3回戦と繰り返しかるたに取り組み、徐々に読む札を記憶していった子ども達は札を取る速度が格段に上がっていった。こうした遊びを通して、食品ロスという問題を理解するきっかけになったのではないかと考える。

4. 今後の展望

出前授業に関しては、食品ロスだけではなくごみ問題など他の環境問題に焦点を当てて実施することを検討している。また地域との連携と同時に学内との連携にも取り組み、学生を対象にした環境教育や、環境報告書、環境マネジメントなどの神戸大学全体での環境保全活動を実施していきたいと考えている。

丹波篠山市城南地区における多世代交流拠点づくりの活動

多世代交流拠点サークル Luonto 2023 年代表 長友陽奈

1. 背景

多世代交流拠点サークル Luonto は、丹波篠山市城南地区で活動しています。城南地区は、比較的に子どもが多いものの、公園や親が一息つける場所が少ないとの声もあり、地域全体で子育てをサポートできるようなまちづくりへの取り組みが地域団体によって行われています。Luonto は、地域団体である、小枕の一般社団法人・アグリステーション丹波ささやまの一室をお借りし、子どもも地域のご年配の方々も気軽に足を運べ、地域住民が老若男女問わず集える場所として、学生カフェの開設を目標に準備を進めてきました。まずは学生一子育て世代、学生一地域の方の間での関係性構築に向け、2023 年はイベント企画を中心に活動してきました。子にも親にも息抜きとなるような場所づくり、ご年配層の方の生きがい創出として、町の活性化に少しでもお手伝い出来たらと考えています。

2. 事業内容

イベント企画やボランティア業務が主なため、活動内容は毎回変わります。今年度は、城南地区の風土を生かしたイベント企画に取り組みました。放置竹林を活用し、学生自ら竹器に加工し、その竹器を用いて子ども向けにカレー調理のイベントを開催したり、自ら竹を加工して流しそうめんイベントを実施したり、子ども向けに寺子屋イベントを企画したり、冬には柚子を活用したジャムづくりワークショップを開催するなどをしました。地域の自然を感じつつ、特に子育て世代に楽しんでもらえるよう心掛けてイベントを企画しました。その傍ら、アグリステーション丹波ささやまにて、農作業ボランティアや子育て世代支援イベント「地域食堂」へのボランティア参加を行いました。

3. 効果と今後の展望

地域の子ども向けのイベント企画・イベント参加が多かったことで、地元の子どもたちと仲良くなることのできたと考えています。学生と顔見知りになり、通常活動の際に遊びに来てくれる子どもも見受けられました。2023 年度に企画したイベントに関しては、今後規模を広げながらも継続して開いていく所存です。また、2023 年度は、地域の方との交流機会が比較的少なかったため、年配層の方に楽しんでもらえるようなイベントも増やしつつ、学生カフェの本格的な運営を開始していく予定です。



震災救援隊の名前入り作業着を着る 自他共に安全な災害復興ボランティア

神戸大学学生震災救援隊 西畑克俊

経緯と概要

我々神戸大学学生震災救援隊には自分たちの団体名が記載された制服を所持していなかった。そのため、能登半島などで派遣活動をしている時（特に他大学の学生ボランティア団体と活動している時）と一緒に活動していただいている受け入れボランティア団体の方がどこに学生震災救援隊の隊員がいるのかをすぐに認識することが難しくまた、学生震災救援隊のメンバー同士もすぐに隊員全員の所在を把握することが困難であった。そのため、学生震災救援隊の隊員をすぐに識別するために制服を作成することにした。我々は震災や水害があった被災地で主に活動することが多いため作業着を制服にすることにした。

作業着作成のねらいと成果

作業着の作成のねらいは4つあり、1つ目が一体感の醸成、2つ目が責任感の醸成、3つ目が安心感の提供である。

1つ目の一体感の醸成は作業着を着用することで、団体内のメンバーが一体感を持つようになることが見込まれる。また、同じ作業着を着用することで、周囲からも素早く学生震災救援隊の隊員であることを認識してもらえるようになると考えられる。

2つ目の責任感の醸成は作業着に「神戸大学学生震災救援隊」と名前が記載されているとメンバーは行動に責任をもって活動することが出来る。

3つ目の安心感の提供は初めて派遣に参加するメンバーにとって、適切な服装を選ぶ場合が難しいことがある。その時に団体の公認の制服があることでメンバーが服装に悩むことが無く安心感を与えることが出来る。

成果

この作業着は3/29-31に我々学生震災救援隊が石川県七尾市で行った支援活動で使用した。

現地での活動内容は1日目に家屋の片付けと分別（燃えるゴミ、木材、金属、家電、ガラスなど）を行った。2日目は二手に分かれて、1日目のお宅のゴミ出しと、物資の仕分けを行った。3日目は被災した家屋にて、雨漏りでカビが生えてしまった畳の処分や掃除、納屋の解体作業などを行った。

現地では作業着を着ることで周りのご支援させていただく被災者の方に神戸大学の学生震災救援隊という団体の学生が支援しているということを容易に認識してもらうことが出来た。また、学生にとっても神戸大学学生震災救援隊と名乗って活動しているため、責任感をもって現地活動に励むことが出来た。さらに、神戸大学学生震災救援隊と書いた制服を着て活動しているので、現地の方にどこの何しに来た団体かが瞬時に理解していただけるので現地の方に安心を与えることが出来た。



図1 作業着を着ての活動1

今後の展望

作業着を我々の活動で制服として利用し、主に派遣活動などで自分自身が神戸大学の学生であること自覚してもらいながら活動するために利用する。また、学生がボランティア活動を行うとき及び災害が起きた地域の支援活動を行うときに「学生震災救援隊」と明記された作業着をきて活動を行うことでどこの誰が支援に来たということを分かってもらえるようにする。



図2 作業着を着ての活動2



図3 作業着を着ての活動3

神戸大学ボランティアバスプロジェクト（2023年8月実施） 第59次派遣活動報告 ～岩手県での郷土芸能支援活動と震災伝承のための学び～

国際人間科学部 4年 井上光起

【浪板大神楽の一員としての活動】

浪板大神楽の方とは初めての交流となりましたが、温かく迎えてくださいました。今回は大神楽の一員として参加する、ということで舞（甚句）や太鼓のたたき方などを覚えることが必要でした。そのため、現地で活動を行う前に、何度かビデオ電話で交流をしたり、オンラインで練習を行ったりしました。

本番は、前夜祭にあたる宵宮、本祭の2日間でした。宵宮では夜に天照御祖神社にて甚句と獅子舞を披露しました。私たちは甚句を舞いました。本祭では、朝の6:30に開始し、浪板地区から吉里吉里地区までを練り歩きました。各所で甚句や獅子舞を演舞したり、他の郷土芸能団体の演舞を見たりしながら約20km歩き、浪板大神楽としてのすべての予定を終えたのは19:00頃でした。炎天下での長時間の活動となり、体力的にもかなり大変でしたが、郷土芸能を担う一員として団体の内部で活動したことで、地域と一体となる経験ができました。「甚句はとても綺麗だった」「また来年も絶対来て」と大神楽の皆さんからたくさん嬉しいお言葉をいただき、2024年3月現在もメッセージで来年度の連絡を取り合う関係性となっています。



【震災の学び・震災伝承への取り組み】

震災伝承に関する活動として、石巻市の旧大川小学校（大川伝承の会 佐藤敏郎さん）、南三陸町の民間震災遺構 高野会館（阿部長商店ホテル観洋の語り部バス）、気仙沼市の気仙沼向洋高校（気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館 熊谷さん）での語り部プログラムに参加しました。また、釜石市では大槌町まちおこし協力隊の北浦さんのご協力でまち歩きを行いました。ただ説明文を読んで震災遺構を見学するのではなく、その当時を知る人から直接お話を聞くことができるのは貴重な経験でした。自分たちが積極的に質問することで相互的な語り部になりました。

なお、帰還後には学内で活動報告会および写真展・企画展を行いました。郷土芸能と防災に関して学んだこと、調べたことをまとめて展示しました。来てくれた方には、語り部のように自分たちの口で説明し、来場の方からは「お祭りは大変だろうけど楽しそう」「ニュースで見たことをここまで詳しく知らなかった」などと言っていただきました。

【おわりに】

東北での活動を昨年度で終えたものの、新たなつながりによって引き続き岩手県大槌町、釜石市で活動を行うことができました。今後も浪板大神楽の皆さんとは交流を続けてまいります。また、これからも震災について学びを深めていきます。自分たちが学んだことを「防災」の一環として、語り継いでいく活動にもつなげていきたいと考えております。

宮城県山元町桜塚団地における災害ボランティア活動

神戸大学学生震災救援隊 常楽瑛歩

1. 経緯と概要

救援隊では、東日本大震災の発災後から現地でのボランティア活動を行っており、その過程で宮城県亶理郡山元町の桜塚団地でのサロン会などの活動が継続されてきた。コロナ禍においてもオンラインでのお話会を開催して交流を続け、2022年5月から対面でのサロン会も再開した。その中で、被災地の方々と継続的につながり、ソフト面の支援をすることの必要性を再確認していった。

今回の活動は3月3日（日）から3月5日（火）に救援隊の学生7人で実施した。3日は学生主体のサロン会を行った。4日は桜塚地区自治会主体の自由サロンのお手伝いと自治会の作業のお手伝いを行った後、台風19号の被害を受けた丸森町へ行き、伝承活動を行っておられる方を訪問し、水害と防災についての学習をさせていただいた。さらにこの日には、2022年5月に家屋のお片付けをお手伝いした、在宅被災者の方も訪問した。5日には、東日本大震災の震災遺構門脇小学校、大川小学校にて災害学習を行った。

2. 活動のねらいと成果

【神戸大学生主体のサロン会】

〈ねらい〉

「サロン会」を行うことで、住民同士が集まる場や、住民と若者世代との交流を通じて、悩みを吐き出す場や楽しくお話する場を創出し、災害によって崩れた地域コミュニティを新たに作り、ソフト面の支援を行うこと。

〈成果〉

当日には、10人程度の方に参加していただいた。

活動の内容は、足湯とレクリエーションとして石鹸づくり、4月の桜飾りカレンダーづくり、ひな祭りオーナメントづくりを行いながら、傾聴活動を行った。普段の暮らし、家族、地域の歴史のことなど、住民の方々が生き生きと語る姿が見られたり、学生にとって学びになったりと、多くの面で良い時間になった。長らく家族としかお話できていない方や外出の機会が少ない方などが「せっかく神戸から学生さんが来てくれたから」という理由でサロン会に来てくださっていたことから、今回のサロンがねらいであげたような場となったのではないかと考える。

レクリエーションでは、より良い作り方を一緒に模索しながら作品を作る過程で、災害を味わった方々にとって「支援してもらおう」という受動的な体験ばかりでなく、能動的体験をする機会として大切なのだと感じられた。



【桜塚地区自治会主体の自由サロン、及び自治会の作業のお手伝い】

〈ねらい〉

自治会の負担の軽減や集会の盛り上げなどに寄与することや、「サロン会」を行うことで、住民同士が集まる場や、住民と若者世代との交流を通じて悩みを吐き出す場や楽しくお話する場を創出し、災害によって崩れた地域コミュニティを新たに作り、ソフト面の支援を行うこと。

〈成果〉

前日のサロン会でもお話した方と話す機会があり、より親しい関係を築くことができたり、最近新しく民

営住宅に移り住み、自由サロンに来るようになったという方と活動を楽しむことができたりした。作業のお手伝いの合間にも、サロン会ではあまり話すことができなかつた地域の方と学生が会話を交わすことができた。被災によって地域コミュニティが崩れた住民の方にとって新しい繋がりを生み出す機能があつたといえる。



【過去の支援者訪問】

〈ねらい〉

過去に支援をして関わつた方と再会し、継続的に生活状況を確認することや、ニーズの把握をすること。また、定期的に訪問することによって住民の方の心の安心に繋げたり日常の中の明るい出来事の一つとしてもらつたりすること。

〈成果〉

今回は2022年5月に家屋のお片付けをお手伝いした、在宅被災者の方も訪問した。我々が初めてお宅へ行ったときは、ほとんど笑うことがなく、口数もかなり少なく、コミュニケーションに対して消極的なように見られたが、今回の訪問では、私たちが到着すると自ら表に出てこられて、終始嬉しそうに、笑顔で、家の状態の話、周辺地域の話、最近の暮らしのことなどたくさんお話をしてくださつた。被災者支援はその時だけでなく、継続的なかわりも大切なのだと分かり、自分たちが作業をしたことの意義も再確認することができた。



【災害学習活動】

〈ねらい〉

災害について伝承していただくことによって、今後の防災、減災に繋げることができる知識を得て今後の団体の活動に活かすとともに、被災の現状を正しく知り、被災者の方の思いも含めて理解したことを心で受

け止め、今後の意義ある活動を考えていく糧とする。

〈成果〉

今回災害学習をさせていただいたのは、台風19号の被害を受けた丸森町の方のお宅と、震災遺構門脇小学校、大川小学校であった。

丸森町では、元消防団長の方のお話を聞いて、気象や地形に興味を持ち、仕入れた情報から川の水の行方を予測する想像力を持つことが、防災のために大切なのだと分かった。

門脇小学校は、津波火災があったものの、児童、教職員全員の命が助かった学校である。一方で大川小学校は、多くの児童、教職員の命が犠牲になった。この2つの小学校を見学して、救うことができなかったことから学ぶ命と、救うことができたことから学ぶ命という2側面からの学びが得られた。どちらの学校でも、命を守るのは災害が起こった瞬間にいかにか正しい判断ができたかではなく、事前にどのように対応するかをいかに具体的に細やかに想定して決めておくかということだということ学んだ。



3. 効果・今後の展望

サロン会を通して、ハード面の復興が進んでも、被災によって変わってしまった人と人の距離に起因するソフト面の問題は未だに残っていることを再確認することができた。また、過去に関わった方と再会して、当時支援に当たったメンバーは、自分たちが行ってきた支援の意義を見出すことができた。

これらの活動を通して、被災地と継続的に関わり続けることの大切さを知ることができた。来年度は、同自治体による「サマーフェスティバル」のお手伝いを通して被災地との関わりを継続していく予定である。

災害学習活動を通して私たちは、災害から命を守るためには事前の準備が大切なのだという学んだ。今回学んだ見方、考え方を広め、自らの地域の防災対策を練る活動も考えていきたい。

宮城県仙台市荒浜における災害ボランティア活動

神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti 香月愛梨

1. 経緯と概要

2023年度から新しく宮城県仙台市荒浜地区での活動を行っている。荒浜地区は、推定13.7メートルにも及ぶ東日本大震災の津波の影響により、多数の死者・行方不明者がでた。そして、現在では住むことのできない災害危険区域となっている。そこで現在も活動されている海辺の図書館の関係者の方々と共に荒浜の魅力の発信や多くの方が訪れる場所にするために定期的にミーティングを重ねながら活動を行っている。現在は、海辺の図書館の看板づくり施設の整理や今後の方針について話し合い、行動している。また、月に1度行われている深沼ビーチクリーン活動へ参加をしている。

2. 活動のねらいと成果

【海辺の図書館の看板づくり施設内の整理】

(ねらい) 海辺の図書館の看板づくりを行うことで、深沼海岸や震災遺構仙台市立荒浜小学校などへ訪れた人が海辺の図書館という施設を認識し、訪れやすくすること。また、海辺の図書館のコンセプトを初めて来た人にもわかるようにすること。

(成果) 現在看板づくりの方は計画段階であるが、看板づくりを行う際に海辺の図書館の関係者の方々が海辺の図書館に対してどのようなイメージで活動に参加しているのかを知ることができた。また、施設を整理し、助言をいただきながら玄関を整備することで海辺の図書館を訪問する人が増えた。

【深沼ビーチクリーン活動】

(ねらい) 深沼ビーチクリーン活動へ参加することで、荒浜への理解を深め、深沼ビーチクリーンを開催している団体の負担の軽減へ寄与する。

(成果) ビーチクリーン活動に参加することやその運営に関わることで学生自身も荒浜への理解が深まった。また、受付やごみの整理などを担当することで、ビーチクリーン活動を開催している団体の方々の負担軽減に寄与することができたのではないかと考える。



付 録



地域・だいがく連携通信 - 神戸大学地域連携ニュース -

神戸大学地域連携推進本部
〒657-8501
神戸市灘区六甲台町1-1
TEL: 078-803-5391
FAX: 078-803-5389
E-mail: kshu-kiuchi@office.kobe-u.ac.jp

神戸大学がラジオ関西と連携協定を締結、4月より本学の情報発信番組「神戸大学☆夢ラボ」がスタート

ラジオ関西で神戸大学の情報番組を放送します

神戸大学☆夢ラボ
毎週日曜 8:45-9:00

- 放送内容
 - ①SDGs、カーボンニュートラル関連などの最新研究紹介
 - ②地域連携プロジェクトの紹介
 - ③学生からの発信(調査活動、学生実験・体験)
 - ④その他(インタビュー、ライブ、大学祭のチャーム)
- 出演者
 - 学生スタッフ(学生記者団、学生実験・体験)
 - 心づいた分野の先生(先生記者団、先生実験・体験)
 - 地域の先生(先生記者団、先生実験・体験)

https://radio.kobe-u.ac.jp

本学は令和5年3月1日(水)株式会社ラジオ関西と連携協定を締結しました。本学がラジオ局と連携協定を締結するのは今回が初めてです。

この協定において、ラジオ関西と本学は、放送を通じて大学からSDGsやカーボンニュートラル関連の研究や、地域連携プロジェクトの紹介による地域社会への貢献と発信、学生も交えた地域活性化の取組や人材育成において連携・協力していくことを表明しました。

4月2日(日)以降、本学の情報発信番組として毎週日曜の朝8時45分から15分の番組「神戸大学☆夢ラボ」がスタートすることになりました。

初回は本学藤澤正人学長が、二回目は地域連携推進本部長の奥村弘副学長・理事が出演し、今回の連携協定の目的や意義を始め、今後本番組で紹介される内容などについて披露する予定です。

ラジオ関西「Clip」GO!HYOGO! (ゴー・ヒョウゴ) コーナー内で本学地域連携事業が紹介

令和3年にラジオ関西の桃田武司代表取締役社長(=当時)らが来学され、ラジオ関西と本学の間の連携事業について協議が行われました。その結果、ラジオ関西の番組「Clip」内の「GO!HYOGO! (ゴー・ヒョウゴ)」コーナー(第5火曜、15:15~15:25の10分間)内に、計4回分、本学の地域連携事業が取り上げられることとなりました。



初回の令和4年5月31日(火)は奥村理事が出演し、本学全体の地域連携事業のあり方について紹介しました。第2回(8月30日)は、保健学研究科の和泉比佐子教授により、同研究科地域連携センターでの高齢者支援などの取り組みについて、第3回(11月29日)は、人文学研究科の市沢哲教授と同研究科大学院生により、同研究科地域連携センターの取り組みや神戸文書の研究の田中丸治哉教授と農業サークル「にしき恋」[AGLOC]メンバーにより、同研究科地域連携センターの取り組みや丹波篠山市内の学生による農業サークル活動について、パーソナリティの虹しよらがさんとの和やかな掛け合いの中で放送されました。

第4回目の内容については、「神戸大学の『農業体験型授業』 丹波篠山の農家に「弟子入り」 無人駅マルシェ、ペタリアンメニュー考案」として、ラジオのHP上にも掲載されています。こちらもご覧ください。 <https://joc.jp/radiopj/2023/01/31/48059/>

続いて行われた討論会では、勝沼直子神戸新聞編集委員をファシリテーターに藤澤正人学長、久元喜造神戸市長、永吉一郎神戸市デジタルラボ社長ら5人が、大学と自治体、企業が地域課題の解決にどう連携していくかについて話し合いました。まず、幸島麗人国際文化学研究所准教授が、採択された研究テーマ「神戸のユダヤ人観光の可能性について」の研究活動を踏まえ、「過年で安定的な集客を」と語りました。「神戸市域に所在する文書群の調査・活用・公開に関する研究」で採択された井上舞人文学研究科特命講師は、地域で歴史資料を保存することを求めました。

藤澤学長は「大学も自治体と車の両輪になって、さまざまな地域課題の解決に取り組んでいきたい」と強調し、久元市長は「グローバル社会で都市は歴史を尊重することが大切。新設する公文書館でしっかり保管し、地域でも個人が保管する文書の保存方法を考えた」と話しました。また、永吉社長は「地域課題解決のためにこの取り組みが持続することが重要。企業としても蓄積と納税などで支援していきたい」と応じていました。



若手研究者4人が研究成果を発表(神戸大学百年記念館六甲ホール) 久元喜造神戸市長と藤澤正人学長ら6人が「地域課題解決に向けた産官学の連携の在り方」をテーマに討論した

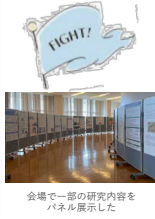
朝来市生野の観光PR動画作成への協力(国際文化学研究所地域連携センター)



朝来市と神戸大学は平成16年に大学協定を結び、それ以来さまざまな連携活動を実施してきましたが、本年度は、生野馬車道や平成29年に日本遺産に認定された「銀の馬車道」などで知られる朝来市生野の歴史と魅力を伝える短編PR動画を共同で制作しています。本動画では特に若年層にアピールするために、兵庫県立生野高等学校のマスクットキャラクター「いのん」と、生野銀山の「地下アイドル」として近年人気を誇るGINZAN BOYの「よさぶろう」に出演してもらい、現在撮影が進められています。完成した動画はYouTubeで公開されるほか、県内各地のイベントでも上映を計画しています。

本学からは映画学が専門の板倉史明教授(国際文化学研究所)、歴史学が専門の井上舞講師(人文学研究科)がナゾリオ制作に参加しています。生野は、黒澤明監督の『生きている』(1952年)に主演した俳優の志村喬(1905-1982)のふるさとでもあり、志村喬記念館には彼の活躍をはじめ写真や映画ポスターが展示されているほか、生野銀山の福利施設・協和会館で実際に使用されていた35ミリ映写機なども展示されています。

大学発アーバンイノベーション神戸成果報告会を開催



地域課題解決をテーマにした若手研究者らの研究を神戸市が支援する「大学発アーバンイノベーション神戸」の成果報告会が令和5年2月9日、神戸大学百年記念館六甲ホールで開催されました。神戸大学の研究者4人のプレゼンテーションに続いて、「地域課題解決に向けた産官学の連携の在り方」と題して、久元喜造神戸市長と藤澤正人神戸大学学長ら6人が討論しました。会場とオンラインを合わせて約180人が参加し、ホール内では研究内容の一部がパネルで紹介されました。

「大学発アーバンイノベーション神戸」は、主に人文、社会発分野の若手研究者の研究を身近な地域課題や行政課題の解決につなげる目的で、神戸市が令和2年度に導入しました。研究者が自由に提案する場合は1件あたり30万円を上限に研究費が助成され、企業と連携した提案は1件あたり120万円が上限となっています。令和4年度までの3年間で、神戸大学と関西学院大学、兵庫県立大学の研究者らの研究計45件が採択されました。

成果報告会は初めて開かれ、採択された神戸大学の4人の研究者が発表しました。加藤明恵人文学研究科助教は「舞の酒造家吉田家の文化・学術活動の研究」について報告し、牧野智子経済学研究所教授は「神戸市農業のイノベーション促進要因の探求へ」導入と6次産業化に注目して」と題し、神戸市内農家へのアンケートの分析結果などを紹介しました。沖谷太郎保健学研究科助教は、神戸大学が開発した認知症予防プログラムについての実証研究の内容を解説しました。寺田努工学研究科教授は実走モバイルなどチームで研究した「スタジアム体験における自然な遅延緩和に寄与する要素の探索」をテーマに、サッカーの試合ではポイント付与などのインセンティブで帰宅が分散されるという研究成果を紹介しました。この研究は、このほど内閣府の第5回日本オープンイノベーション選考委員会特別賞を受賞しました。

発表者	所属	発表題目	発表時間
1	人文学研究科	加藤明恵	10:00-10:15
2	人文学研究科	加藤明恵	10:15-10:30
3	人文学研究科	加藤明恵	10:30-10:45
4	人文学研究科	加藤明恵	10:45-11:00
5	人文学研究科	加藤明恵	11:00-11:15
6	人文学研究科	加藤明恵	11:15-11:30
7	人文学研究科	加藤明恵	11:30-11:45
8	人文学研究科	加藤明恵	11:45-12:00
9	人文学研究科	加藤明恵	12:00-12:15
10	人文学研究科	加藤明恵	12:15-12:30
11	人文学研究科	加藤明恵	12:30-12:45
12	人文学研究科	加藤明恵	12:45-13:00
13	人文学研究科	加藤明恵	13:00-13:15
14	人文学研究科	加藤明恵	13:15-13:30
15	人文学研究科	加藤明恵	13:30-13:45
16	人文学研究科	加藤明恵	13:45-14:00
17	人文学研究科	加藤明恵	14:00-14:15
18	人文学研究科	加藤明恵	14:15-14:30
19	人文学研究科	加藤明恵	14:30-14:45
20	人文学研究科	加藤明恵	14:45-15:00
21	人文学研究科	加藤明恵	15:00-15:15
22	人文学研究科	加藤明恵	15:15-15:30
23	人文学研究科	加藤明恵	15:30-15:45
24	人文学研究科	加藤明恵	15:45-16:00
25	人文学研究科	加藤明恵	16:00-16:15
26	人文学研究科	加藤明恵	16:15-16:30
27	人文学研究科	加藤明恵	16:30-16:45
28	人文学研究科	加藤明恵	16:45-17:00
29	人文学研究科	加藤明恵	17:00-17:15
30	人文学研究科	加藤明恵	17:15-17:30
31	人文学研究科	加藤明恵	17:30-17:45
32	人文学研究科	加藤明恵	17:45-18:00
33	人文学研究科	加藤明恵	18:00-18:15
34	人文学研究科	加藤明恵	18:15-18:30
35	人文学研究科	加藤明恵	18:30-18:45
36	人文学研究科	加藤明恵	18:45-19:00
37	人文学研究科	加藤明恵	19:00-19:15
38	人文学研究科	加藤明恵	19:15-19:30
39	人文学研究科	加藤明恵	19:30-19:45
40	人文学研究科	加藤明恵	19:45-20:00
41	人文学研究科	加藤明恵	20:00-20:15
42	人文学研究科	加藤明恵	20:15-20:30
43	人文学研究科	加藤明恵	20:30-20:45
44	人文学研究科	加藤明恵	20:45-21:00
45	人文学研究科	加藤明恵	21:00-21:15
46	人文学研究科	加藤明恵	21:15-21:30
47	人文学研究科	加藤明恵	21:30-21:45
48	人文学研究科	加藤明恵	21:45-22:00
49	人文学研究科	加藤明恵	22:00-22:15
50	人文学研究科	加藤明恵	22:15-22:30
51	人文学研究科	加藤明恵	22:30-22:45
52	人文学研究科	加藤明恵	22:45-23:00
53	人文学研究科	加藤明恵	23:00-23:15
54	人文学研究科	加藤明恵	23:15-23:30
55	人文学研究科	加藤明恵	23:30-23:45
56	人文学研究科	加藤明恵	23:45-24:00
57	人文学研究科	加藤明恵	24:00-24:15
58	人文学研究科	加藤明恵	24:15-24:30
59	人文学研究科	加藤明恵	24:30-24:45
60	人文学研究科	加藤明恵	24:45-25:00

第21回歴史文化をめぐる地域連携協議会「自治体史編さんの現在」開催(人文学研究科地域連携センター)



令和5年1月21日、神戸大学瀧川記念学術交流館において、第21回歴史文化をめぐる地域連携協議会が開催されました。今回のテーマは「自治体史編さんの現在-参加と活用の新しい取り組み-」でした。前半の事例報告では、尼崎市・三木市・丹波篠山市・大阪府茨木市の自治体職員の方をお招きし、編さん後の史料の活用や、地域住民と協働した編さん事業、編さん後の史料の活用について報告いただきました。また、これまで多くの自治体史編さんに携わった、人文学研究科教授の奥村弘氏より各報告へのコメントがありました。

後半の総合討論では、参加者から多くの質問や意見、感想が出たほか、報告者間でも活発な議論が交わされました。

コロナ禍のため、第19回・20回はオンライン開催でしたが、今回は対面での開催となりました。感染症予防の観点から、参加者同士の交流の時間は短かったものの、久しぶりの再会を喜び声がフロアにあふれる充実した会となりました。



実践農業入門成果報告会(農学研究科地域連携センター)

神戸大学農学部では、丹波篠山市の農家に学生が弟子入りし、農業と農村を実体験から学ぶ授業科目「実践農業入門」を開講しています。この授業では年6回、土曜日にバスで履修者が丹波篠山市に行き、現地で農作業を体験するとともに成果報告会を行っています。

令和4年度の「実践農業入門」は古市地区が履修生を受け入れて下さいました。令和5年1月21日(土)には、古市コミュニティ消防センターで成果報告会が開催され、同授業に参加している兵庫県立山崎高等学校の1班を含めた合計10班が地を活性化するための様々な提案を発表し、参加者との活発な質疑応答を行いました。この成果発表会には、履修生と関係教員に加えて地元農家の皆さんや酒井隆明市長を始めとする市役所の皆さんなど多くの方にご参加いただきました。

最後に全参加者の投票により地域連携センター長賞、丹波篠山市長賞などの各賞が授けられました。第1位の班は、繁忙期の手不足を解消する企画として、納税の代わりに丹波篠山で農作業を行って返礼品を受け取るという「ふるさと農業」を提案しました。第2位の班は、丹波篠山に行っている活動することでクーポンが貯まるスマートフォンのアプリを実際に開発するなど、各チームが授業での体験を活かしてユニークな提案を披露しました。



ふれあいスポーツチャレンジ事業 (保健学研究科地域連携センター)

現在、障害のある子どもの運動・スポーツへの参加機会は定型発達児と比べて限られています。例えば、市内の特別支援学校でクラブ活動を実施しているのは市立校6校中3校に留まり、実施校においても週1~2回程度、希望者のみを対象としています。保健学研究科では、公益財団法人こへ市民福祉振興会とともに「運動を通じた障害者の居場所づくり」を目指し、神戸市北区にある「しあわせの村」において「ふれあいスポーツチャレンジ事業」として3つの教室を展開しました。

一つ目は、小学1年~2年生の発達に気になる児童が体を動かす楽しさを体験し、運動への意欲や達成感を持つ機会と、保護者が学び相互に情報交換をする場を設けることで家族支援の機会の提供を行う「のびのび運動ひろば」です。二つ目は、小学3年~6年生の支援学級の児童を対象に、まずは水に慣れたいいただき、その後、水中での運動を楽しむことを目的とした親子プログラムの「水中運動ひろば」です。三つ目は、特別支援学校中等部および高等部の生徒を対象に、放課後クラブ活動として色々なスポーツを通して体を動かす楽しさ等を学ぶ「中高生バラスーツクラブ」です。



写真:公益財団法人こへ市民福祉振興会提供

保健学研究科では、秋末敏宏研究科長を研究代表者として、人間発達環境学研究所の協力を得ながら教室運営への協力と効果検証を担当しました。子どもへの体力や運動機能評価、子どもが運動教室に参加することが保護者に与える影響等を調査しています。本事業はスポーツ庁所管の「障害者スポーツ推進プロジェクト」および本学の「地域中核イノベーション」事業に係る地域連携事業の助成を受けて、学内外の多様な組織と団体、複数の大学が連携して実施されています。今年度の調査結果は、後日、スポーツ庁のウェブサイトにも公開されます。ぜひアクセスしてみてください。

姫路フィールドワーク (国際文化学研究所地域連携センター)

国際文化学研究推進インスティテュート (Promis)

地域連携センターは、国際人間科学部グローバル文化学と共同で、1月28日に姫路市でフィールドワークを行いました。国際文化学研究所 (国際人間科学部) 地域連携推進本部、SDGs推進本部の教職員と学生約30名のほか、神戸バスおよび姫路観光コンベンションビューロー (DMO) から8名の職員が参加してくださいました。DMO職員の名のもと、商業施設やホテルが立ち並ぶ姫路駅前や商店街



のまち歩きをした後、市民会館で学生たちが姫路の観光振興についてプレゼンを行いました。神戸バスや姫路DMOの方々と意見交換を行いました。

国際文化学研究所は3月に姫路市と地域連携協定 (部局協定) を締結し、5月に神戸バスとの共同による教育研究活動を計画するなど、今後も親光まちづくりを主眼とした地域連携を展開していく予定です。



「地域に出る一神戸大学ボランティアのススメ2023」を発行!

神戸大学の様々なボランティア・社会貢献活動と地域連携推進本部ボランティア支援部門の応援や取組を紹介しています。活動は多様で「地域に出る~人とつながる」(震災から続く地元神戸市の地域活動)・「キャンパスから世界へつながる」(留学生・国際交流)・「子どもたちと一緒に」(居場所・学習支援)・「みんなと一緒に」(掃除・児童館・障がい者・など多様な地域福祉活動)・「農業する」と人とも出会う(丹波篠山市での農業ボランティア・多世代交流)・「28年前から多岐にわたる被災者支援ボランティア」(地元で、地域で活動する)(兵庫県東播磨地区に被災地支援)などがあがります。題目「地域に出る」を学生団体へのアンケートで決まりました。ぜひ、ご覧ください。

学生ボランティア団体の地域活動

■震災追悼行事「1.17KOBELに灯りをinなगत」ボランティア活動

阪神・淡路大震災から28日目の1月17日、神戸大学の2つの災害ボランティア団体 (東北ボランティアバスプロジェクト・持続的災害支援プロジェクト) がボランティア活動に参加しました。今回初参加のKontiki代表・杉山紗也乃さん (4年) は「ほとんど震災を知らない世代が増える中で、このように当時の経験や学びなど、私達が普段知らないことへの思いが伝わりかけていく話になるのにも感じました。世代、立場、居住地関係なく集って話し、そして当時を想って灯をともすこの行事に参加させていただくことが出来たとともに光栄でした」と地域での活動の大切さを話していました。



神戸市兵田区 震災追悼行事

■第3回 丹波篠山研究発表会 (学生ボランティア団体の活動報告)

丹波篠山市で活動する大学が一同に会し、様々な取組みがいきなり紹介されました。学生の活動は主に「大学の実習」「教員とゼミ」「ボランティア団体活動」に分けることができ、神戸大学の学生ボランティアは3団体 (にしき恵・AGLOC・Luonto) が報告しました。会場には学生・大学を受け入れてくれる丹波篠山地域住民皆さんが暖かくお越しになっていて、温かい思いが伝わってきました。会場の最後にはLuontoが会場投票1位で「丹波篠山市長賞」を受賞し大きな拍手に包まれました!

灘区大学と連携したまちづくりチャレンジ事業補助金報告交流会への参加 (令和5年2月25日)

灘区役所の「まちづくりチャレンジ補助金」を受けている団体のオンライン報告会において、神戸大学6団体・神戸海星女子学院大学1団体、神戸松蔭女子学院大学1団体から、それぞれ1年かけてがんばってきた様々な取組み紹介がありました。学生たちの報告からはコロナ感染防止対策が緩和され始めた令和4年6月頃から活動を再開し、空間的・時間的な変化を防止するための様々な工夫が伝わってきました。その後の交流会では①広報、②地域連携について話し合い、対面での交流を増やしたり、互いの活動を訪問するなどの意見があり、今後、一層の展開が期待されます。

令和4年度 神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成採択課題

採択1件	団体名	補助事業の名称	事業責任者
国立大学法人神戸大学 大学院人間発達環境学研究所	輪ちんいさまちづくりプロジェクト	人間発達環境学研究所 教授 岡田 修一	
学生5件	団体名	補助事業の名称	事業責任者
まちづくりプロジェクト実行委員会	まちプロジェクト22		
障がいのある若年の生涯学習支援会	女子会		
神戸大学ベルカレ(6年学生評議会)	灘区デジタルマップ化プロジェクト		
神戸大学文芸研究会	だだままつり		
国際文化学研究所(N.A.C.)	灘区内の防災復興と住民の集会所におけるふれあい喫茶の運営、戸別訪問活動		

地域連携推進本部 神戸大学創立120周年記念事業シンポジウム 「つなぐ、地域と大学の27年ー災害・復興ボランティアの全国展開と地域連携のこれから」 (令和4年10月22・23日) ぼうさいこたいて2022・ALLHATおよびご防災フェスタ参加



神戸大学学生生活協賛会 神戸大学総合学生センター 神戸大学東北ボランティア(AS/PS/JS/PS) 神戸大学特別活動推進部(AS/PS/JS/PS)が参加しました。

「ボランティア元年」といわれた阪神・淡路大震災があった平成27年、神戸大学でも学生たちが主体的に被災者を支援するボランティアグループを立ち上げました。あれから27年。東日本大震災、熊本地震など相次ぐ激甚災害の場に活動を広げながら、コロナ禍という逆境にも耐え、先輩から後輩へボランティア活動のバトンが受け継がれています。4団体の学生5人と、地域とボランティア団体の代表、大学教授ら計10人が議論しました。

学生たちからは、「コロナ禍でノウハウを伝えたり、学んだりする機会が減った。コロナなど活動休止のときに相手先との関係をつくる方法を考えた」とか、「後輩の確保が難しく、存続にかかわる。神戸大学に限らず外部団体とのつながりも重要だ」「変化していく被災者のニーズにどう対応していくか難しい」と、悩みや課題が打ち明けられました。

一方、地域住民やボランティア関係者は「被災地での神戸大学だからこそ、ボランティアを続けてほしい」とか「高齢者は孤独な人が多く、学生が傾聴してくれることがありがたい」「学生が遠くから被災地にきてくれるだけで被災者のニーズは満たされている。学生が自分の居場所を見つけていけることができれば被災地の課題も見える」と、学生とエネルギーを送りました。神戸大学も阪神・淡路大震災の被災地に軸足を置く大学として、今後もボランティア活動を通じ、災害復興の支援の在り方や防災、減災を伝えていくことが求められています。

「27年経く神戸大学学生たちの災害ボランティア活動 阪神・淡路大震災の経験を被災地へ神戸から全国へ」 神戸ホームページより抜粋 <https://www.kobe-u.ac.jp/NEWS/feature/student0001.html>

ボラカフェ2022 (令和4年11月15日・対面/16日・オンライン) ~コロナ禍を乗り越えて、3年ぶりに対面開催しました

「ボラカフェ」は学内のボランティア・社会貢献活動に取組む団体・サークルが集まり、互いの活動紹介や交流、新しいメンバーへ声かけの場でもあります。

■コロナ禍を乗り越えた学生ボランティア活動
2020年新型コロナウイルス感染拡大防止対策としての活動制限は学生生活に影響をもたらしましたが、22年に制限が徐々に解かれたことで活動が戻ってきました。学生たちはコロナ前の2019年まで実践していた取組みを復活させ、ノウハウをボランティアの現場で伝えるために、代表や前代表たちが自らの活動期間を延長して支えている団体は複数あります。この度の対面でのボラカフェ開催は、「団体間での交流と新しいメンバーへの声掛けが重要」との認識のもと、団体代表者たちが取り組みを実現しました。中心となって参加を呼び掛けた農業ボランティアサークル・AGLOC代表小川芳輝さん (3年) は「コロナ禍で活動が中断したことで、再開後の活動継続のため代表としての活動期間を1年間延長している」と述べています。

2年を超える活動の制限・自粛期間を乗り越えた学生、あるいは制限のある中で新たなボランティア活動を始めた学生が互いに情報を交換し、刺激あったボラカフェは大切な機会となり、それを現すと、次回ボラカフェ (2023年9月企画中) での再会を約束して終了しました。



毎年、代表、学年メンバーが交代する学生団体の多くはLINEやGoogle DriveなどICT機器を使って写真・文書含む様々な情報を保存、共有を心がけて共有活動に活かす工夫をし、独自のノウハウやボランティア活動資料を準備しています。

令和4年度 地域連携公募事業

地域連携事業 (教職員対象)

部局名	活動内容	事業責任者
海事科学研究科	東灘区在住者向け こどもいっしょ体験スクール/防災意識向上イベント	海事科学研究科 科長 内田 寛久
健康科学研究科	兵庫県内の医療連携地域の高校生を対象とした医療人材育成促進事業	医学部附属病院 特任教授 野野 誠司
計数社会科学部	海と山の、神戸の風景をつくる	計数社会科学部 教授 特命講師 小代 大
国際文化学研究所	姫路市における地域文化、地域産業の振興と地域の国際化	国際文化学研究所 教授 岡田 浩樹
工学研究科	有野町地区 再生、活用プロジェクト	工学研究科建築学専攻 准教授 柴山 尚平
工学研究科	神戸市立東灘区立小中学校における研究成果のインタラクティブな展示展示空間の共創	工学研究科 教授 寺田 繁、助教 大島 航史
国際文化学研究所	地域の観光記録/記憶の次世代継承と可能性	国際文化学研究所 教授 長 志穂 健

学生アショナンプ (学生対象)

団体名	活動内容	事業責任者
神戸大学保全生態学研究会	西宮市の自然記念物の学術調査と啓発活動	農学研究所 准教授 石井 弘明
プロジェクト補員	プロジェクト補員	工学研究科 准教授 近藤 匡代
母子課の活動プロジェクト	母子にやさしい街づくり	保健学研究科 教授 小野 玲
地域交流推進の会(なごい)	URグリーンビルズ六甲における社会的交流促進活動	人間発達環境学研究所 教授 片桐 憲子
神戸大学学生防災支援隊	救援隊の歴史を学ぶ	大学院経済学研究所 教授 梶谷 浩
まなびと学生部	こどもと外国人をつなぐ国際交流キャンプ	人間発達環境学研究所 教授 太田 弘弘
ESDプラトフォームNELL (未来型ESDプロジェクトチーム)	大船渡市赤崎地区まちづくり再活性化支援プロジェクト	人間発達環境学研究所 教授 松岡 広路

地域中核イノベーション事業に係る地域連携事業

部局名	事業内容	事業責任者
経営学研究科	ノンバーバルコミュニケーションシンキングプログラム開発	経営学研究科 准教授 藤 孝史
経営学研究科	六甲山の緑化および施設利用に関する地域の持続可能な取組の推進に関する事業	経営学研究科 教授 松崎 隆
人間発達環境学研究所	公立小中学校における「校内アリススペース」の開発と展開	人間発達環境学研究所 准教授 赤木 和重
保健学研究科	ふれあいスポーツチャレンジ事業	保健学研究科 教授 藤本 敬史

活動報告 (令和4年10月~令和5年3月)

年次	月	日	団体	活動内容
令和4年	10月	3日	大	「ぼうさいこたいて(第3回) 開催(オンライン)」
		6日	大	「地域社会形成基礎講座(第3回) 開催(オンライン)」
		12日	大	「市長と学長の懇話会」
		22日	国交	「姫路フィールドワーク」
		23日	大	「ALLHATおよびご防災フェスタ「つなぐ、地域と大学の27年」開催」
		27日	大	「災害対策協議会(11/27, 11/17, 12/15, 1/22, 2/15, 3/2, 3/9)」
		27日	大	「定例協議会への参加」
		15日	大	「第1回地域連携推進部協議会(神戸市)への参加」
		15日	大	「ボラカフェ開催(対面)」
		29日	大	「ボラカフェ開催(オンライン)」
令和5年	3月	1日	大	「ボラカフェ開催(第3回)開催(オンライン)」
		2日	大	「第3回地域連携推進本部協議会(12/8, 1/17, 3/23)」
		10日	大	「歴史と文化のまちづくりシンポジウム「地域歴史を軸とした課題-東山下山道遺跡めぐり-」への参加」
		12日	大	「「2022神戸のつどい」へ出席」
		20日	大	「丹波篠山市・神戸大学連携推進協議会(ハイブリッド)」
		21日	大	「第3回同窓会(山崎山荘会)への参加」
		21日	農学	「実践学発表会」
		26日	国交	「姫路フィールドワーク」
		9日	大	「大学教員ボランティアイノベーション神戸成果報告会」
		25日	大	「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業補助金報告会・交流会への参加」
令和5年	3月	1日	大	「神戸大学と灘区両側が連携定例協議会」
		9日	大	「地域創生に資する実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム連携会(ハイブリッド)」
		19日	保健	「保健学研究科地域連携センター活動報告会」
		22日	国交	「姫路市と国交省の協議」
		27日	大	「第★こども館「江戸時代のくすし字講座にチャレンジ」」
		27日	大	「ボランティア支援部門によるボランティア団体・学生向け説明会(ハイブリッド)」
		29日	大	「神戸市歴史博物館協議会への参加」



地域・だいがく連携通信 — 神戸大学地域連携ニュース —

神戸大学地域連携推進本部
〒657-8501
神戸市灘区六甲台町1-1
TEL: 078-803-5391
FAX: 078-803-5389
E-mail: ksu-chiki@office.kobe-u.ac.jp

経済学研究科が養父市と協定を締結

令和5年7月25日、神戸大学大学院経済学研究科と兵庫県養父市は、連携・協力に関する協定を締結しました。この協定は、経済学研究科の衣笠智子教授と養父市との共同研究をきっかけに、衣笠教授を中心に進めている「農業特区」養父市における持続可能な農業、農村の発展に関する研究等をさらに発展させるものであり、今後は、国家戦略特区の効果や人口減少下における農業振興及び地域の課題解決に資する研究を官学一体となって積極的に取り組み、また、相互の人的・知的資源の交流及び活用を図り、人材育成や学術の振興の推進を図るために締結したものです。



(左) 広瀬栄 養父市長 (右) 宮尾龍蔵 経済学研究科長

締結式は、養父市役所本庁舎で開催された養父市定例会員会場で執り行われ、広瀬栄養父市長と宮尾龍蔵経済学研究科長とが、協定書に署名し、協定書を交換しました。

- 本協定では、以下の事項について連携して取り組むこととしています。
- (1) 人口減少下における農業振興及び地域の課題解決に資する共同研究の推進
- (2) 地域・社会に貢献できる人材の育成
- (3) その他、本協定の目的遂行上必要な事項



保健学研究科が三田市と連携協定を締結



令和5年3月30日、神戸大学大学院保健学研究科と三田市は、認知症予防や介護予防などの分野において互いに協力し、市民の健康福祉の増進と神戸大学の研究発展等に寄与することを目的に連携協定を締結しました。

保健学研究科では、高齢化が進む我が国で認知症の高齢者が急速に増加している背景のもと、令和2年に認知症予防推進センターを設立し、「認知症予防に関する研究」と「認知症予防プログラムの普及」の相互作用の成果を通じて豊かな高齢社会づくりや地域活力の維持・向上に寄与することを目的としています。

今後、双方の資源や強みを共有し連携を深めることにより、地域住民の認知症予防や健康づくりを目的とした臨床研究やプログラムの推進、健康寿命延伸およびウェルビーイング実現のための共同研究等を実施する予定です。

(左) 森百男 三田市長 (右) 秋末敏宏 保健学研究科長

「灘★こども塾」を実施しました

灘区が区内大学との連携事業の一つとして行っている、こども向けの学習イベント「灘★こども塾」に神戸大学が協力しました。R4年度は3月27日に本学眺望館にて地域連携推進本部地域連携教育部門長の松下が、「江戸時代のくずし字読解にチャレンジ」と題し、実施しました。灘区内外の小学3年生から6年生の17名とその保護者16名の参加がありました。

当日は、こども達に、神戸市内の村々の江戸時代の年貢に関する史料に掲載されている数字や米の単位にくずし字の読解や、お米や水を一斗升や一升瓶、一合升など昔の単位での計量を体験いただきました。神戸市文書館からのご好意により当日使用した史料についてミニ展示を行い、こども達や親御さんにも江戸時代の古文書の実物をご覧いただきました。

「とても楽しかったと帰ってからも自分で白紙に筆ペンで書いて楽しんでました」「親子共々とても良い勉強になりました」「今やっっている勉強の国語も算数も理科も社会も全て合わせて学ぶという先生のお話に納得しました」などの感想が寄せられました。参加してくれたこども達が将来、地域の歴史資料の保全活用の担い手になってくれることを期待しています。

(地域連携推進本部・松下正和)



「ひょうご神戸プラットフォーム連絡会」を開催しました

令和5年3月9日に令和4年度「地域創生に伝える実践力養成ひょうご神戸プラットフォーム連絡会」を開催しました。

本会は、本学が申請校として採択された文部科学省COC+事業(H27～31年度)を契機として組織された連絡会であり、地域の経済界、自治体、大学が一体となって活動していくための意見交換の場です。参加した各大学が地域連携活動について報告し、経済界・自治体・大学で意見交換を行い、あらゆる視点から地域連携を考え、今後の活動の一助とするものです。

冒頭の奥村弘地域連携推進本部長による挨拶のあと、園田学園女子大学・神戸大学から報告を行いました。園田学園女子大学からは、子育て・高齢化対策領域の活動として「地域連携を行うNPO」としての連携による人材育成、歴史と文化領域の活動として「地域歴史遺産に関するシンポジウム」、兵庫工業会による「女子学生のための就活イベントの企画」への参画に関する報告がありました。本学からは、田中丸治哉副本部長より地域連携推進本部の改組や、海事科学研究科・国際化学研究科の2地域連携センターが新設されたこと、神戸市のプラットフォームについての説明がありました。学生の地域活動として、神戸大学保全生態学研究会による「西宮市の天然記念物の学術調査と啓発活動」の報告と、海事科学研究科地域連携センターから「東灘区在住者向け こどもいろいろ体験スクール/防災意識向上イベント」についての報告がありました。教員・学生の地域活動の詳細については地域連携推進本部のウェブサイトと活動報告書をご覧ください。

討論では、リカレント教育のあり方や海神丸の災害時支援機能、西宮を例とした都市緑化の意義、子育て支援の観点で神戸新聞社の取組との連携の可能性、神戸市のプラットフォームの活用などについて、活発な議論が行われました。

最後に神戸看護大学いちかんダイバーシティ看護開発センター副センター長の片倉直子先生より、看護学部ならではの地域連携のあり方を模索していること、学部の多い大学との連携や、来年度に出来る神戸市のプラットフォームも活用しながら神戸市に貢献するためにも今後も本プラットフォームでのつながりを維持し情報交換をしていく必要性を強調され、本会は終了しました。

(地域連携推進本部)

国際化学研究科が姫路市と地域連携協定を締結

神戸大学大学院国際化学研究科は令和5年3月22日、姫路市と地域連携に関する協定(部局協定)を結び、姫路市役所で協定締結式を行いました。同研究科が兵庫県内自治体と連携協定を締結するのは南あわじ市に次いで2カ所目、神戸大学が中播磨地域の自治体と連携協定を結ぶのは初めてとなります。

国際化学研究科では令和4年4月に地域連携センターを設置し、地域での教育、研究活動や貢献事業に取り組んでいます。その一環として、昨年秋から井上弘貴教授、辛島理人准教授を中心に、姫路市内で観光まちづくりをテーマに研究、教育活動を進めています。昨年10月末には、ドイツや中国などの留学生ら約60人が参加して「姫路ショートトリップ」を実施し、世界遺産・国宝姫路城や書写山円教寺を見学するなど日本の歴史、文化を学びました。また、今年1月末には、神姫バス、姫路観光コンベンションビューローとともに「産学共創ワールドスタディ」を実施し、姫路市中心部を巡って、地域の歴史文化を学ぶとともにインバウンド観光の課題などを探りました。

締結式には、姫路市の清元秀泰市長、横田雅彦政策局理事ら5人、神戸大学からは国際化学研究科の藤澤文子研究科長、梅屋深副研究科長ら8人が出席しました。清元市長と藤澤研究科長が、地域文化の振興と地域の国際化を促進するため、協力して国際交流や産業振興、観光に関する研究、教育、事業活動を行う旨の協定書に署名し、交換しました。清元市長は「姫路城の世界遺産登録30周年、ポストコロナという節目にあたり、人材育成や観光、まちづくりなどに多様な提言をいただきたい」と話しました。藤澤研究科長は「国際化学研究科は海外の80以上の大学と協定があり、学生の半分は留学生が占めます。学生たちが学内に飛び出し、国際性や学際性を生かしてさまざまな課題に取り組むことを期待したい」とも述べました。



地域連携の協定書を書いた清元秀泰姫路市長と藤澤文子神戸大学国際化学研究科長



経済学研究科が神戸市経済観光局と協定を締結

令和5年7月14日、神戸大学大学院経済学研究科と神戸市経済観光局は、産業振興等に関する分野における連携協定を締結しました。

本連携協定は、平成25年5月24日に国立大学法人神戸大学と神戸市の間で締結した「国立大学法人神戸大学と神戸市との連携に関する協定書」に基づく部門間協定として、今後、産業振興等に関する分野において、綿密な連携を図っていくことを確認するものです。

今後、双方の保有する資源を有効活用することにより、市施策立案における経済学的知見の反映と学術研究の進展を通じて、地域経済の発展を目指していきます。

本協定に基づいて取り組む内容は、(1) 施策の企画立案・検証に関する事項、(2) データ利活用の推進に関する事項、(3) 人材の育成に関する事項、(4) その他、本協定の目的遂行上必要な事項、です。

神戸市の政策課題、実施施策等に関して、経済観光局との意見交換会の開催、大学人材の活用による「経済学的視点からの助言・相談」等、具体的な連携内容を設定し、連携の充実を図ります。



(左) 宮尾龍蔵 経済学研究科長 (右) 大橋大平 神戸市経済観光局長



神戸大学経済経営研究所 地域共創研究推進センター開設

シンポジウム「地域の持続的発展と金融機関の役割—ESG地域金融の取り組み」を開催

令和5年5月24日に、神戸大学・尼崎信用金庫共同研究成果発表 神戸大学経済経営研究所 地域共創研究推進センター開設記念 公開シンポジウム「地域の持続的発展と金融機関の役割—ESG地域金融の取り組み」が開催されました。

神戸大学経済経営研究所では、共同研究等を通じて、地方自治体、地域企業、地域金融機関、地域支援団体などの連携を図るため、令和5年4月、地域共創研究推進センターを設立しました。地域連携活動の拠点として地域の金融機関様や団体様との共同研究を強力に推進しております。

間接金融が大きな役割を果たしている日本では、地域金融機関には、地域の持続可能性の向上に資するESG地域金融の実践が期待されています。当研究所と尼崎信用金庫は、令和4年度より「ESG要素を考慮した事業性評価の深化を通じた地域における事業者支援体制構築の推進」に関する共同研究を実施してきました。

また、尼崎信用金庫は、令和4年度の環境省ESG地域金融促進事業に採択されています。

そこで、本シンポジウムは、それらの取り組みの現段階での成果を報告し、取り組みを深化させることを目指し、荒木千秋(神戸大学経済経営研究所 非常勤講師)による総会司会のもと、講演とパネルディスカッションを行いました。

第1部では基調講演が行われ、家森信善教授(神戸大学経済経営研究所 教授・同地域共創研究推進センター長)が「ESG地域金融と事業者支援」について、講演を行いました。

第2部のパネルディスカッションでは、家森信善教授の司会により、宮口美穂さん(阪神北泉長局長(前兵庫県産業労働部次長)・神戸大学 客員教授)が(ネスト)として参加し、「地域の持続的発展のために地域金融は役が果たせるのか」をテーマに、ESGのうち、E(環境)の観点について、主に兵庫県の現状に焦点をあてながら、議論が行われました。

地域の持続的な成長を実現するためには、地域の中小企業のESG対応が不可欠です。しかし、それに対処するための人材、ノウハウや資金が不足している企業が少なくなく、地域金融機関や、信用保証協会、自治体や国などが連携して中小企業の取組の裾野を広げ、支えていく必要があり、支援機関としてSDGs推進に向けた今後の展開や、中小企業に関連する最近の支援の状況が紹介されました。

シンポジウムはハイブッド形式で行われ、出光佐三六甲台講堂に直接来場いただいた150名、Zoomウェビナーで参加された235名、計385名の企業、組織と個人の方に参加していただきました。今回は、環境省のESG地域金融促進事業に応募をされている金融機関のみならず多数参加されており、大変参考になったと高い評価の声をいただきました。

本シンポジウムは、尼崎信用金庫様との共同研究の中間発表としての性格を持っており、今年度も共同研究を継続し、最終的な成果をまとめる計画となっております。

(地域共創研究推進センター)

神戸大学海事博物館夏休みワークショップ 船のおもてなし～花毛布とタオルアニマルをつくらう～



夏休みワークショップとして、令和5年8月4日、「船のおもてなし～花毛布とタオルアニマルをつくらう～」を開催しました。

はじめに上杉先生より花毛布やタオルアニマルについて説明を受けました。そして、「大輪」や「富士山」、タオルアニマルの「ペンギン」や「のんびりワンちゃん」の折り方に取り組みました。

最後に上杉先生より、今後ともありがたの気持ちとしてタオルアニマルを作り、「おもてなし文化」を楽しんで欲しいと教わりました。

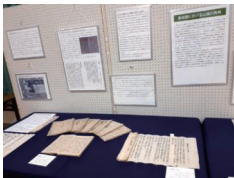


(海事科学研究科地域連携センター、海事博物館)

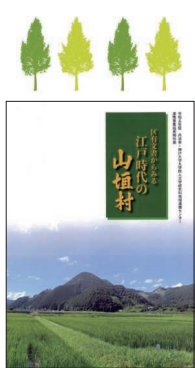
丹波市・人文学研究科地域連携センター連携事業成果報告展 「区有文書からみる江戸時代の山垣村」

丹波市と人文学研究科は、地域歴史遺産の活用、活用に携わる人材の育成を目指して、平成19年度に連携協定を締結しました。

令和5年度は8月21日から9月3日にかけて、丹波市青垣町山垣地区に残る「山垣区有文書」を用いて、「区有文書からみる江戸時代の山垣村」と題した展示会を実施し、これまでの調査成果を地域の人々に紹介しました。



展示会には山垣地区のみならず、周辺の地区の住民も来観し、「自分たちの地区でもこのような展示をしてみたい」、「地域に古文書が残されていないか調べてみようと思う」など、様々な感想をもらいました。



ボランティア・カフェ「ばらカフェ2023春」の開催

5月23日、神戸大学鶴甲第1キャンパス・学生ホールにて「ばらカフェ2023春」を開催しました。



【新報】ボランティアに関心のある学生が訪れ各ブースを回って熱心に説明を聞いていました。複数のブースを回っている学生が多く、質問もどのような活動内容かや場所と頻度など多様です。

学生ボランティア団体の地域活動

①神戸大学児童文化研究会「どうけん夏合宿」報告

1日目は香美町立長井小学校を訪問、人形劇から始まり、運動、工作、緑日、水鉄砲と様々な遊びを子どもたちと行い、どれも子どもたちから大変好評でとても素晴らしい会になりました。

2日目は兵庫県豊岡市の豊岡駅にあるAtlyにて人形劇と手遊びを行いました。人形劇は2日間とも「おかしな世界」をテーマに脚本から人形、小道具、キャスト、全てが学生がーから作り上げて公演しています。

②神戸大学持続的災害支援プロジェクトKonti

東日本大震災被災地宮城県仙台市荒浜で活動を開始しました。

海辺の図書館の環境整備を86才の佐藤豊カメラマン、皆さんと一緒に進めディーチームも行います。このような活動を継続し、神戸では写真展示会を企画します。[9月30日]

つながりデザインセンター 副代表理事 海辺の図書館：これまで海辺で蓄えられてきた文化を、かけがえのないものとして後世へ残すと共に、これからの地域を楽しく考え、多様な取り組みを通して、次への一歩を踏み出せるような場所を目指しています。

③神戸大学ボランティアバスプロジェクト・第59次遠征 伝統文化復興支援 (岩手県大槌町・浪板大神楽)

ボランティアが青い半纏を着て並んで甚句を踊る姿を見て、人は誰でもどこでも輝けるのだと実感しました。

しかし、コロナ禍により来ること難しくなり、また震災からの時間の経過と共にボランティアに行く意義を外部にうまく伝えることが難しくなってきました。そんな中、大槌まで来てくれたことは、いわゆる災害の初期のフェーズの災害ボランティアからその後の生活も踏まえた災害・復興ボランティアのような長続きするものになっていきます。

都市安全研究センター・地域連携推進本部共催 神戸大学災害ボランティア活動報告・交流会



6月17日、神戸市役所危機管理センターにおいて都市安全研究センターと地域連携推進本部ボランティア支援部門が協働して学生災害ボランティアイベントを開催しました。

【第1部】第289回RCUSS オープンゼミナール「復興・被災の担い手：学生災害ボランティア」

都市安全研究センター・近藤民代教授の司会で東日本大震災と阪神・淡路大震災の被災地でボランティアに取り組む学生団体が報告しました。

コロナ禍では多くの学生団体活動が停止しました。被災地へ行けない中でも、現地とのオンライン交流や手紙の往来などで交流を続けてきた様子が報告された一方で、3年間は新しい学生へ参加の声掛けが難しく、メンバーが少なくなったり世代交代が以前のようにできない状況も伝わりました。

- 災害ボランティア活動を行っている学生
神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti (Konti)
神戸大学ボランティアバスプロジェクト (ボラバス)
神戸大学学生震災救援隊 (震災救援隊)
●神戸大学学生ボランティア受け入れ団体
一般社団法人東北まちろぼ 代表理事 橋本大樹
NPO法人エフエムわいわい 代表理事 金千秋



【第2部】神戸大学生 災害ボランティア交流会

神戸大学の災害ボランティアは平成7年の阪神・淡路大震災 (震災救援隊・総合ボランティアセンター) から始まり、平成23年の東日本大震災 (ボラバス)、同28年の熊本地震 (Konti) で取組み始めた団体とともに、多様な形で展開しながら現在まで継続しています。

第2部は仕事をしながら災害ボランティア活動に取り組んでおられる参加者と神戸大学卒業生から「社会人になって被災地での活動やネットワークは継続できる」という力強い応援メッセージから始まり、ホワイトボードを使った自己紹介やボランティア活動の目的など様々なトピックで相互交流が深まりました。

学生団体からは、現在の活動を大切にしながら、3年間履修できなかった新たな災害ボランティアに切り組みたいという希望が出てきて、橋本さんと金千秋さんに地域の方々と活動や、昭和・平成型から令和型へのアップデートや地域からの信頼を高めながら新たに参画する方法を尋ねたりしました。

阪神・淡路大震災から30年目近づき、神戸・兵庫でも復興途上の側面がある、との金千秋さんの指摘から、誰もが阪神・淡路大震災被災地を含めた災害・復興ボランティア活動に取り組む必要性を皆で確認し、来年度の災害ボランティア活動報告・交流会での再会を約束して終了しました。

(ボランティア支援部門・山地久美子)

大分県中津市との連携事業を実施しました

令和5年6月21日、大分県中津市に位置する中津文化会館で、羽森茂之教授 (神戸大学大学院経済学研究科) が「データサイエンスって何だろう?」のテーマで講義を行いました。



この講義は、中津南高等学校の要望に応える形で企画され、当日は中津南高等学校の全生徒と教職員、中津市長である奥塚正典氏、中津市議会議長の相良卓紀氏など行政関係者を含む約670名が参加しました。

冒頭の挨拶において、奥塚市長より中津市が神戸大学の前身である神戸高等商業学校の初代校長である水島鏡也先生の生誕地であることが紹介され、生徒たちは神戸大学との意外な縁に驚きの表情を見せていました。

講義を受けた生徒たちからは、「データサイエンスは情報社会において物事を解読するために非常に重要な要素であることがわかった」といった感想が寄せられました。また、「個人の主観的な経験だけで結論を導くのではなく、多様なデータから傾向を読み取り因果関係を理解することが重要であると認識した」との声もありました。

※神戸大学と大分県中津市は、平成28年4月22日に連携協定を結んでおり、出前講義はその一環として毎年実施されています。

活動報告 (令和5年4月～9月)

月	日	大学	地域連携推進本部定例会議 (第1・3木曜開催)
4月	1日	経済経営研究所	経済経営研究所に地域共同研究推進センター設置
	2日	大学	ラジオ関西「神戸大学公学ラボ」放送開始 (毎週日曜 8:45～9:00)
	3日	大学	地域連携事業・学生地域アクションプラン公募開始
5月	26日	大学	地域連携プラットフォーム設立準備委員会 (4/26、5/30、6/29、8/9)
	19日	大学	学生ボランティアサポート助成 第1期募集開始 (5/19～5/29)
	20日	国文	生野PR動画のお披露目上映会 (あさご芸術の森)
6月	23日	大学	「ボラCafe2023」春開催
	24日	大学	第1回地域連携推進本部運営委員会
	12日	大学	ひょうご神戸学第2クォーター開講
7月	15日	大学	地域社会形成基盤講座第2クォーター開講
	17日	大学	神戸大学生災害ボランティア交流会・報告会
	21日	大学	大分県中津市出前授業 (中津南高校... 経済学研究科・羽森教授)
8月	10日	大学	学生地域アクションプラン公募2次募集開始
	14日	経済	経済学研究科・神戸市経済観光局との連携協定締結
	19日	大学	「令和4年度神戸大学地域連携活動報告書」の配布
9月	25日	経済	経済学研究科・養父市との連携協定締結
	8日	大学	「2023神戸のついで」へ出版
9月	29日	大学	学生ボランティアサポート助成 第2期募集開始 (9/29～10/16)

令和5年度
神戸大学地域連携活動報告書

令和6年8月発行

発行 神戸大学地域連携推進本部

連絡先 〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

Tel:078-803-5391 Fax:078-803-5389

Email:ksui-chiiki@office.kobe-u.ac.jp

印刷 服部プロセス株式会社
